
FateBreaker

稲中卓球部

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FateBreaker

【Nコード】

N7409K

【作者名】

稲中卓球部

【あらすじ】

現実で死にそれから様々な世界へ行き、主人公の介入で原作を大幅改変する。世界を渡るごとに主人公のチート度がUP。原作レイプ、アンチ、独自解釈、そんなモノを気にしないう人だけ閲覧してください。

作者はド素人なため厳しい意見には耐えられません、優しく指摘してください。それでも、構わないのならどうぞ。感想などで指摘があればその都度修正していきます。

もしかしたら、以前読んだものと別物になっている可能性があります。

すので、**1つ注意**してください。

始まり（前書き）

改定しました

始まり

Side:飛鳥

初めまして、俺の名前は眞^{シン}・飛鳥^{アスカ}だ。

俺が某種Dの主人公と同じ名前というツッコミは、散々回りにからかわれたので無しにしてほしい。

名前以外は多少オタクという以外に目立っているものはない。

年は25歳で、しがないサラリーマンで独り暮らしだ。

家族はいない。

父親は俺が生まれる前に死に、母親も俺が小さい頃に死んだ。

元々親戚付き合いなんてしていなかったため、天涯孤独になってしまった。

母親が死んでから俺は施設で暮らした。

施設での暮らしには結局慣れる事はなかったため、中学を卒業したら就職して施設を出て独りで暮らした。

親しい友達もこれといなかったため、アニメや漫画に嵌った。

独りで生きていくことを寂しいとは思ったが、それでも生きてきたが先ほど車に轢かれて死んでしまった。

死んだことに対してこれといった不満もないしこれでいいかと思っていたのだが、何故か気づいたら目の前に大きな門があり見渡す限り真っ白い空間いた。

そして門の前には人の形をした何かが居る。

死んだはずなのに意識があることや何故かこんな場所にいることに俺は困惑した。

「よう、何しに来たんだ、お前」

「いや、俺にも何が何だか」

死ぬ瞬間の記憶があったので自分が死んだという自覚もあったのだが、この光景はまるで漫画の「鋼の錬金術師」の「真理の門」みたいだなと門と人型を見て考えていたら、突然、門が開いて何か黒いウネウネした手が伸びてきた。

「おっ何か呼ばれているみたいだな」

「なっ何だよこれ!!」

「大した事じゃねーよ、異世界に行くだけだからな」

「異世界! って何のことだよ!!」

「まあ頑張ってくれや、サービスで生前の記憶は消えないようにし

ておいたから」

黒い手に掴まれて、抵抗も出来ないまま門の中に引きづり込まれた。門の中に引きづり込まれると同時に、頭の中に色々な映像と知識が流れ込んできて、流れ込んでくる知識の多さに気が狂いそうになりながら耐えていると、自身の体が足から分解されているのが見えた。

「あああああああああああああああああああああああ
・・・・・・・・」

何とかしようとして暴れてみてもんどん体が分解されていき、頭まで分解された時そこで俺の意識は途切れた。

俺は気が付くと、地下室みたいなどこにいて誰か（以降は宿主と呼ぶ）の体の中に入っていた。

こう言われると意味が分からないだろうが、俺にはそう言うしかない。

何か魂？みたいな感じになっていて宿主の体の中に入っているのだ。気が付いて直ぐは今の状態にパニックを起こしたが、しばらくしても何も変わらないので取り合えず現状を整理してみた。

まず、俺は死んだ。これは間違いない。

死んだ後、何故か真っ白い空間に居て、大きな門があり人の形をしたナニカが居た。

ここまでは問題はない（死んだはずなのに真っ白い空間に居たことに対しての突っ込みはなしだ）

人型と話していたら門が開いて何か黒いウネウネした手が伸びてきて、そのまま中に連れ込まれた。

人型は異世界に行くと言っていたので、ここは異世界ということか。

可能性として一番高いのは『鋼の錬金術師』か。

いや、門とか人型とかどうみても『鋼の錬金術師』の世界観だしね。

何とか現状を整理できたので外界に意識を向ける。

見る限り、恐らくここは地下室なのだろう。

窓がないし、何となくジメジメとした雰囲気を感じるからだ（体がないのに雰囲気を感じるのは何故だ？）

そして宿主の前にいる者達。

どう見ても『鋼の錬金術師』のホームクルス達です。

はい、『鋼の錬金術師』の世界で決定です。

俺は原作をちゃんと読んでいない分からないことも多いが、ホーム

クルスの顔は知っている。

ホムンクルス達は宿主を『お父様』と呼んでいる。

知識の中には『お父様』と呼ばれるキャラクターに覚えがないので、覚えていないか読んだ本の中に出てきていたのか分からない。

世界移動とかこの二次創作だよと突っ込みたいが、俺には体がないので突っ込む事も出来ず歯がないが歯軋りをする。

何か宿主とホムンクルスが話してるが、俺には体がないので見ること、聞くこと、考えることしかできないので彼らの話を聞いていた。

そうして話を聞いていると自分の周り？に自分と同じ無数の魂のような存在がいることに気付いた。

ホムンクルスたちが話を終えて地下室からいなくなり、俺もやるこゝとがなくなつたので自分の周りの魂たちに話しかけてみた。

俺がこの世界に来てそれなりに時間が経つたようだ。

何故疑問系なのかというと、こんな地下室に時計などないし、窓がないから今が朝か夜かも分からない。

宿主は俺の肉体ではないので、宿主が寝ているときも俺は起きている（というか眠くならない）

そのため時間経過が分からないのだ。

なら何故時間経過が分かるのかというと、ホムンクルス達の内の一人が殺されたからだ。

宿主はこの地下室から全く動かず、今までは何も変わらなかった。でこの事実には驚いた。

珍しいこともあるものだと思った。

今までは特にやることもなかったので、周りの魂達と話していた。

最初は気付かなかったが魂たちはかなりの数にのぼるようで、クセルクスという国の国民だという。

何でもこの宿主は不老不死の法を求めるクセルクス王がその叡智を頼ってきたことを利用し、クセルクス全土を使った不老不死の法に見せかけた国民の魂を使った賢者の石の練成陣を発動させ、これを利用して宿主ともう一人以外の100万を超える国民を石に変え、クセルクスを一夜にして滅ぼしたのだそうだ。

原作をちゃんと読んでいなかったので、この事実には驚きを覚えた。

だからといって、こんな状態なのでどうしようもないが。

こんな状態だが、周りの魂たちと話しているので意外と飽きない。

かなりの数があるので話が尽きないのだ。

魂たち話の中で何故クセルクセスの国民でない俺がここにいるのかという話が出た。

俺も理由が判らないのでここに来た経緯を話すが、彼らにも分からない様だ。

宿主も何の反応も返さないので恐らく気付いていないのだろう。

そうやって考え込んでいたのだが、考えても仕方のないことだと思
いそこで考える事をやめた。

そしたら急に肉体がないのに強烈な眠気を感じ、抗う暇もなく俺の
意識はそこで途切れた。

Fate/stay night 編プロローグ(前書き)

Fate/stay night 編 始まります

Fate / stay night 編プロローグ

Side：飛鳥

先ほどから閉じていた目を開ける。

ここはあの世界に行く時にいた見渡す限り真っ白い空間と真理の門だ。

はて、何故またここに？

「よう」

門の前にいた人型が居た。

「おい！あれはどういうことだよ、気が付いたら人の体の中で魂でだけとかさ。しかも何でまたここに！！」

「あゝ悪いな。あれは手違いで、間違えてしまっただけで、間違いに気付いて慌ててここに連れてきたんだ」

門の前にいた人型は俺に苦笑いしながらすまなそうに答える。

「はあ！！間違いつて……………テメエ」

「すまんって本当に……………あと言いづらいんだがお前に魂が4つ程ついてきててな。また別の世界に行ってもらうことになる」

4つの魂という言葉に特に仲の良かった奴らを思い浮かべる。

「もしかして

か？」

「ああ」

人型は俺の出した名前に頷く。

「オーマイガー……………」

俺は上を向いてそう言わずには言えなかった。

「お前を間違えて行かしてしまったことに気付いて、慌ててお前をここに連れてきたんだがな、なぜか一緒に付いてきちまったんだ」

「元に戻すことは……………」

「それも無理だしな。一緒に連れて行くしかないな」

最初は殊勝に言っていたのに面倒そうな仕草になっていく人型。

「はあ分かった、仕方ないな。彼らと話すことはできるのか？」

「悪いが、それはできそうもない。どうも無理に連れてきたせいか
意思が薄くてな」

「そう、か」

結果的に俺の所為で連れてきてしまったので謝りたかったのだが、
それではどうしようもないか。

だが、

バコッ！！

俺は人型に近づきその頬を殴り飛ばした。

「クッ！」

「怒りが消えたわけじゃないが、どうしようもないからそれで許してやるよ」

人型は声を挙げたが痛がる素振りはない。何も言わないのは俺の気持ち
持ちが分かるからか。

「……………さてと他の世界に送るわけだが、これからは他の
世界に行くときは何か一つ簡単なものなら叶えてやるう。さあ何
にする？」

「……………そうだな、なら一度覚えたものを忘れない
ようにと、今までのこと忘れないようにしてくれるか？」

もっと便利な能力も考えたが、彼らのことを忘れたくないからこの
能力にした。

「そんなのでいいのか？ ……よし、これでいっせよ。
さあ行つて来い！！！」

人型がそう言った瞬間、真理の門が開き黒い手が伸び、俺を掴む。

「へっ？ またこれか！ ちょっと待ってもっと優しくしろっつう
うっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつうっつう」

掴まれたまま門の中へ入っ ていき、直に声も聞こえなくなった。

「やれやれ、やっと静かになったな」

その言葉と共に、開いていた門も閉じその空間に静寂が戻った。

門の中に引きずり込まれた俺は、ここに初めて来たときと同じく頭の中に色々な映像と知識が流れ込んで来る。

前回と違い、流れてくるのは並行世界中の一人の男が歩んだ人生の記憶だった。

全ての始まりは地獄。

原初の願いは「正義の味方」。

だが、歩んだ道筋は世界によって異なる。

ある世界では、自らの折れかけた思いを相手の生き方の中に再確認

し合い、最後にはその思いを貫くためにそれぞれの道を選び、別れた。

ある世界では、自身が歩むことになる険しい道突きつけられたが、それでも生き方を変えなかった。

ある世界では、「正義の味方」という道捨て、大切な人の味方でいることを選んだ。

数多の世界で、救ったことがある、救われたことがある。

数多の世界で、救えなかったことがある、奪ったことがある。

数多の世界で、後悔があり、悲しみがある。

「体は剣で出来ている

血潮は鉄で、心は硝子

幾たびの戦場を越えて不敗

ただ一度の敗走もなく

ただ一度の勝利もなし

彼の者は常に独り剣の丘で勝利に酔う

故に、生涯に意味はなく

その体は、きつと剣で出来ていた」

その、どこか悲しい詩を聞きながら俺の意識は途切れた。

Fate/stay night 編プロローグ(後書き)

改定しました

少年編 出会い (前書き)

5月12日修正しました。

少年編 出会い

Side : 飛鳥

そこは地獄、そう形容するのが相応しく、そしてそれ以外に形容の出来ない光景が周囲に広がっている。

その地獄の中で二人の少年が、フラフラと頼りなく歩いていた。

「ハア ハア 士郎、大丈夫か？」

黒い髪の少年が、肩を貸している赤い髪の少年 士郎に向かって息を切らせながら言った。

「大丈夫 だよ、飛鳥兄」

士郎が、朦朧とした目で飛鳥を見て微かに聞こえる声で答える。

その姿は飛鳥の手がなければ、今にも倒れそうだ。

「そうか、頑張ってくれよ」

飛鳥は、肩を担ぎなおしながら、体に掛かる泥のような空気を抜くように気合を入れ直す。

肌を感じるのは熱風、耳に聞こえるのは悲鳴、助けを求める声、鼻をつくのは生き物が焼ける匂い、そして視界を占めるのは焼け焦げ、

黒く炭化した人間”だった”者達……。

悲鳴が、哀願が……まだ生きている者達の救済を求める声が、輪唱となって聞こえてくる。

それらを振り切って、ただひたすら前を見続けて歩く。

今の俺には他人を救えず、この手は今もはやただ一人になってしまった家族しか守れない。

そう一人しかいないのだ。

父さんや母さんは俺達を守って死んだ。

父さんは死ぬ間に俺達に言った。

「父さんは家長だからな、お前達を助ける」

そう言っつて、燃えさかる車から俺達を助け出して逝った。

母さんは死ぬ間に俺達に言った。

「あんた達は行きなさい、あんた達を産んだ時に比べればこんな痛みなんとも無いわ」

そう言っつて、迫り来る炎から俺達を守って逝った。

(クツ！俺はこうなるかもしれないと知っていたのに！！)

この大火災も発生するのは知っていたが、正確な時期が分からなか

つたため碌な手を打てなかった。

それでも出来る事があったのではないかと今になって思ってしまう。いや、俺は幸福だったからそんなことはあるはずがないと思っていた。

前世では家族と一緒に暮らした記憶がなかったので、家族と一緒にいる時間は幸せだった。

両親が居て、双子の弟と共に日々を過ごした。

弟の士郎で、見た目がまんまFateの登場人物だったのでここは『Fate/stay night』の世界ではないかと考えた。

もしそうだとしたら関わりあいになりたくないと考えて、士郎を遠ざけたのだが、どれだけ遠ざけても俺の後をついてくる士郎を見て愛情を感じてしまった。

それからは何処に行くにも何時も一緒にいたし、士郎の姿が見えないと捜してしまい両親にもそれで冷やかされたが悪い気はしなかった。

俺はそんな家族が大好きだった。

だから、変な事を言って家族に嫌われたくなくて何もできなかった。なのに、こんなことになってしまった。

そう考えながら歩いていると、担いでいた士郎の体から力が抜けて

いくのを感じた。

「士郎!!」

担いでいた手が抜け、士郎が地面に崩れ落ちた。

「士郎! しつかりしろ!!」

「飛鳥兄……俺……もう………だめ………だ」

地に伏せた士郎は切れ切れに呟いた。

「だめだ! 諦めるな! くそっ!! だ、誰か……誰か、神様でも何でもいい、弟を、士郎を助けてくれ!!」

俺は何もできない自分を呪うように、黒い太陽を見上げて絶叫した。

決して誰にも届かぬ願いを込めて。

届くわけがないとわかっていながらも、叫ばずにはいらなかった。

S i d e : 切嗣

右手を焦がす熱き灼熱を以って、己がサーヴァントに最後の命令を下した切嗣は、虚ろな瞳で空に輝いていた黒い太陽を両断する眩い光を見つめていた。

光の収束と共に、そこにあつた孔もまた消え去つた。泥を吐き出す孔は防がれ、これ以上災厄が降る事はない。ただ今なお延焼を続ける炎だけは、留まる事無く街を焼き焦がしていたが。

空の孔の消滅、聖杯の消滅により、代わりに切嗣の心に穿たれたように空虚な洞を作り上げていた。

「まだ、だ……」

痛む身体を引き摺り切嗣は炎の海を渡り行く。

この世に切嗣の願いを叶えるモノは既にない。

この手で繰り返してきた殺戮という名の救済もまた行えない。

ただ許されるのは、後に残った地獄から、少しでも多くの命を掬い上げる事だけ。

人は……いない。

泥に飲まれたのか、焼け焦げたのか。

倒壊した家屋の下、僅かに覗く腕も血に濡れて、あるいは千切れて、ヒトなんていない。

その光景を、衛宮切嗣は齒を食いしばりながら走っていた。

(どこだ、どこにいる！ いてくれ、いて欲しい！)

その一念だけが彼の中にあつた。

心を埋め尽くす絶望の黒。

理想を焦がす灼熱の赤。

赤と黒の入り混じる世界で、切嗣には涙を流す事さえ許されない。

身に付けるコートは左腕の肘辺りが破れ、右袖は無く、走るたびにバタバタとはためく裾は焼け焦げてボロボロだった。

吐く息は不規則で、がむしゃらに走ってきたのが窺える。

走る。目的も無く。いや、目的はある。ただ、それがどこにあるか、衛宮切嗣に判らないだけで。

「……………を助けてくれ!!」

「……………」

そして、見つけた。

見つけられた。求めていた物。探していた物。自分が望んだ物。

いや、この際どつでも良い。

自分はただ、

S i d e : 飛鳥

黒い太陽を両断する眩い光を、見上げていた俺は視界の端に動くものが見えた。

そちらに目を向けると、着ているコートは左腕の肘辺りが破れ、右袖は無く、裾は焼け焦げてボロボロで虚ろな瞳をした男が此方に走ってきた。

男が近くに来て俺と土郎を確認した瞬間、顔がクシャリと歪みその目からは涙が溢れた。

俺はしばし呆然としたが、藁にも縋る思いで男に迫った。

「頼む！ 弟を助けてくれ！！」

男は俺と土郎を見て、顔色を変えた。

土郎の呼吸が浅くなって行くのに気がついたからだ。

男は土郎の横で跪くと、突然躊躇なく、自分の胸に指を突き立てた。

俺はいきなり何をするのだと、声をかけようとした瞬間、固まった。

男のその手の中に黄金の光を放つ鞘が現れたからだ。

その黄金の光を放つ鞘からあふれる光は、先程から俺の体に掛かる泥を祓ったように感じた。

まるで、鞘が浄化したようだ。

男は鞘を土郎の胸に添えた。

鞘が分解し、光の粒子になって土郎の体に染み込んでいき、土郎の呼吸が元に戻っていった。

俺はその幻想的とも言える光景を、呆然と見ていた。

光の粒子が全て土郎の体に消えた時、土郎の呼吸は完全に通常通りになっていた。

それと一緒に見ていた男の顔を見て、俺は思った。

救われたのは、土郎なのにまるで……そう、男が救われたみたいだと。

「あんたは……一体何なんだ？」

俺は気づかぬ内に、男に問いかけていた。

「僕はね、魔法使いなんだよ」

それは、「魔術士殺し」「衛宮切嗣と」「異世界からの転生者」、後の衛宮飛鳥の出会いだった。

少年編 出会い (後書き)

切嗣と飛鳥の出会い。 飛鳥と士郎は双子で、飛鳥は兄、士郎は弟
という設定。

少年編 変革の火 (前書き)

5月12日改定しました

Side : 士郎

瞳を開いた。きつと、閻魔様が神様がいるんだろうと思っていた。

けれど、その期待は酷く裏切られて、あつたのは白い天井。

そして、眩しいくらいに光る蛍光灯の光だった。

けれど、ここが天国でも地獄でもないとわかった時に、僕は生きていると、それだけを理解した。

(ここはどこだろう?)

そう思い、部屋を見渡して見ると包帯を巻いている人とか、腕が無い人とか、足が無い人とか、髪の毛がなくなっている人とか、色んな人がいた。

そして隣りには、飛鳥兄が寝ていた。彼らに比べれば、僕達は傷はないようなものだ。

僕達は、ここの人達は助かったのだと、怪我をしながらも助かったのだとわかった。

おもむろに視界を動かす。窓の外、最後に見た鉛色の空とは違い、青い空がそこにあつた。

その空が、たまらなく、もしかしたらこの世に存在していないんじゃないかってくらい、美しくキレイに見えた。

そう思った途端、何故だか知らないけれど涙が溢れて来て泣いてしまった。

手で涙を止めようとしたけど、止まらなかった。泣いていると、頭を撫でる感触を感じ手をどけて、そちらに目を向ける。

先程まで、隣りで寝ていた飛鳥兄が僕のベッドに腰掛けていた。飛鳥兄には何も言わずただ頭を撫で続けた、僕はそれに安心して更に泣いてしまった。

それは、泣き止んだ僕が飛鳥兄とこれからどこで暮らして、誰と生活をするのだろうかと話していて、子供心ながら漠然と不安を覚えていた時だった。

ひょっこりと、何でもないようにその人は現れた。

しわしわのコートを羽織って、くしゃくしゃの髪をして、病院の先生より、ほんの少し若そうなその人は、お兄さんという風貌だったと思う。もしかしたら、普通の親父だったかもしれないけれど。

おじさんは、僕と飛鳥兄を見て、

「こんにちは。君が士郎君で、君が飛鳥君だね」

とんでもなく爽やかで、とんでもなく嘘っぽくて、とんでもなく胡散臭くて、とんでもなく優しい声だったんじゃないかと思う。

「率直に聞くけど、このまま孤児院に預けられるのと、初めて会った僕　おじさんに引き取られるのと、君達はどっちがいいかな？」

きつと不器用に、僕達を引き取ってもいいよと言っているんだと思った。飛鳥兄が親戚か何かかと聞いたら、全くの赤の他人だよなんて、即効で返してきた。

少しは嘘くらいついた方がいいんじゃないかって思った。この人はきつと、嘘が苦手なんだろうなんて、思った。

少し放っておけないような人だったような気がするけれど、どの道孤児院もこの人のところも、僕にとっては何も変わらない。それなら、なんとなくこの人の所に行こうと思った。

そのことを飛鳥兄に言ったら、少し考えていたが了承してくれた。

「そうか、なら膳は急げ。早く身支度を済ませちゃおう。新しい家に一日でも早く慣れなきゃいけないからね」

その人は、僕達の事なんかお構いなしに、慌しく荷物をまとめていく。その手際は、子供の僕が見ても、決して誇れるようなものでもなく、どちらかというと下手だった。

さんざん人の荷物を散らかして纏めた後、何かを思い出したように僕達を見て、

「うちに来る前に、一つ教えなきゃいけない事があるんだ」

いいかな、と。本当これからドライブでもいこうかなんていう気軽さで、その人は僕と飛鳥兄の瞳を笑顔で見つめて、

「僕はね、魔法使いなのだ」

なんて、今時子供でも胡散臭そうに顔をしかめる台詞を、その人はホンキでマジメで、堂々と、言っただけだ。

一瞬だったと思う。その時やっぱり自分は子供だったのだと思っただ。だって、この人の言葉を、本当かどうか何て確認すらしないで、僕は、

「うわぁ、爺さん凄いな」

なんて、眼を輝かせながら言ったのだ。飛鳥兄がそんな僕を呆れた目で見ていたのは気づかなかった。

それが僕達が『衛宮』という姓を得て、僕は衛宮士郎となった瞬間だった。

時々、自分の名前をフルネームで言って、切嗣親父と同じ苗字だと言っ事が、たまらなく誇らしかった。

このことを僕は、後に飛鳥兄に散々弄られる羽目になるのはこのとき思いもしなかった。

S i d e : 飛鳥

切嗣……親父の家に来て、俺達の性が「衛宮」になってから一週間が経った日の事だった。

士郎は遊びに出かけていて、今、この家には親父と俺しかいない。

俺は、この世界に生まれたときから考えていた。この世界に来る時に見た、一人の男の生涯。

その男が誰かというのは、前世での知識と推測から大分前に分かっている。

それは俺の弟「エミヤシロウ」だ。

あそこで幾つもの「エミヤシロウ」の生涯を見たが、恐らくそれは並行世界の記憶なのだろうと思う。

その中で衛宮士郎の辿る一つの可能性の一つ。

切嗣の理想である「正義の味方」を目指し、死すべき運命にあった

百人を救うため世界と契約し、奇跡の代償として英雄とまで呼ばれるようになった。

だが、理想を追い続けたその生涯は報われることなく、彼は自分が助けた相手からの裏切りによって命を落とす。

それでも誰一人恨まなかった彼は、死後にその魂を英霊としてまで、正義の味方になることだけをただ一途に望んだ。

が、英霊としての彼に与えられた役割は、自分が救うことを願った人々を虐殺することで人類全体を破滅から救う「守護者」であった。拒むこともできないまま永遠に望まぬ虐殺を繰り返し、さらにはそれを通して人々の醜い面を延々と見せつけられた結果、彼の信念もついに摩擦し、抱き続けた理想に絶望して、かつての生き方を憎むに至った。過去に戻って、衛宮士郎を自らの手で抹殺することにより自身を消滅させることを願う。

召喚の触媒になったのは凜が父親から譲り受けた宝石のペンダント。凜が士郎の命を救うために用いたそれを彼は生涯大切に持ち続けていたため、召喚者である凜との縁となる。

今となってはもはやこの世界は『Fate/stay night』の世界に間違いはない。

ならば、俺のやるべきことはなんだろうか。

英霊「エミヤ」の生き方は確かに尊敬に値するが、士郎を死なせるわけにいかないし、士郎には幸福になってほしい。

これは俺の勝手な考えだが、士郎の幸福には「正義の味方」という理想は必要ないと思う。

今の士郎は切嗣を尊敬しているから、切嗣が「正義の味方」のことは言えばそれを目指すというだろう。

それは何としても阻まなければならないだろう。

それに聖杯戦争のこともある。

だから、

「話とは何だい、飛鳥？」

「親父、「魔術師殺し」のあなたにお願いがあります」

S i d e : 切 嗣

「親父、「魔術師殺し」のあなたにお願いがあります」

僕は、テーブルを挟んだ向かいに座る飛鳥のその言葉に、心臓を鷲掴みにされたかのように感じた。

知っているはずが無かった。それは絶対と言っていい。

手が震えていた。何度も手を握り替えて、震えていた手を止めようとした。

「なっなぜ、君がその名を・・・」

僕の声は情けないほどに震えていて、か細い声しか出てきてくれなかった。

「あなたには全てを話す。親父が死の病にかかっていることも、あと数年で死ぬことも。俺が知っていることを。そして助けてほしい。あなたの力が必要なんだ」

飛鳥は、僕の目を逸らすことなくただ真剣に見つめてくる。

士郎を助けるときに、鞘を出すところ見ていたのだから魔法使いと言っていたから何時かは言われると思っていた

だが、これは完全に予想外だ。知るはずの無いことを知っているのだから。

僕は飛鳥を用心深く調べていた。それは父としてではなく、身を守るものとして。

彼は殺しに来た者の目ではない。知っているような目で、助けを求

めてきている。

(どうするか……)

その目で自分をじっと見つめている。かなり追い詰められているように見える。

「ふう……」

僕は大きく息をつく。

変な厄介ごとに巻き込まれそうだが、話だけは聞いてみるか。

あれだけの真剣な目をしていては、助けてやらねばなるまいだろう。自分への懺悔として。

「いいだろう。信じる信じないは別でとりあえず話だけは聞くよ」

僕は考えてもいなかった。

それが、僕にどれだけの救いになるのかを。

S i d e : 飛鳥

俺は、知っている全てを親父に話した。

自分が、異世界からの転生者であることや、こことは違う世界。

そして、こちらの世界に来る時に見た男の生涯。

その中であつた、これから起きる第五次聖杯戦争、その真実を。

通常、インターバルに通常60年かかるのにすぐに聖杯戦争が起これるのは、前回の聖杯戦争では呼び出された聖杯が結局使われないままに終わり、次回の開催が早まる原因になっていること。

生前の原作知識というのは秘密で、第四次聖杯戦争の内容や、士郎に埋め込んだ鞘についてまで。

「
ということなんだ」

「そう……か……」

親父はあまりの情報に頭の中を整理し、落ち着かせるのが苦心しているようだ。

(まあ、異世界からの転生者とか、こことは違う世界とかすぐに信じられないよな)

俺がそう考えている間に、親父は状況を確認し整理し、そこから想定される答えを導き出す。

その答えに

「ふう……………」

親父は大きく息をついた。

「ダメか？信じちゃくれないか……………」

俺はこうなる事は想定していた。自分ですら今の状況が、滅茶苦茶なものだとわかっている。

そんな状況を、彼が納得するわけがない。

「いや、まあね……………」

「しょうがないよな」

俺も何も知らなければ相手の正気を疑っているはずだな。

「それで、君は桜って子を間桐から助けたいんだね？」

「それと、間桐臓硯の抹殺かな」

原作を知っているため桜の境遇をどうにかできないかと考え、親父に救出を頼む。

それと不確定要素になりそうな間桐臓硯の抹殺を頼む。

「フム……」

親父はそのまま考え込んでしまった。

「それで、助けてくれるのか？」

桜を助けるには親父の助けなしには救出は不可能に近い。

今の俺は知識があるだけで、他は一般的な子供と何も変わらない。

何とか親父の力を借り、桜を助け出さねばならなかった。

彼女には幸福になってほしいと俺は思う。

「わかった。助けよう」

親父の言葉に逆に俺が驚いてしまう。

「えっ！ いいのか本当に」

「まあ、正直信じがたい話ではあるけど、真実だとしたら流石に放つてはおけないしね」

「ありがとう！ 親父!!」

俺はその言葉に、テーブルを飛び越えて親父に抱きついた。

Side: 切嗣

(やれやれ……………)

抱きついて、喜びを表す飛鳥を見ながら心の中で嘆息する。

確かに聞いた話は、荒唐無稽で信じがたい話ではあったが、何故かすんなりと信じる事が出来た。

他人が知りえない話だったというのもあるし、何より話に納得できる部分も多かった。

何より……………

(もし、飛鳥の言うように第五次聖杯戦争が起きるとしたら、イリヤが聖杯になる可能性が高い)

それを認めることなど出来なかったし、飛鳥の話しているときの目を見て嘘はいつていないと思った。

(さて、この子の言うことが本当なら僕の死期まであと数年か……………

・・・出来る限りのことはしなければ。未来を変えるために)

この日、火が点いた

それはまだ種火ように小さな火。

少年編 変革の火 (後書き)

イリヤを連れてくるべきか、連れてこない方がいいのか、悩む

Side : 士郎

今、俺達は手に二刀の木刀を持って衛宮家の道場で向かい合っている。

二人の構えは全く同じ。違うのは、飛鳥兄の纏う空気と底冷えするような冷徹な双眸。

一言も発することなく、飛鳥兄が一步踏み込んできた。

「せいっ!」

「はっ!」

迫り来る上段からの一振り、だがそれを、右の刀で受ける。

が、それほど甘い攻撃ではない。それを悟り、左の刀も受けの構えを取る。

再度、踏み込んで込んできた一撃から、反撃する隙も見いだせず、ただひたすら受け流し、受け止め、弾き返す。

手加減されていることは重々承知している。

「はあ はあ」

それでも一合、二合、三合と一撃受ける事に体勢を崩され、息が乱れる。

飛鳥兄は刀を滑らし、後方へと飛ぶ。同時に、力を入れていたその二刀が上がり、その胸ががら空きになる。

飛鳥兄はステップを踏み、後ろへとやり過ごした間を、一息で前へと出る。

そこで、繰り出すは横薙ぎの一撃。

「クッ!!」

だが、その一撃を俺は咄嗟の防御により、かるうじて防いだ。

否、防いだだけだ。その衝撃に顔を歪め、だがしかし、負けぬと瞳が光る。

右へ左へ、上段へ下段へ、振り上げ、振り下ろし、薙ぎ、払う。

カンッ　カンッ　カカンッ

木刀を打ち合う音が、道場に響き渡る。

「シッ!!」

「がはっ!!」

勢いよく繰り出した横薙ぎの一撃は、避けられ、飛鳥の木刀が綺麗に土郎の腹部へと吸い込まれていき、道場に仰向けに倒れる。

「ふう………土郎、大丈夫か？」

「痛てて、もっと手加減してくれよ、飛鳥兄」

飛鳥兄はそこから動くことなく、痛がる俺を見下ろしていた。

「これでも十分に手加減してるんだけどな………」

そんなことを言う兄をジト目で見上げながら、打たれた腹部を擦り起き上がる。

「大体、木刀を持ち始めた時間は同じなのに、この差は何だよ……不公平だ、不平等だよっぱり人間は才能か、才能なのか？」

「あゝ、まあそんなに気にするな、俺の場合は見本があったからな。ホレ、飲め」

投げ渡されたアクエリアスを受け取り、蓋を外して飲む。

「さて、今日はここまでにするか。そろそろ親父が帰ってくる頃だからな」

「うゝ、何か誤魔化された気がする」

拗ねる俺の頭を、飛鳥兄は笑いながら撫でる。

「そう拗ねるな。お前は間違いなく強くなってるよ。それに今日は新しい家族が増えるんだから、その分料理を作らないといけないんだよ」

「へっ？」

言いたいことだけ言って、何を言っているのか理解できていな俺を置いて、飛鳥兄は一人さっさと道場を出て行ってしまっ。

「なんでぞ」

俺の声は道場に寂しく響き渡っていた。

S i d e : 飛鳥

俺達が「衛宮」の家に来てから早くも一ヶ月の月日が経った。

俺は士郎との日課である訓練を終えて、台所に行きこの日のために買ってきておいた食材を冷蔵庫から出し、調理を始める。

「いくぞ食材共よ　調理される覚悟は充分か……………」
「つてな。何やってんだ俺」

と、ちよつとネタに走ってみるが、恥ずかしくなってしまった。

この家に来て気付いたのだが、この家の人間は料理を作れない。（
士郎はそもそも埒外だから仕方ないとして）

親父は、

「親父、何やったのさ……」

「いや、ラーメンを作ろうとしたんだけどね……」

「……それでどこをどうすれば台所がこんな惨状に？」

「……家事は苦手なんだよ」

「苦手ってレベルかこれ？」

「……」

だし、この家に入り浸っている藤村大河（俺と士郎は藤姉と呼んでいる）には作らせてはいけない。（一度作らせたら形容しがたいものが出てきた）

あれは人間が食べられるものではない。

ならば、俺が作るしかなくその知識、技術の全てを持って最高のものを作った。（料理を食べたときのみんなの顔は凄い事になった）

それ以来、料理は俺の仕事となってしまうた（というか家事は全て

俺がやっている)

前世での独り暮らしが長いので一通り家事はできるし、料理には自信がある。

これといって特技のなかった俺の唯一つの自慢だ。

今思うと、もし施設暮らしでなければ俺は料理人になっていたかもしれない。

さて、今日の訓練で士郎に圧勝したが、最初に訓練しているときに気づいたのだが『この世界』にくるときに見た「エミヤシロウ」の動きを真似てみたら、何故かしっくり来たのだ。

双子というだけあって「エミヤシロウ」の動きが俺にも合っている様だ。

だから、未来の「エミヤシロウ」の動きをトレースしている俺と士郎に差が生じてしまっているのだ。

流石に真面目のやっている士郎に悪いとは思うが、士郎の実力は俺の吊り上げられて上がってきている。

まあ、将来必要になってくるだろうからこれはいいことなのだろう。

それで勘弁してもらおうとしよう。そうやって思考に耽りながらも、無意識下で体は調理を続ける。

「ふむ。今日も我ながらうまい」

出来上がった料理を味見しながら、自画自賛してみる。

ガラガラッ

「ただいま、今帰ったよ」

玄関の音と共に親父の声。

「さて、ちょうど料理も出来たし、新しい家族を迎えに行くか」

俺は掛けていたエプロンを外し、玄関に向かう。

Side：土郎

「なんでもっ」

俺の今日、二度目の台詞が口から出た。

飛鳥兄から御飯が出来たと呼ばれたから居間に来て見れば、そこには自分と同じぐらいの少女がいた。

驚く、と言えば驚いた。不信、と言えば不信すぎた。

けれど、この養父は、こういう時はどうしてか馬鹿正直なのだ、共に過ごして一ヶ月で理解した。

散歩に行ってくるという、出て行って数時間。飛鳥兄曰く、一緒に帰ってきたという。

「親父、もう一度言ってくれないかな？」

「うん、士郎に妹が出来たよ」

「どうやら、聞き間違いではないらしい。」

「えっと名前は？」

「とりあえず名前を聞いてみる。」

「あ、あの私、間桐桜じゃなかった、衛宮桜と言います。今日からよろしくお願いします」

「親父の仕業？」

「コクリと頷いた。」

「親父いいいい！ あんた何誘拐してきてんだあああ！！」

この日、衛宮家に大きな声が響き渡った。

Side：飛鳥

「つまり誘拐じゃないと？」

「う、うむ」

現在、衛宮家ではリビングに座り家族会議が行われていた。

俺は一人外れて料理を並べる。

「この少女は悪い魔術師のところから助けてきた」

と、どこか自身満々に答える親父に士郎は疑問符を返す。

「はあ？」

「詳しく説明できけど、少なくとも本人の意思でここに連れてきた

んだよ」

親父はどこか苦々しい顔して、士郎に答える。

(確かにアレは言えないだろうな……………)

俺は継承した知識を思い浮かべて暗澹とした気持ちになるが、表には出さず料理を並べ続ける。

「飛鳥兄はいいのかよ？」

「俺？ 俺は文句ないよ。こんなに可愛い妹が出来るんだ。それとも何か士郎は嫌なのか？」

「うっ！ そりゃ俺もさあ……………」

士郎がチラリと桜を見る。

「あ、あの、駄目ですか？」

ウルウルと士郎を涙目で見る桜。

「わっわかったから、その目で俺を見ないでくれ!!」

「なら、問題なし。さあ料理が冷える前に食べよう」

一人悶えている士郎を放って、俺は席に着き桜に食べるように促す。

「あ、あの……………僕は」

あつ親父のこと忘れた。

Side: 桜

「おいしい」

私の小さな声で呟く声を聞いた飛鳥さんの表情がわずかに緩む。

「ありがとう。そう言ってもらえて嬉しいよ」

「いや、本当に飛鳥の御飯はおいしいね」

「確かにうまい。……………そう言えば兄貴ってどこで料理習ったんだろ？」

今日の衛宮家の夕食は肉じゃが。

「でも、その本当にいいんですか？」

私はいつの間にか箸を茶碗の上に置き、土郎さんに尋ねていた。

「ああ、親父の話が本当なら君を追い出すわけにはいかない。だから君はここで暮らしていいんだよ」

私はそう微笑む土郎の顔を見て顔を赤くしてしまう。

「ありがとうございます」

そう呟く私の目からは涙が幾つも落ちてきた。それを見た飛鳥は、桜にハンカチを渡しながら土郎に

「ところで、土郎もいつまでも君じゃ可愛そうだろ？ 桜って呼んでやれよ」

「え？」

今更気づいたように頭にクエッションマークを浮かべる。

「だから、これからは家族なんだろ？」

「あ」

その言葉に切嗣のほづが反応した。

「ああ、そうだな。これからよろしく桜。家族になったからには桜も大切な人の一人だ」

「はい。ありがとうございます。その……兄さん」

「お礼ばかりだな桜は。しかし、兄さんか。言った事はあるけど言われるのは初めてだから、なんかテレる」

「俺は今までお前の兄貴をしてきたからな。兄さんごときではテレん！」

「飛鳥お兄様？」

「ゲハッ！」

「お父様？」

「グフッ！」

咽ている飛鳥、切嗣と布巾を取りに台所に行った士郎を見ながら、

（少し変わった人達だけど、優しい人達だ……）

私はまた泣きそうになりながら、今ここにいれる幸せを感じていた。

Side：飛鳥

「じゃあ、桜は離れの部屋を使ってくれ。どこでもいいからな」

俺は食事の後、桜に家の案内をしている途中、疑問に思っていることを聞いてみた。

「そっぴや桜、キミ…なんで遠坂の家には帰らなかったの？」

「私…お父さんにもお母さんにもとつてもイライナイ子なんです。だから、お父さんはあんなに嬉々として私を捨てたんだと思います…。お母さんは優しくかったけど、きつと心の中じゃ…」

(何だか重いな、聞いたらまずかつたかなあ……。つか、桜ちゃんの目が死んだ魚の目になってる!?ま、まあ、この反応が普通なんだろうな。俺ドンびきだけど。)

あの遠坂時臣も自分なりに娘の幸せを願っていたんだろうなとは思う。時々、忘れそうになるが、普通が一番なのだ、普通が。普通に家族と暮らせると言う事は実は凄く幸せなことなのだ、と言うのは前のの世界に居た時から常々思っていたことだ。現在進行形で普通から外れているが。

「だつ大丈夫だ、幸い、部屋も余ってるしそれに広い家だし、それに俺達はもう家族だしね。遠坂の家には気持ちが落ち着いたら、挨拶に行けばいいしね。」

(いっ言えない、そうしないと死亡フラグが立ちそうだからとは！)

内心を覆い隠して、頭を優しく撫でてあげる。

「はい。ありがとうございます」

撫でる俺を見ながら笑顔になる桜を見て、彼女が幸せになってくれるように願った。(後、死亡フラグが立たないことを)

少年編 新たな家族 (後書き)

桜は蟲による調整を受ける前に助けられたという設定でいきます。

Side : 切嗣

魔術師としては異端だが、僕は三人ともに魔術を教えた。

三人の魔力回路を潰して、関わらせないようにしようかとも思ったけれど、きつと起こるだろう未来の聖杯戦争で飛鳥が家族を守れるように、士郎が家族を守る飛鳥を支えられるように、桜が己に負けないようにするために教えることを選んだ。

平凡な人生を与えて運命に背を向けて生きさせるより、力を持って運命をねじ伏せる可能性を残すべきなのかもしれないと、そう思ったからだ。

だから、僕は三人に精一杯魔術を生き残るための知識を与えた。運命を縛ってしまったが故に、その運命から抜け出す機会をちゃんと活かせるように。

魔術は初めは単純だけれど、単純故に大切。それが、魔術だ。何事も基本は大事だ。

だけれど、こと魔術に関して言えば、その基本を持っていなければ、魔術を使うことすら出来ない。

大源を小源へとつまりは、人間が扱える代物に変換するための機関マジックサーキット魔術回路を呼び起こせなければ意味がない。

その点、魔術回路を開く為の回路作成に関して言えば、飛鳥も土郎も桜も難なくクリアした。それは魔術師としては喜ばしいことだ。

だが、一人の父親としての衛宮切嗣という男にとってみれば、複雑な気分ではあった。

そして今は、飛鳥と二人で土蔵の中で初めての魔術を行おうとしている。

「親父、魔術回路が出来たら次はどうするんだ？」

「自分で決めた呪文スペルがあるだろう？ それを使って自分の出来そうな事をしてみなさい。」

「わかった」

この後、僕は飛鳥の話当真には理解していなかったのだと思いきらされた。

「そつだ、心を落ち着けて、自分の体を流れる血脈を意識するよう
に」

「・・・・・・・・・・」

「よし、そのまま」

トレス・オン
「投影開始」

その呟きは自己暗示。自己を魔術神秘を行う一つの機関へと変革さ
せる儀式。火箸に似たものは背骨をずぶずぶと侵食する。

それは、魔術回路、つまりは、魔力を通す擬似神経がその身に創造
されているという事実。

そして、それを行う俺自身の中身は空っぽ。空っぽにするのは簡単
だ。思考を白紙にし、自身はただそこにあるだけの存在。故に、た
だ魔術を行うだけの機械となる。

接続された擬似神経に魔力を通し、自分に出来る魔術をする。恐ら
くだが、俺が出来る事は士郎と同じだろう。

だから、イメージする。魔力を使って、それをイメージする。曖昧
な形を現実の物とする。どんな構造かを意識の中から汲み取る。

そして、魔力を通す。ゼロから創造する。ただそれだけが俺に出来
る唯一の魔術はずだ。

(創造理念を鑑定し

基本となる骨子を想定し、

構成された材質を複製し

製作に及ぶ技術を模倣し、

成長に至る経験に共感し、

蓄積された年月を再現し

あらゆる工程を凌駕し尽くし、

ここに幻想を結び剣と成す)

今ある力を振り絞って、手の中に剣を生み出す。

「っ はあ、はあ……はあ……」

「飛鳥！ 大丈夫か!？」

慌てて駆け寄る親父が、俺を抱えようとした瞬間、固まった。

「大丈夫だよ、親父。ちょっと、疲れただけだから」

「…………… 太郎、この剣は約束された勝利の剣か？」
エクスカリバー

「ん？ ああ、取り合えず思いついたものをやってみただ。けど、これは駄目だなこれは外見だけで中身がない。俺のイメージが足りないのかな……………」

そこまで言って、手の中から剣が落ち、同時に俺の意識は遠のいた。

Side：切嗣

魔術で何かをした飛鳥が倒れて、慌てて抱き締めながら、飛鳥が落とした剣をじっと見つめた。

「約束された勝利の剣」
エクスカリバー

そう、それは確かに自身のサーヴァントが使っていた剣だった。

湖の精から授かった、至上の聖剣。人々の「こうあって欲しい」という願いが形と成った神造兵装であり、星の鍛えた「究極の幻想」所有者の魔力を光に変換、集束・加速させることで運動量を増大させ、神霊レベルの魔術を行使する。

あれはこの世に二つと無いはずだ。それが、今、目の前にある。

確かにこれには中身がなく、外見だけだ。

だから、

「あれは、エクスカリバーとは違うものなのか？」

そう、あれは既に存在しない剣。

「とりあえず、飛鳥を部屋に寝かさないといけないか……」

一時的な疲労で眠っている飛鳥を抱きかかえ、飛鳥の部屋へと向かった。

飛鳥を部屋に寝かしてから、土蔵に戻った僕は驚愕した。先程、飛鳥が投影したエクスカリバーがまだ存在していたからだ。

本来、グラデーション・エア投影と呼ばれるそれは、オリジナルの鏡像を魔力で物質化する魔術で効率が悪い。

投影でオリジナルからレプリカを作るのなら、ちゃんとした材料からレプリカを作ったほうが手軽で実用に耐えるためだ。

本来、投影は既に失われてオリジナルを本当に数分だけ自分の時間軸に映し出して代用する魔術だ。

僕が土蔵を出て、飛鳥を部屋に寝かせてから戻ってくるのに10分以上の時間が経っている。

つまり、飛鳥は内界に干渉する魔術師ということになる。

だが、その投影は、魔力で編んでいるものだ。故に、その形はどんなに熟練した魔術師でも持って一日。魔術を使い始めた人間ではすぐに消えるはずだ。

その瞬間、飛鳥から聞いた話から魔術師としての僕の脳裏にありえないという単語が浮かんだ。

飛鳥の投影は違う魔術の副産物に他ならないのではないだろうか。

「桜を助け出したときに飛鳥の言うことを信じていたつもりだったけど、どうやらまだ信じきれていなかったようだ……」

親としては信じていたけど、魔術師としては信じ切れていなかった。エクスカリバーを手に取り、贗作とは思えぬその存在感に圧倒される。

（だが、これで間違いな……。と、いうことは土郎も固有結界を持っているということか）

僕はトンデモナイ子供達を引き取ったのではないかと思い、顔に苦笑が浮かんだ。

少年編 魔術と修行 (後書き)

次回は少し時間が経過します。

少年編 姉と父親

Side : 飛鳥

俺と士郎、桜が『衛宮』になってから、幾ばくかの月日が流れた。

魔術の訓練もあれから欠かさず続けている。

俺と士郎は恐らく「固有結界」を持ち、投影したものは消えず、剣のみ特化している。

桜は「架空元素・虚数」という極めて稀有な属性を持っている。

現在は俺のほうが士郎よりも投影の完成度は高い。

俺は一度見たものを忘れないから、この世界に来る時に見た記憶で見本となるものがいっぱいいたからだ。

俺という手本があるためか士郎の腕も上達するスピードは早い。後になって気付いたことだが、俺は剣だけでなく武器なら大抵のものは投影しても問題なかった。

英霊「エミヤ」でも剣以外の投影には魔力消費が多かったはずなのに何故だろうか？

後、俺は切嗣の魔術刻印も受け継いでいる。ある日、魔術の訓練をしていたらいきなり受け継いで欲しいと言われたので安請け合いし

てしまったが、何が「ちょっと痛いだろうけれど我慢してね」だ、物凄く痛かった。まあ魔力も増えた、衛宮家固有の魔術も教えてもらっているし、それに切嗣に認められたような気もしているから嬉しいから良しとしよう。

さて、今現在俺はアインツベルンの森にいる。

以前に切嗣がイリヤの救出を試みるも、衰弱した体ではユーブスタクハイトの結界を突破できなかった。

その時の俺は素人と大差がなかったから手伝うことが出来なかった。切嗣がどれだけ悔やんでいたかは分からない。俺が実践レベルに達する頃には切嗣の体は限界だった。

切嗣はもう長くない。だから、俺は切嗣の願いを叶える為にここに来た。

それが切嗣に対する恩返しになると信じて……………。

城の扉を問答無用で打ち破り、その城へ侵入する。

「ひっ！」

立ちほだかるモノを手にした投影した干将・莫耶かんしょう・ぼくやで切り伏せる。

生前なら人を殺すことを忌避するだろうが、俺にそんな余裕はない。実戦経験のない俺では立て直されれば押し返される。

人を殺したという気持ちを心の奥に押し込めて手を振るう。

立ち塞がる物を切り捨てながら進むと奥で、しわくちやの爺が数人立っていた。

「何者だ!?!」

「初めまして、アインツベルンのご老体。今日は姉を引き取りに来たのですが、何処にいるのでしょうか?」

「姉だと!誰のことだ!?!」

「衛宮切嗣の娘、イリヤスフィールのことだよ。」

「衛宮切嗣! 貴様、あの裏切り者の関係者か!?!」

「そつだよ、息子さ……。一つ聞きたい。お前達は聖杯が穢れていることは知っているか?」

「フンツ! 我らを何だと思っておる。それぐらい分かっているわ!」

「犠牲が出ることを分かって聖杯戦争を続けるのか?」

「構わんよ！どれだけ犠牲が出ようが我らが「根源」にたどり着ければそれでいい！！」

「そうか……なら、もう何も言わないここで死ね！！」

彼らの目を見て、その目が狂気に囚われてもはや判断しただと思っ
た俺は、その手に持つ双剣を投影破棄し、新たに弓と剣を投影する。

「なっ待て！！」

「うわああああ！！！！」

「クツ！！」

「カラドボルグ？
偽・螺旋剣」

防御する者、逃げ出す者、攻撃しようとする者を纏めて真名開放し
た「偽・螺旋剣（カラドボルグ？）」で吹き飛ばす。

立ち込めた煙が晴れるとそこには、かつてヒトだったモノしか残っ
ていない。俺は無感動にそれを一瞥すると、先に脚を進める。

S i d e : イリヤ

雪が降っている。雪により、見える一面は雪に染まっている。

窓辺から見える外は、白に染まっている。今は夜だからそれを見ることはできないが、夜空と微かに降っている雪が見える。

聞こえてくるのは、ヒトの断末魔とも言える叫び声と爆発音だけだ。逃げることはできない。

ここ数年は、この城から録に出ることもできてない。それに出たといっても行くところなどない。

顔に自嘲の笑みを浮かべる。行きたいところはあった。しかしそれはもう望んではいけないのだ、なぜならもう彼にとって自分は不要だと思っから。

「最後に会いたかったなあ……」

口からそんな台詞がこぼれる。言うてから驚く。自分はやはり迎えに来て欲しかったのだと分かったからだ。

部屋の窓から外を眺める。外は夜の闇と雪に包まれている。

部屋の中はパチパチと、暖房のために燃えている木の音がする。

城は静まり気配はすぐそこまで来ていた。だが、そこから動かない。

イリヤは疑問を持ちながら、ベッドに座りながら外を眺めていた。

コンコン

静寂した夜の闇の中にドアをノックする音が響く。

ここまで来た侵入者がノックする理由がわからないので疑問に思いながら、不用心だが抵抗するのも無駄だと思いドアを開けた。

「やあ、イリヤ入っていいかな？」

「いいわ、入って」

そう言っつて、音を鳴らした人物を中に招き入れる。

「じゃあ失礼するね」

その人物はまだ子供だった。イリヤと背丈はそう変わらない。

変わっているのはその年代が着るのに相応しくない隠密活動用に作られたと思われる全身黒い服。軍用だろうか、作りは実用的であり、布も丈夫なように見える。

その服も今は血に濡れている。

「初めまして、君がイリヤ、だね？」

「あなたいったい何者なの？」

「この場合は侵入者といつていいかな？」

「わたしを殺しに来たの？それとも実験材料として誘拐？」

警戒感を露にするが、相手は首を振って否定する。

「詳しいことは時間が無いから後で話すよ。端的に言うと俺の名前は衛宮飛鳥。切嗣の代わりにイリヤを連れ出しに来た」

「切嗣の関係者？」

「切嗣の息子さ……。まあ養子だけどね」

イリヤが“切嗣の息子”という言葉にムツとしたとき飛鳥は慌てて言葉を継ぎ足す。

「それで早く決めてほしい。時間がないんだ。付いて来るか、来ないか」

「やけに急かすわね、正面突破してきた割に余裕が無いわよ？」

「実際問題あまり時間が無いんだ。急かすのはさすがにアインツベルン全てを敵に回して、ここから脱出するのは不可能だからね」

「確かにそうね」

「あ、それから拒否権は認めないから」

「ちょっと、わたしに選択権ないじゃない。ずるいわ」

イリヤはこの不審者を眺めて考える。相手は切嗣の息子と名乗っている。

だが、肝心の息子である証拠は無い。が、自分はこのまま残っても、アインツベルンの生きた聖杯として生きるだろう。

それが自分が生まれた意味。

「切嗣は望んでたよ。イリヤと一緒に暮らせることを」

「キリツグが？」

父のことを思う。捨てられたと思っていたのに、見捨てたわけではなかったのか。

「ああ、そうだよ。絶対に言葉にはしなかったけどね。だから来てほしい。きつと待ってるから」

「キリツグは生きてるの？」

「ああまだ生きている……が、もう残された時間は少ない。だから俺が来た。さあ行こう」

そう言って手が伸ばされる。

私は飛鳥という少年の話す顔を見て嘘はないと思える。

だから、

「そう……わかったわ。一緒に行きましょう」

私は、伸ばされた手を握んだ。

S i d e : 飛鳥

俺達は城を出て、少し離れたところまで来たときに、イリヤを呼び止めて俺から少し離れてもっう。

「イリヤ、ちょっと離れてて」

「何するの？」

「まあ見てなっつて」

俺は弓と剣を投影し、城に向かって構える。そして、投影した「偽^{カウ}螺旋剣^{ドボルグ?}」に込められるだけの魔力を込める。

「それは？」

イリヤの問いかけを流して、真名を解放する。

「カラドボルグ?
偽・螺旋剣」

真名解放した「カラドボルグ?偽・螺旋剣」は俺の手を離れ城に飛んで行った。そして着弾し大爆発。

同時に城の至る所から、仕掛けた爆弾が作動し爆発音が聞こえてきた。

イリヤはそれに呆然となり、

「ちよつと！今、なにしたのよ！」

と、問い詰めてくるが、俺はそんなことはお構いなしに、

「車があるトコまで逃げるよ。イリヤ！」

と、イリヤの手を引き走る。

「ちよつと説明しなさいよ！」

「後で説明するか走る走る。」

そして、走る俺達がその場からいなくなった時、城は崩れていった。

少年編 姉と父親 (後書き)

魔術刻印は血の繋がりがないと受け継げないのかな？と思ったのですがここの設定では問題ないということにしました。

アインツベルンは壊滅。

このままだと本編が物凄く短くなりそうな気がする。

飛鳥はこの数年で腕を上げたが、今回アインツベルンを壊滅できたのは単純に運が良かったのと奇襲だったからとアインツベルンに油断があったからで奇跡と呼べるものです。

少年編 再会と正義の味方

Side : 士郎

一週間前、飛鳥兄が「一週間程出かけてくる」という書置きを残して出て行ってから帰ってこない。

俺と桜は心配しているのに、親父は「飛鳥のことだから多分大丈夫だろう」と取り合ってくれない。

そして一週間目の今日、まだ飛鳥兄が帰ってきていない

今、親父と俺は、飛鳥兄が帰って来るかもしれないので縁側に二人で並んで月を見ていた。

少なくとも飛鳥兄は約束は守る人だから今日中に帰ってくるはずだ。

桜はもう寝ている。

そうやって二人で月を見ている時

「子供の頃、僕は正義の味方に憧れてた」

親父の独白のような言葉に、俺は直ぐに反応した。

「なんだよそれ。憧れてたって、諦めたのかよ」

俺が少しむっとなつて言い返すと、親父はすまなさそうに笑って月を見上げた。

「うん、残念ながらね。ヒーローは期間限定で、大人になると名乗るのが難しくなるんだ。そんなことにもっと早くに気付けば良かった」

そう言われて納得しながら、うんうん頷きながら、

「そっか。それじゃあしょうがないな」

「そうだね。本当に、しょうがない」

相槌を打つ親父に、俺は胸を張って言葉を続けた。

「うん、しょうがないから俺が代わりになってやるよ。爺さんはもうオトナだから無理だけど、俺なら大丈夫だろ。まかせろって、爺さんの夢は」

俺が、ちゃんと形にしてやつから

そう言い切る前に、親父は笑いながら俺の頭に手を置く。

「だめだよ、士郎。正義の味方というのは矛盾した存在なんだ。正義の味方というのは対立する悪がいてこそなれるものなんだ。正義が悪を滅ぼすことはあっても助けることはできないんだ。それに正義というのは結局の所、人それぞれなんだよ。大衆に認められた正義もあれば、認められない正義もある。誰もが悪だというものでも、誰かにとっては正義かもしれない」

そこまで話し、息をついて、

「この世に絶対の正義はないんだよ。僕はそれに気付くまでこんなにも時間が掛かってしまった……」

そう呟き俺の頭から手を離す。

言葉を続ける親父の姿はどこか人生に疲れた年老いた老人のように見えた。

「どれだけ頑張っても全てを救うことが出来なかった。どうしても指の隙間から零れ落ちる命がでてくる。だからぼくは、ベストよりベターをとるようになった。どういうことかわかるかい？」

分からない俺は首を振る。

「多を救うために小を切り捨てる。そのためなら何でもしたよ。毒殺、狙撃は当たり前え、どんな卑怯な事でもした……」

俺の口から息を呑む音が聞こえる。

「全てを救いたいと願いながら、9を救うために1を捨てる。これでもまだ正義の味方になりたいかい？」

それでも俺は……

「分からない。ただ、憧れたんだ！親父のような正義の味方のあり方に。あの大災害で俺を守ってくれた飛鳥兄の背中に。俺はあの大災害で生き残ってしまった。だから、この身は誰かのためになければいけないと思ったんだ。この命は沢山の人のために使わないとい

けないと思っただ。だから、俺は正義の味方になりたい！ 全てを救う正義の味方に！」

俺の大きな声に窓が震える。

「土郎の言っていることは矛盾しているよ。仮に土郎の命を使い、全てを救えたとしてもそれは偽者だ。そこに自分を勘定に入れていない。自分の命を犠牲にしてその他を救う。結局、土郎は自分という1を捨てているんだよ」

そこで親父は一息つき、

「仮に土郎以外の全てを救えたとしても、それで土郎が救われなかったら飛鳥と桜が悲しむよ」

「……………」

俺はそれに言葉を返すことが出来ない。

「土郎、僕はね結局大切な人達を守ることが出来なかったんだ。だからね、僕は君達には大切な人を守れるようになってほしいんだ。土郎の言っていることは正しいのかもしれない。でも、それは叶わないことなんだ。惑わされちゃいけない、僕の理想に、大火災の時の周りからの助けを求める声に。愛する1を救って、余裕があるなら9という存在を救う。人助けっていうのはそんな自己満足ぐらいがちようどいいんじゃないかな？」

「それは…………でもそれじゃあ！」

関係のない、虐げられる人達が悲しすぎるじゃないかと、そう言お

うと思った。

「士郎。僕は君に「幸せ」になって欲しいんだよ。それにあの時士郎を助けた飛鳥の気持ちを無駄にするのかい？」

今まで一度も親父のこんな懇願するような顔を見たことはない。

だから、考える。

あの時、飛鳥兄は言い方は悪いが他人を見捨てて俺を助けた。

俺と飛鳥兄の環境同じだ。いや、飛鳥兄は俺を見捨てれば他人を助けられたかもしれない。それでも俺を助けてくれた。そんな飛鳥兄の気持ちを無駄にしたくない。

1という親父や飛鳥兄、桜。

9という赤の他人。

どちらの命が大切なのかと問われればそれは。

「わかったよ、自分の大切なものだけは守る。余裕のあるときに他の人を救う、それでいいよな？ 親父」

「ありがとう、士郎」

親父は俯いている俺の頭を優しく撫でながら、嬉しそうに俺を見る。

だが、親父は他から続く言葉に呆ける事になった。

「親父」

Side: 切嗣

「親父」

どこからか声がする。

(この声は飛鳥?)

飛鳥と思われる声のする方向に顔を向けると呆然とした。

そこにはいた一週間ぶりに帰って来た飛鳥ではなく、僕の意識はもう一人集中した。

小さい体、白い透き通るような雪の肌に白い髪。そして真紅の瞳。

ここにいないはずの子。もう二度と会えないと諦めた。

それを見た瞬間、イリヤの元へ駆けていた。

そして、目の前に辿り着き膝をつく。

「キリツグ！」

「イリヤ！」

最後の言葉が引き金だった。僕は、イリヤを抱きしめた。

目から涙が零れる。

ここにいるイリヤが、決して偽者ではないのだと理解するようだ。

S i d e : 士郎

「いや、いいもんだね。感動の親子の再会というのは」

親子が抱き合っている傍で、固まったままの俺の近くに飛鳥兄が来

る。

「でも、完全俺のこと忘れてるな、あれは」

「てッ！飛鳥兄どういうことだよ、これは!!」

とりあえず事情を知っていきそうな飛鳥兄に聞く。

「拉致つてきちゃった、（ハァ。）」

「何してんだあんたー!!」

キモイ口調で犯罪を犯したことを告白する愚兄に鉄拳を制裁する。

「おおおおおお・・・」

「何、ナチュラルに犯罪してんだあんたは!!」

怒髪天を突く俺に恐れをなしたのか飛鳥兄は打たれた頭を摩りながらボソボソと言いつきを吐く。

「いや、やっぱり家族一緒に暮らすべきだと思ったわけよ」

「だからって!」

「まあ待て、はっきり言えば親父はもう長くない。これは分かっているだろ?」

分かっていた、この頃の親父は余り外に出ず、家の中でのんびりとしている事が多くなっていたから。

「だからさ……。会わせてやりたかったわけだ。やり方は強引になってしまったけどな」

そう言われると返す言葉がない。

「それならいいけど、次は俺にも言ってくれよ？」

「ああ、約束する……。けど、どうしたんだ。何か憑き物が落ちたような顔をして？」

犯罪はよくないが俺には、飛鳥兄が親父の言っていた「正義の味方」に見えた。

大切なものを守る「正義の味方」に。

「べつ別に、何でもないよ！」

「本当かな？」

「本当だよ!!！」

からかってくる飛鳥兄に言いながら、俺は親父の理想ではなく俺自身が目指す「正義の味方」が見えた気がした。

その日の月はとても綺麗で、そんな俺達を祝福するようだった。

その一週間後に、親父は俺達に看取られて息を引き取った。

その顔はとても安らかだった。

少年編 再会と正義の味方 (後書き)

少年編終了次回は本編に入ります。(注：本編は多分短くなります)

本編 策謀と召還 (前書き)

やっと本編始まりました。

一閃した男と別の男がその手に握られた紅い槍で女を斬りつけた男を貫かんとした時、対峙する男は女の手を持ち何かを言うが俺たちには聞こえない。

「

」

「ぐっ！」

その言葉を聞いた時、槍を持つ男は全ての動きを止まる。槍の男は苦悶の表情で漏れる言葉は呻き声しかでない。

崩れ落ちた女の左腕があつた箇所からは際限なく血が溢れ、地面に血溜まりを作り続ける。

女の意識は流れ出る血液と共に薄れているのだろっ。視界の焦点が薄れてきているのが見える。

「

」

「

」

「

」

「

」

「ここからでは男達の会話は俺たちまで聞こえない。」

「男達は話が終わったのか、連れだって部屋を出て行った。」

「出て行く男達の内、槍を持つ男が最後まで女を見ていたのが俺の印象に残った。」

「それじゃ、治療を頼む。」

俺達は男達がなくなつた館に入り、
へ行き、俺は男が置いていった腕を
は倒れている女の所
に渡す。

は渡された腕を女に繋ぎ治療を行う。

「治療が終わつたら、彼女を家に連れて行ってくれ」

「危険てか？ 大丈夫だよ。ちゃんと考えてあるからさ」

「俺か？俺は歩いて帰るよ。治療の手伝いはできないし、考え事も
したいしな」

「治療は終わったか、それじゃ頼む」

「ああ、あとまだこのことを と には内緒にしといてくれよ。
説明するのがめんどくさいし」

「……は大丈夫さ。事情は知っているし、家を出る前に説
明してきたから」

「彼女も気付くだろうと思ったから全てではないけど事情を話しておいたから大丈夫さ」

「後始末は俺がやっておくから大丈夫だから、早く行け」

俺の言葉を聞き、と女はその場から消える。

「も心配性だな。まあ逸れも仕方ないか……………」

俺は後始末をして、誰もいなくなった部屋を見渡し一人館から出た。

「さて、ここまでは計画通りだ。」

そう呟き空を見る。綺麗な月だ。親父が死んだ日もこんな月の綺麗な日だった。

「はぁ……………彼女は怒るかな、こうなるのは計画通りだと知ったら」

溜息をつき、俺は月の光を頼りに家路に着いた。

S i d e : 凜

「素に銀と鉄。礎に意思と契約の大公。祖には我が大師シュバイン
オーグ。降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、王冠より出で、王
国に至る三叉路は循環せよ」

細心の注意と努力。

本来なら血液で描く魔法陣を、今回は溶解した宝石で描く。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。繰り返す都度に五度。
ただ満たされるときを破却する」

.....じきに午前二時。

遠坂の家に伝わる召還陣を描き終え、全霊を持って対峙する。

「 A n f a n g g

私の中にある、カタチの無いスイッチをオンにする。

かちり、と体の中身が入れ替わるような感覚。

通常の神経が反転して、魔力を伝わらせる回路へと切り替わる。

これより遠坂凜は人ではなく、ただ神秘を成し得るだけの部品と成る。

全身に行き渡る力は、大気に含まれる純然たる魔力。

これを回路となった自信に取り込み、違う魔力へと変換する。

………左腕に蠢く痛み。

魔術刻印は術者である私を補助する為、独自に詠唱を始め、余計、私の神経を侵していく。

ガリガリと、牙持つ百足のよう私の体内を這い回る。

その痛みで我を忘れて、同時に至ったのだと答えを得た。

午前二時まであと10秒。

全身に満ちる力は、もはや非の打ち所が無いほど完全。

告げる

始めよう。

あとはただ、この身が空になるまで魔力を注ぎ込み、召還陣というエンジンを回すだけ。

「
告げる。汝の見は我が下に、我が命運は汝の剣に。聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

視覚が閉ざされる。

目前には、肉眼では捉えきれぬという大五要素。

故に、潰されるのを恐れ、視覚は自ら停止する。

「誓いは此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪と敷く者、汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ
「！」

(文句なし。間違いなく最強のカードを引き当てた………！)

視界が戻るのがもどかしい。

あと数秒で目が回復して、そうすればもう目前には召還されたサーヴァントの姿が
ない。

「はい………?」

ないものはない。

あんだけ派手にエーテルを乱舞させておいて、実体化しているモが欠片も無い。

加えてなんか、居間のほうで爆発音がしてるし。

「なんでよー!?!」

走った。

もう頭ん中空っぽにしたまま居間へ急ぐ。

「扉、壊れてる!?!」

居間の扉はゆがんでいた。

取っ手を回しても、押しても引いても開かないので、

「ああもう、邪魔だこのおっ………!」

ドッカーンと、蹴破って中に入った。

「……………」

で、居間に入った瞬間、私は全てを理解した。

居間は滅茶苦茶になっていた。

何かが天井から落ちてきたのか、部屋は瓦礫にまみれており、偉そうにふんぞり返っている男が一人。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

アレ、間違いなく下手人だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

けど、そんなことよりもっと大事な事が一つ。

破壊を免れた柱時計は正確に時間を刻んでいる。

それで思い出してしまった。

うん、そうそう。たしかうちの時計、今日に限って一時間早かったんだっけ。

つまり今は午前一時。

私の絶好調まで、ホントはあと一時間。

「・・・・・・・・・・また、やっちゃった」

私は大抵のことは人並みにこなせるんだけど、一つだけ遺伝的な呪いがある。

それはここ一番、最も大事な勝負時に、信じられないような大ポカをしでかすことだ。

「・・・・・・・・・・やっちゃったことは仕方ない。反省」

自分の馬鹿さ加減が腹立たしい。

カリカリとした心のまま、偉そうに横たわっている瓦礫の男を睨み付けた。

「それで。アンタ、なに」

「開口一番それが。これはまた、とんでもないマスターに引き当てられたものだ」

赤い外套のソイツは、やれやれ、なんて大げさに首をすくめた。

オマケに「これは貧乏くじをひいたかな」なんて呟きやがる。

「……………断言しよう。こいつ絶対性格ゆがんでる。」

「……………」

それにしても、これがサーヴァントなんだろうか。

「……………いや、こうしているだけで、アレが桁外れの魔力を帯びていることが分かる。」

外見に惑わされるな。

アレは間違いなく人間以上のモノ、人の身でありながら精霊の粹に達した”亡霊”だ。

「……………」

いつまでも圧倒されている場合じゃない。

此処からはつきりと頭を切り換えないと。

「確認するけど、貴方は私のサーヴァントで間違いない?」

「それはこちらが聞きたいな。君こそ私のマスターなのか?」

右腕に浮き出た令呪をみせる。

「令呪よ、文句ある?」

「ふむ、確かに令呪だな。しかし、私が言いたかったのはそういうことではない。君が忠誠を揮うに相応しい人物かどうかだったのだが」

「………なによ。それじゃあ私はマスター失格?」

「そう願いたいのが、そうはいくまい。令呪がある以上、私の召喚者のようだ。君が私のマスターだというのは認めよう」

やれやれ、なんて大げさに肩をすくめる。

「………」

まずい。沸点低すぎて、クールダウンが間に合わなそう。

「だが、言っておくが戦いは全て私に任せてもらうからな。どうせ戦いの経験など無いのだろう?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どいんじょと？」

あー、駄目みたい父さん。

私、そろそろ限界です。

「素人に余計な口出しをされてはたまらないからな。なに、君は大人しくこの家の地下にでも隠れていればいいさ」

ブチッ

「あつたまきたあ・・・・・・ツ！ ちよつとアンタ何様のつもりよ！！ 黙って聞いてりゃズケズケとツ！！ そこまで言うならやってやるつじやない！ あんたは誰に従うべきか教えてあげるわツ！」

「 A n f a n g・・・・・・・・・・！」

もう容赦なしだ、こんなひねくれモノ相手にかけてやる情けなんてあるもんか・・・・・・・・・・！！

「な 待て、正気かマスター！？ そんなことで 令呪を使う奴が・・・・・・・・・・！」

「うるさーい！ いい、アンタは私のサーヴァント！ なら、私の言い分には絶対服従つてもんでしよう・・・・・・・・・・！」

右手に刻まれた印が疼く。

聖杯戦争の要、サーヴァントを律する三つの絶対命令権が行使され

る。

「か、考えなしか君は………！　こ、こんな大雑把な事に呪を使うなど………！」

ふん、怒鳴られても後の祭りよ。

………だいたい、私だって予想外だ。

自己嫌悪で死にたくなる。

まさかこんなことで、大事な令中をあっさりと使う羽目になるなんて！

本編 策謀と召還 (後書き)

4月17日大幅修正。

本編 凍とアーチャー (前書き)

前話の名称と内容を修正しました

Side:凛

で。

廃墟みたいになった居間から引き上げて、とりあえず私の部屋に移動した。

「ふむ・・・・・・・・全く予想外だったな」

「うるさいわね！私だってこんな無駄な事に令呪を使うなんて思っ
て無かったわよ」

「いや、案外無駄でもなかったかもしれん」

困ったものだ、と肩をすくめるサーヴァント。

「そもそも令呪とはサーヴァントに行動を強制するものであり、その命令は聖杯からのバックアップを受けて実行される」

「何？いきなりそれくらい知ってるわよ。だからこそ令呪を使えばサーヴァントは実力以上の能力を発揮できる。それだけ重要なものだから使うときは慎重にっていうんでしょ」

「その通り。だが、それにはいくつかの条件がある」

サーバントは一息ついてから

「それは「命令の内容と実行する期間が明確であること」というものだ。この条件を満たさない命令はほとんど効果が無くなってしまふ。先程の「私に逆らうな」という命令など最たるものだな。あれでは通常サーバントを従わせることなど出来ないと言っている。だが、私には今君の言葉に強い強制力を感じている。それはもし逆らえばその後の行動にペナルティが科されてしまうほどのものだ。例えば今回の君の「私に逆らうな」という命令に逆らうと体が重くなるのかな」

「だから？」

「これはつまり君の魔術師としての力がそれほど強いということだ」

「それじゃ認めるのね？私がアンタのマスターだってこと」

「ああ、前言を撤回しよう。年齢は若いが、君は卓越した魔術師だ。故に君を私のマスターと認めその指示に従おう」

居を正して、礼儀正しく頭を下げるサーバント。

「っ
ふ、ふん。いまさら褒めたって何もでないけど」

気恥ずかしくなって視線を逸らす。

「……………で？貴方、何のサーバント？セイバー？」

気を取り直して、ようやく本題に移る。

「残念ながら、剣は持っていない」

「
」

そりゃそうよね、時間は間違えるわ、召喚陣はなんの機能も果たさないわ、はて見当違いの場所にサーヴァントを呼びつけたんだもの。最強のサーヴァントであるセイバーを呼ぶには、あんまりにも不手際すぎる。

「……む。悪かったな、セイバーでなくて。この身はアーチャーだ」

「え？あ、うん、そりゃ痛恨のミスだから残念だけど、悪いのは私なんだから。癪に障った、アーチャー？」

「障った。見ている、必ず自分が幸運だったと思い知らせてやる」

「そうね。それじゃあ必ず私を後悔させてアーチャー」

「ああ、忘れるなよマスター。己が召喚したものがどれほどの者が、知って感謝するがいい」

ふん、とまたも嫌な笑みをこぼすアーチャー。

あー、やっぱりこいつ性格悪いかも。

「まあいいわ。それでアンタ、何処の英霊なのよ」

「アーチャーは答えない。」

「アーチャー？マスターである私が、サーヴァントである貴方に訊いているんだけど？」

「分からない」

「………ちょっと、なんですって？」

「は？」

「これは君の不完全な召喚のツケだ。どうも記憶に混乱が見られる。自分が何者であるかは判るのだが、名前や素性がどうも曖昧だ。………まあ、さして重要な欠落ではないから気にすることではないが」

それを言われると何も返せない。

「………ま、いつか。誰にも正体がわからないって
いうことだしね。分かった、しばらく貴方の正体に関しては不問に
しましょう。
それじゃアーチャー、最初の
仕事だけだ」

「さっそくか。好戦的だな君は。それで敵は

」

何処だ、なんて続けるアーチャーの前に、ばいばいと箒と塵取りを投げつける。

「む？」

「下の掃除お願い。アンタが散らかしたんだから、責任持って綺麗にしといてよね」

「」

呆然とすること十秒。

ようやく思考を取り戻したアーチャーは、ガツと文句ありげに箒を握り締めた。

「異議あり。そのような命令ことわ」

「いいの？これ、マスターとしての命令よ？マスターの方針に逆らったら体が重くなるんだっけ？」

「ああ、そうだが……」

箒を握り締めたまま唸ること数秒。

アーチャーは悔しげに目を閉じて、

「了解した。地獄落ちろマスター」

潔く、私のお願いを聞いてくれた。

さて。

夜も遅いし、今夜はもう休もう。

アイツの扱いをどうするかは目が覚めてから決めればいい。

運命の日が終わりを告げる。

いや、運命はこの夜から回り始めた。

私を含めてこれで六人。

最後の一人、未だマスターとして覚醒していない七人目がサーヴァントを召喚した時、此度の聖杯戦争が開始される。

それはもう遠くない未来。

十年間待ち続けた私の戦いは、あと少しで始まるうとしているのだ

本編 凍とアーチャー (後書き)

ちよつと短いか？

本編 赤い弓兵と青の槍兵

Side:凜

一日が終わった。

時刻は八時。

教室から生徒達の姿がなくなり、学校に残っているのは私と隣りで
霊体になっているアーチャーだけだ。

聞こえる音はヒュオオオ、という風の音のみ、他に人の気配はない。
「わかるアーチャー？川の向こうが市街地の並ぶ新都。そしてこっ
ちの住宅街が私たちのいる深山町よ」

「ああ、戦略上重要な地形は大体把握した。そうだな
例えば二つの街を繋ぐあの橋」

そう言つてアーチャーは橋を指差す。

「遮蔽物の少ないあの場所ならば、アーチャーの真価を存分に発揮
できよう。あそこに敵を誘い狙撃できれば、なお理想的だな。その
場合、私が陣取るとすれば新都のあのビルがいいだろう」

「うっそ だってあんなの滅茶苦茶遠いじゃない!？」

「なに、私の力をもってすれば造作も無い。ここからなら橋のタイ
ルの数ぐらいは見てとれる」

それって目がいいとか、そういうレベルの話じゃないと思う。よく
屋上には望遠鏡があるけど、それと同レベルの視力なんだから

「びっくり。アーチャーって本当にアーチャーなんだ」

「……凛。まさかとは思うが、君は私を馬鹿にしているん
じゃないだろうな」

「そんな訳ないでしょ。たださ、貴方ってアーチャーって言うわり
には弓使いつぽくないから、つい勘違いしてただけ。……
ふう、やっぱりサーヴァントってのはすごいよね。アンタでさえこ
れなんだものこれがセイバーだったならどんなにすごい能力があっ
たのかしら」

「それは問題発言だな。なんだ、アーチャーでは不服だというのが
？」

「そりゃあね。アーチャーって言えば弓……つまり後方
支援が役割でしょ？私は魔術師だから前に出て戦うタイプじゃない
し、やっぱ剣と魔法って組み合わせの方が様になるじゃない」

「……悪かったなセイバーでなくて。凛、今の発言きつと
後悔させてみせる。セイバーなどより私の方が役に立つと思いい知ら
せてやるのではないか」

「……何こいつひょっとして拗ねてんの？」

「ええ期待しているわ、アーチャー。それで……貴方の英雄だった頃の名前は思い出した？」

「まだだな、未だにその記憶はハッキリしていない。まあ問題はなかるう、何せ最強の魔術師である君が呼び出したサーヴァントだ。その私が最強でないはずがないではないか」

「最強とは聞き捨てならねえなあ。そんならひとつ、手合わせ願おうか」

唐突に、第三者の声が響き渡った。

「
「！」

声の方向に振り返る。

給水塔の上。

十メートルの距離を隔てた上空で、そいつは私を見下ろしていた。

夜に溶け込む深い群青。

つりあがった口元は粗暴で、獣臭じみたものが風に乗って伝わってくる。

「ククク、ここらで怪しい気配がするってんで見にきてみたらとんだ拾いもんだ」

軽々と、しかし殺意に満ちた声。

その目は私ではなくアーチャーを見ている。

……この男には、アーチャーが見えている！

「サーヴァント！」

男の腕が上がる。

「
」

事は一瞬。

今まで何一つ握っていなかったその腕には、紅い、二メートルもの凶器があった。

「お前らが最強だってんなら……ちったあ楽しませてくれるんだよなア！！」

「は、っ
」！

考えるより早く。

「E s i s t g r o s . E s i s t k l e i n
……！！」

反応は早かった。

一小節で身体の軽量化と重力調整の魔術を組みあげる。

この一瞬、羽と化した体は軽々と飛び上がり

「凜……………」

「わかってる、任せて……………」

フェンスを飛び越えて、屋上から落下した。

「っ
VOX GOTT ES ATLAS!アーチ
ヤー着地任せた……………」

「、は……………」

着地の衝撃をアーチャーに殺させて、地面に足がついたと同時に走り出す。

……………とにかく場所を変えないといけない。

「はっ、は……………」

屋上から校庭まで、七秒かからず走り抜ける。

「いや、本気でいい脚だ。ここで仕留めるのは、いささか勿体なさすぎるか」

だが、そんなものはサーヴァント相手には、何の意味もあり得なかった。

「アーチャー……………」

私が後ろに引くのと同時に、前から出たアーチャーが実体化する。

アーチャーの手には、微かな月光を反射させる一振りの陰陽の双剣があった。

（双剣、弓じゃない！？）

「へえ、セイバー………って感じじゃねえな。何者だテメエ」

男は、口元を不気味に歪める。

「そういう君は、その槍から見てランサーか」

「如何にも。貴様は真つ当な一騎打ちをするタイプじゃねえなテメエは。さっき言っていたな、アーチャーと」

ランサーに対して、アーチャーは無言。

………両者の間合いは五メートル弱。

「いいぜ、好みじゃねえが出会ったからにはやるだけだ。そら弓を出せよアーチャー。それぐらいは待ってやる」

「アーチャーは答えない。」

倒すべき敵に語るべきことなどないと、その鋼のような背が語っていた。

「アーチャー」

私は近寄らずに、その背中に語りかける。

「手助けはしないわ。貴方の力、ここで見せて」

「ク」

それは笑い、だったのか。

私の言葉に答えるよう口元をつり上げて、赤い騎士は双剣を手に疾走した。

「バカが！」

迎え撃つは青い槍突。

奔る刃、流す一撃。

高速で突き出される槍の一撃を、アーチャーはすんでに双剣で受け流す。

「ッ
！」

赤い外套が止まる。

敵は、アーチャーの疾走を許さなかった。

槍の間合いまで、わずかにメートルの接近すらさせない。

ランサーは自ら距離を詰め、アーチャーに前進さえ許さなかった。

「たわけ、弓兵風情が接近戦を挑んだな」

ランサーは一撃ごとに間合いを詰め、停止することを知らない。

残像さえ霞む高速の打突。

「ふ」

眉間に迫る穂先を既に弾き、ランサーの槍もかくやという速度で踏み込むアーチャー。

「」

「ぬっ」

赤い外套が停止する。

時間が停止したかのような悪夢。

繰り出された一撃は、先の打突より更に高速………!

「ぐ、っ」

軌道を逸らそうといなしにかかるアーチャーが双剣ごと弾かれる。

息もつかせぬ連撃が続く。

………私は見惚れていた。

これがサーヴァントの戦い。

それはかつての英雄達による人知を超えた死闘であり、魔術師では手の届かない最高ランクの使い魔、英霊を使役する、聖杯戦争そのものなのだ。

「！」

一際高い剣戟。

ランサーの槍を弾いた双剣の片降りは、そのままアーチャーの手から離れた。

「間抜け」

罵倒するランサーに躊躇はない。

一息のうちに放たれたランサーの槍は、まさに閃光だった。

だが、その閃光を一对の光が弾き返す………！

「！？」

アーチャーの手には再び先ほどと全く同じ双剣が握られていた。

「ハ、弓兵風情が剣士の真似事とはな！」

ランサーの槍が奔る。

それをアーチャーの双剣が弾く。

両者の撃ち合いは百を超え、その度にアーチャーは武器を失う。

だがそれも一瞬、次の瞬間にはアーチャーの手には剣があり、ランサーはその度わずかに後退する。

間合いが離れる。

仕切り直しをする為か、ランサーは大きく間合いを離れた。

……その速さは尋常じゃない。

「……二十七。それだけ弾き飛ばしてもまだあるとはな」

ランサーの苛立ち、いやあれは困惑だ。

……その気持ちは私も同じ。

サーヴァントにとって、自身のシンボルとも言える”宝具”は唯一無二の武装。

宝具は決して使い捨てに出来るものではない。

あの双剣はアーチャーの”宝具”ではないのだから。

彼はアーチャーのサーヴァント。

故に、彼の”宝具”は弓でなければならぬのだから。

「どうしたランサー、様子見とは君らしくないな。先ほどの勢いは何処にいった」

「……………チイ、狸が。減らず口を叩きやがるか。いいぜ、訊いてやるよ。テメエ、何処の英雄だ。二刀使いの弓兵なぞ聞いた事がない」

「そういう君は判りやすいな。槍兵には最速の英雄が選ばれると言うが、君はその中でも選りすぐりだ。これほどの槍手は世界に三人といえまい。加えて、獣の如き敏捷さと言えば恐らく一人」

「ほう、よく言ったアーチャー」

途端、あまりの殺気に呼吸を忘れた。

ランサーの腕が動く。

今までとは違う、一部の侮りもないその構え。

「ならば食らうか、わが必殺の一撃を」

「止めはしない。いずれは超えねばならぬ敵だ」

クツとランサーの体が沈む。

同時に、茨のような悪寒が校庭を蹂躪した。

……………空気が凍る。

パキッ

「誰だ……！！！！」

「！」

「……え？」

ランサーから放たれていた鬼気が消えた。

走り去っていく足音。

……その後姿は、間違いなく学生服だった。

「生徒……！？ まだ学校に残ってたの！？」

「そのようだな。おかげで命拾いしたが」

冷静に言うアーチャー。

……いやまあ、それは確かに助かったけど。

「……失敗した、ランサーに気をとられて周りの気配に気付かなかった……って、アーチャー。アンタ、何してるの」

「見て判らないか。手が空いたから休んでいる」

「んな訳ないでしょ。ランサーはどうしたのよ」

「さっきの人影を追ったよ。目撃者だからな、おそらく消しに行っただろう。……む、早いな、目撃者は魔術師か？もう

校外に出ている」

「

」

一瞬、あらゆる思考が停止した。

「……………追うわよアーチャー！」

即座に私を抱えてランサーを追うアーチャー。

私たちは夜を走る。

その先にあるのは救いか絶望か？

本編 赤い弓兵と青の槍兵 (後書き)

セイバーとアーチャーの扱いをどうしよう？

救うべきか切り捨てるべきか、悩む

本編 遭遇と撤退

Side : 士郎

「 」

学校で遅くまで残った用事を済ませて帰ろうとした時、物音が聞こえたような気がした。

「 確かに聞こえる。校庭のほうか? 」

この夜。

凍てついた空の下、静寂を破る音が気になったのか。

真偽を確かめる為に、俺はその場所へ向かってしまった。

校庭にまわる。

「 人? 」

初め、遠くから見た時はそうとしか見えなかった。

暗い夜、明かりのない闇の中だ。

それ以上の事を知りたければ、とにかく校庭に近づくしかない。

音は大きく、より勢いを増して聞こえてきた。

これは、鉄と鉄がぶつかり合う音だ。

となれば、あそこで何者かが刃物で斬り合っている、という事だろう。

「・・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿馬鹿しい。何考えてるんだ、俺・・・・・・・・」

頭の中に浮かんだイメージを苦笑で否定して、さらに足を進めていく。

この時。

本能が危険を察知していたのか、隠れながら進んでいたことが、ついていたのかそうでないのか。

ともかく身を隠せる程度の本によりそって、より近くから音の発信源を見

そで、完全に意識が凍りついた。

「　　な」

そこにいたのは赤い男と青い男。

時代錯誤を通り越し、もはや冗談とすら思えないほど物々しい武装をした両者は、不吉なイメージ通り、本当に斬り合っていた。

「
赤い男と青い男の持つものを理解した瞬間に判った。

「
アレは関わってはいけないモノだと。

「っ
「

これ以上直視しては駄目だ。

だというのに体はピクリとも動かず、呼吸をすることも出来ない。

逃げなければと思う心と、逃げ出せばそれだけ見つかるという判断。

い。……その鬨ぎ合い以上に、手足が麻痺して動かない。

四十メートル以上も離れているのに、真後ろからあの槍を突きつけられているような気がして、満足に息も出来ない。

「

「

音が止まった。

二つのソレは、距離をとって向かい合ったまま立ち止まる。

それで殺し合いが終わったのかと安堵した瞬間、いつそう強い殺気が伝わってきた。

「っ……
「!」

その瞬間、足が動いて枝を折ってしまった。

パキッ

「
誰だ……！！！！！」

！」

青い男が、俺に気づいた。

「く　　！」

対処する方法が思いつかない。

いや、まともに思考できていないのだろう。

俺は応戦する、と言う選択肢を忘れ、踵を返した。

瞬間的に全身の能力を『強化』し、さらに魔力そのもので身体能力をさらに高めて最大速度で学校を離れる。

（クツ！何か音がするからって見に行くんじゃないかなかった！？）

「逃げられない！」

獣じみた殺気が俺の背後からひしひしと迫ってくる。

このままでは追いつかれる事は火を見るより明らか、状況を打破するために携帯をポケットから出して電話を掛ける。

電話を終えた俺は周囲を見渡し、交差点で止まる。

やがて、もはや鬼神と化した青い男が現れる。

「はっ坊主、もう鬼ごっこはおしまいか？」

やつは上からやってきた。その声に慌てて身を捻るが、現れた『ソレ』を回避仕切れず、青い男の持つ槍は俺の脇腹を貫く。

「ぐっ！」

「へえ、結構いい動きするじゃねえか、お前。心臓を狙ったのによ。それにお前魔術師だな？」

男は楽しそうな顔で言う。

俺は何も答えない。

いや、答えるような余裕がない。

この傷も重傷だ。

今のところ命に別状は無いが、このハンドデは痛過ぎる。

それでも俺は何とか立ち上がり、相手を見据える。

この場を凌ぐ方法は既にある。

「いい眼をしてるな、お前」

青い男はそう呟いた。

「いいだろう。敢闘賞だ、坊主。時間も無いことだし、俺の槍を見
せてやる」

あの野郎が来ると始末が面倒だから、といいながら、奴は槍を構
え

まずい、あれはまずい。

奴はまさか！

思考を一瞬でめぐらせ、結論に達する。

「トレース・オン
投影開始！」

俺は全ての小節を飛ばし、使い慣れた双剣を投影して青い男に向か
って投げる。

青い男がその槍で弾こうとした瞬間。

「ブロークンファンタズム
壊れた幻想」

投げた双剣を破壊して、いつもとは別に破壊力よりも強い閃光と鼓
膜を破るような甲高い音を出した。

「何しやがった!!」

青い男は目を抑え唸る。

今の不明な物で五感のうち二つを潰したはずだ。

目は閃光により見えず、甲高い音により耳にその音が木霊している。

「トレース・オン
投影開始」

先程と同じ双剣を投影し、去り際に奴に飛ばして全速力でその場を離れる。

S i d e : ランサー

目撃者の坊主が魔術師だったのには驚いたが、つまらないがこれも仕事だからと始末しようとしたのだが、

「トレース・オン
投影開始!!」

坊主がそう言った途端、手にアーチャーと同じ双剣が現れた。

それを見た驚きの為、俺の動きは一瞬止まってしまっ。

その為、坊主が投げた双剣を避けれる距離ではないため、槍で弾こうとした瞬間。

「ブロークンファンタズム
壊れた幻想」

坊主の言葉と共に双剣が強い閃光と鼓膜を破るような甲高い音を出した。

「何しやがった!!」

目は閃光により全く見えず、甲高い音により耳にその音が木霊して他に何も聞こえない。

「ちいい!!」

俺は異変を察知した。

何かが飛んできている。

目と耳の二つの感覚をつぶされたとはいえ、この身は英霊まで昇華した戦士。

第六感を察知する。

恐らく飛んできた物は先ほどと同じ双剣だろう。

それは胸と頭を狙っている。

躊躇いは全くない。

手に持つ相棒は、主の意思を明確に受け取り双剣を弾き返す。

もう一度撃つてくると思ったが、小僧は離れて行った。

「ふん。いい判断だぜ、坊主」

ランサーは感嘆の声を上げ、少年の後を追った。

気配だけ感じられれば、何とでもなる。

それに失った二つの感覚は、すぐに元に戻るだろう。

しかし、坊主の気配はもう覚えた。

あとは追い続け殺すだけだ。

S i d e : 士 郎

カラン、カラン

家に仕掛けた結界が鳴る、きつとさっきのやつが俺を追ってきたの
だろう。

正直に勝てる気はしないが、ここで諦めて死ぬなんてもつてのほか
だ。

それに今回に限っては勝つ必要はない。

まともに戦えるかもしれない方法はあるのだが、使つと俺が危険な
ので最後の手段に取っておく。

トレース・オン
「投影開始」

投影したのは先程放つた双剣と同じもの。

「逃げねえとはいいい度胸だ、気に入った」

いつの間にか目の前まで来ていた青い男が声をかけてきた。

「なあ、見逃してはもらえないか？」

まあ無理だと思つが一応交渉する、戦いはできるだけ避けたいのだ

「駄目だ。マスターから目撃者を消すようにも言われてるんでね、

何よりお前みたいな面白い奴見逃すつもりは無いしな」

そういつて青い男は面白そうに笑う、根っからの戦闘狂か……
はあついてない

「坊主、てめえの名は」

「衛宮士郎。あんたは？」

「俺か？俺はランサーだ。さあシロウ、いくぜっ！！」

ガン、ガガン

ランサーの突きは恐ろしいほど早かったが、赤い外套の男と戦っていた時よりは幾分遅い。

そのため何とか受け流せた。

幾度となく繰り出される槍。それを俺は凌ぐ。

「ほらほら、どんどんいくぞ」

稲妻の如きその攻撃は、さらに高まり、その速度を、込められる力をあげていく。

「く！」

強化した体ですら、追い付かなくなりつつある力。

人を遥かに超えた領域にあるそれ。

やはりこのままでは、敵わない！

何とか攻撃を凌ぎ、後ろに跳ぶ。しかし、すぐに追い付かれる。

それからしばらくランサーと打ち合ったがランサーは無傷で俺はボロボロだ。

先ほどまでのスピードよりもなお早いスピードで俺に向かってくるランサー。

突き出してくる槍の一撃を弾く。

が、

「 飛べ」

ランサーはくるりと背中を向けて、回し蹴りを放ってきた。

景色が流れていく。

蹴り上げられた胸が痺れ、呼吸ができない。

「ぐっ
「！」

背中から土蔵のドアにぶつかり、ドアと共に中に落ちる。。

「しほ
っ、ア……………」

四つん這いで咽る。

ランサーは追撃をかけてくる。

「そら、これでお終いだ

」!

その瞬間だった。

剣が、見えた。

何故、この剣が今見えるのかという疑問に迷わず、それを剣の丘から自分の心から引き上げる。

呪文も忘れ、俺はただ叫んだ。

「来い

!」!

光が、溢れた。

「え

」?

それは、本当に。

「なに………!」?

魔法のように、現れた。

目映い光の中、それは、俺の背後から現われた。

思考が停止している。

現われたそれが、少女の姿をしていることしか判らない。

ぎいいん、という音。

それは現われるなり、俺の胸を貫こうとした槍を打ち弾き、躊躇う事無くランサーへと踏み込んだ。

「
本気か、七人目のサーヴァントだと……………」
「…!？」

弾かれた槍を構えるランサーと、手にした”何か”を一閃する少女。

二度火花が散った。

現われた少女の一撃を受けて、たたらを踏むランサー。

「く
「!

不利と悟ったのか、ランサーは獣のような俊敏さで土蔵の外へ飛び出し

退避するランサーを体で威嚇しながら、それは静かに、こちらへ振り返った。

風の強い日だ。

雲が流れ、わずかな時間だけ月が出ていた。

土蔵に差し込む銀色の月光が、騎士の姿をした少女を照らしあげる。

「
」
声が出ない。

突然の出来事に混乱していた訳でもない。

ただ、目の前の少女の姿があまりにも綺麗過ぎて、言葉を失った。

「
」

少女は宝石のような瞳で、何の感情もなく俺を見据えた後。

「
問おう。貴方が、私のマスターか」

凜とした声で、そう言った。

本編・・・・・・・・ランサーとセイバー・・・・・・・・

Side:士郎

「問おう。貴方が、私のマスターか」

目の前の少女は凜とした声で、俺にそう言った。

「え・・・・・・・・マス・・・・・・・・ター・・・・・・・・?」

問われた言葉を口にするだけ。

彼女が何を言っているのか、何者なのかも判らない。

今の自分に判ることと言えば

この小さな、華奢

な体をした少女も、ランサーと同じ存在というだけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

少女は何も言わず、静かに俺を見つめてくる。

その姿を、なんと言えはいいのか。

この状況を、外である男が隙あらば襲い掛かってくる状況を忘れてしまふほど、目の前の相手は特別だった。

自分だけ時間が止まったかのよう。

先程まで体を占めていた死の恐怖はどこぞに消え、今はただ、目前の少女だけが視界にある。

「サーヴァント・セイバー、召喚に従い参上した。マスター、指示を」

二度目の声。

その、マスターという言葉と、セイバーという響きを耳にした瞬間、

「っ」

左手に痛みが走った。

熱い、焼きごてを押されたような、そんな痛み。

思わず左手の甲を押さえつける。

それが合図だったのか、少女は静かに、可憐な顔を頷かせた。

「これよりわが剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに、契約は完了した」

「な、契約って、なんの!？」

俺だって魔術師の端くれだ。その言葉がどんな物かは理解できる。

だが、少女は俺の問いになど答えず、頷いたときと同じ優雅さで顔を背けた。

向いた先は外への扉。その奥には、未だ槍を構えた男の姿がある。

「
」

まさか、と思うより早かった。

騎士風の少女は、躊躇う事無く土蔵の外へと身を躍らせる、

「!
」

体の痛みも忘れ、立ち上がって少女の後を追った。

「な
」

我が目を疑う。

今度こそ、何も考えられないぐらい頭の中が空っぽになる。

響く剣戟。

土蔵から飛び出した少女に、槍の男は無言で襲い掛かった。

少女は槍を一撃で払いのけ、更に繰り出される槍を弾き返し、その度、男は後退を余儀なくされる。

「チイ
」!

憎久しげに舌打ちをこぼし、男は僅かに後退する。

手にした槍を縦に構え、狙われた脇腹を防ぎに入る。

「ぐっ……!!」

一瞬、男の槍に光が灯った。

少女が振るう”何か”を受けた瞬間、男の槍は感電したかのように光を帯びる。

アレは、視覚できる程の魔力の塊だ。

少女の何気ない一撃一撃には、とんでもないほどの魔力が籠っている。

そのあまりにも強い魔力が、触れ合っただけで相手の武具に浸透しているのだ。

「卑怯者め、自らの武器を隠すとは何事か……!!」

少女の猛攻を捌きながら、ランサーは呪いじみた悪態をつく。

「

」

少女は答えず、更に手にした”何か”を打ち込む。

「テメエ……!!」

ランサーは反撃もままならず後退する。

なにしろ少女が持つ武器は見えないのだ。

相手の間合いが判らない以上、無闇に攻め込むのは迂闊すぎる。

少女は確かに”何か”を持っている。

だがそれがどのような形状なのか、どれほどの長さなのか判明しないのでは、一切が不可視のままだ。

「ふ

っ！」

守りに回った相手は、斬り伏せるのではなく叩き伏せるのみ。

そう言わんばかりに少女は深く男へと踏み込み、叩き下ろすように、渾身の一撃を食らわせる……！

「ぐっ

！！」

「

」

弾き飛ばされたランサーと、吹き飛ばした少女は互いに不満の色を表した。

間合いは大きく離れた。

両者は静かに睨み合っている。

「どうしたランサー。止まっていたは槍兵の名が泣こう。そちらが来ないのなら、私が行くが？」

「……は、わざわざ死に来るか。それは構わんが、その

前に一つだけ訊かせる。貴様の宝具、それは剣か？」

ぎらり、と相手の心を射抜く視線を向ける。

「さあどうかな。戦斧かも知れぬし、槍剣かも知れぬ。いや、もしも弓かも知れんぞ、ランサー？」

「く、ぬかせ剣^{セイバー}使い」

それが本当におかしかったのが、ランサーは槍を僅かに下げた。

「？」

少女はランサーの態度に戸惑っている。

だが、俺はあの構えを知っている。

数時間前、夜の校庭での戦いで最後を飾る筈だった、必殺の一撃を。

「……………ついでにもう一つ訊くがな。お互い初見だしよ、
ここらで分けって気は無いか？」

「」

「悪い話じゃないだろう？そら、あそこで惚けているオマエのマスターは使い物にならんし、オレのマスターとて姿をさらさねえ大腑抜けときた。ここはお互い万全の状態なるまで勝負を持ち越したほうが好ましいんだが……………」

「断る、貴方はここで倒れる、ランサー」

「そうかよ。ったく、こつちは元々様子見が目的だったんだぜ？サーヴァントが出たとあっちゃ長居する気は無かったんだが」

ぐらり、と二人の周囲が、歪んで見えた。

ランサーの姿勢が低くなる。

「宝具！」

少女は剣らしきものを構え、目の敵を見据える。

「……………じゃあな。その心臓、貫き受ける！」

獣が地を蹴る。

手に持つ槍を、彼女の足元めがけて繰り出した。

「」

彼女は足元を狙う槍を飛び越え、ランサーを斬り伏せようと前に飛び出す。

その、瞬間。

「刺し穿つ」^{ゲイ}

それ自体が強力な魔力を帯びる言葉と共に、

「
”
死棘ホルクの槍！”」

下段に放たれた槍は、少女の心臓に向かっていった。

「
!?」

浮く体。

少女は槍によって弾き飛ばされ、大きく放物線を描いて地面に落下
いや、着地した。

「は
っ、く………!!」

………血が流れている。

今まで掠り傷一つ負わなかった少女は、その胸を貫かれ夥しいまでの血を流していた。

「呪詛………いや、今のは因果の逆転か
なっ！」

少女は先程の攻撃とは別に、目の前の光景に驚きの声を上げる。

そこには

本編・・・ランサーとセイバー・・・(後書き)

話がなかなか進まない

Side : ????

士郎はセイバーを召喚し、セイバーはランサーと戦っている。

今いる位置からは、ランサーの後姿とセイバーの手しか見えない。

が、見ている限りでは戦況はランサーが押されているように見える。

この戦況の方がこちらの都合がいい。

なぜなら、押されているなら宝具を使う可能性が高いからだ。

例えどんな英霊であれ宝具という必勝の一撃を放てば必ず隙が生じる！

「 じゃあな。その心臓、貰い受ける！」

ランサーが地を蹴る。

その時が来た。

ランサーの宝具の真名解放と同時に実行するように念話を送る。

同時に此方の準備を始める。

驚愕の声を上げ、直ぐに抜け出そうとするが、ランサーは知らないが拘束しているのはあのマグダラの聖骸布で抜け出せない。

マグダラの聖骸布は相手を拘束する事に特化した魔術礼装だ。

「ノリ・メ・タンゲレ我に触れぬ」という言葉と共にその力を発動する。

体を引き千切るほどの力はないが、男性ではこれによる束縛から逃れる事は出来ない。

男性拘束専用の聖遺物なので、英霊といえど男であるランサーはこの拘束からは逃れられない。

ランサーの驚愕を他所に、静かに俺は狙いを点け切り札その二を発動して矢を放つ。

「ルトルブレイカー破戒すべき全ての符」

「チイツ　　！」

ランサーは放った矢に気付いたのか、矢を避けようとするがマグダラの聖骸布で拘束されていて録に動けず、矢がその体に刺さる。

「ガアッ！！」

ランサーは声を挙げ、拘束されたまま倒れる。

俺はそれを見届けて、構えを解き安堵の息をつく。

待機しているメンバーに念話を送り、手に持つ弓を破棄する。

目の前の光景に驚愕しているセイバーに説明するために、俺たちは姿を隠していた魔術を解き彼らの向かって歩いていく。

S i d e : 士 郎

「
”
刺し穿つ^{ゲイ}」

死棘の槍^{ホルク}

！
”
”
その言葉と共に足元を狙っていたランサーが放った槍は、セイバーの心臓に向かっていった。

「
!?!
」

セイバーは槍によって弾き飛ばされが何とか着地したが、

「は
っ、く………!!
」

今まで掠り傷一つ負わなかったセイバーは、その胸を貫かれ夥しい

までの血を流していた。

確かに見えた。

セイバーの足元を狙っていた槍は突如起動を変え、あり得ない形、あり得ない方向に伸び、セイバーの心臓を貫いた。

だが槍自体は伸びてもいないし方向を変えてもいない。

その有様は、まるで初めからセイバーの胸に槍が突き刺さっていたと錯覚するほど、あまりにも自然で、それ故に奇怪だった。

軌跡を変えて心臓を貫く、などと生易しいものではない。

槍は軌跡を変えたのではなく、そうなるように過程を変えたのだ。

………あの名称ことばと共に放たれた槍は、大前提として既に”心臓を貫いている”という”結果”を持ってしまふ。

つまり、過程と結果が逆という事。

心臓を貫いている、という結果がある以上、槍の軌跡は事実を立証するための後付ではない。

あらゆる防御を突破する魔の棘。

狙われた時点で運命を決定付ける、使えば『必ず心臓を貫く』槍。

そんな出鱈目な一撃、誰に防ぐことが出来よう。

敵がどのような回避行動をとろうと、やはり必ず心臓に到達する。

故に必殺。

解き放たれば、確実に貫く呪いの槍。

が、それをセイバーは紙一重で避けた。

貫かれはしたものの、致命傷は避けている。

ある意味、槍の一撃より少女の行動は不思議だった。

彼女は槍が放たれた瞬間、まるでこうなる事を知ったかのように体を反転させ、全力で後退したのだ。

よほどの幸運か、槍の呪いを緩和するだけの加護があったのか、セイバーは致命傷を避け、必殺の名を地に落としたのだが、

「呪詛・・・・・・・・いや、今は因果の逆転かなっ！」

セイバーは先程の攻撃とは別に、目の前の光景に驚きの声を上げている。

それも仕方のないことだろう。

なぜならそこには、ランサーが赤い布に拘束され背中に歪んだ剣が刺さってうつ伏せに倒れているのだから。

そしてランサーの後方から二人の男女が歩いてくる。

恐らくあのフードで頭を隠した女性がランサーを拘束しているの
だろう。

ランサーを拘束している赤い布は女性の手に握られているのだから
と、いうことは女性の隣りの男がランサーを倒したのだろうか？

先程までいなかった人間が突然現れたので、警戒してセイバーは急
ぎ乱れた呼吸を整えている。

あれだけ流れていた血は止まって、穿たれた傷口さえ塞がっていく。
再生中といえど、セイバーの傷は深い。

「何者です!!」

ここで突然現れてランサーを倒したと見られる男女に攻め込まれ
ば、それこそ倒される可能性がある。

そう考えたのだろうセイバーは、手に持つ”何か”を現れた二人に
向ける。

ランサーを倒したと思いき二人はそこで歩みを止める。

「待ったセイバー！そいつらは敵じゃない!!」

俺は現れた二人に敵意を向けるセイバーを静止する。

なぜなら俺はあの二人を知っているのだから。

「正気ですか、マスター！奴らはランサーを倒したのですよ！！」
俺が理由を説明しようとした瞬間、遮る様にそいつらは現れた。

「そいつは

ザンツ

俺とセイバー、ランサーを倒した男の両方を見渡せる位置にそいつらは着地した。

それは赤い外套の男と、制服姿の少女だった。

間違いないあの赤い外套の男はランサーと校庭で戦っていた奴だ。

そして制服姿の少女を俺はよく知っていた。

「

」

思わず息を呑む。

「……………やっぱり見間違いじゃなかったか。

赤い男と一緒にいる人物は、紛れもなくあの遠坂凜だった。

「遠坂、凜

」

何と言えればいいのか。

遠坂の後ろにいる男が人間でないのは、俺にだって判る。

アレはセイバーと同じ、この世ならざる者だ。

なら　それを連れている遠坂も、その、

「え？なに、私の事は知ってるんだ。なんだ、なら話は早いわよね。とりあえず今晚は衛宮士郎君」

何のつもりなのか。

とんでもなく極上の笑顔で、遠坂は挨拶してきやがった。

「あ　え？」

「あゝ微妙に和んでいるとこ悪いが、話進めていいか？」

俺たちを止めたのはランサーを倒した男だった。

「そうね、私も聞きたい事があるしね。……………
・ねえ、衛宮飛鳥君？」

遠坂はそう言っつて衛宮飛鳥……………俺の双子の兄に目が全く笑っていない極上の笑顔を向けた。

こ、怖！！

本編 混乱と台頭 (後書き)

次回 説明と教会へ

本編 説明と覚悟

Side : 飛鳥

「そうね、私も聞きたい事があるしね。
・ねえ、衛宮飛鳥君？」

目が全く笑っていない極上の笑顔を向けてくる遠坂に対して、後ろの赤い外套の男 恐らくはアーチャーかな？が俺を見た瞬間、僅かに眉が動いたのが見えた。

セイバーは俺たちと遠坂、アーチャーを警戒している。彼女にとって、初対面の俺たちは、敵か味方が判別できないのだから仕方がない。

「 エミヤ」

士郎と俺の名を聞いた瞬間、セイバーが一瞬硬直した。

「どっかしたのか？」

一瞬硬直したその理由を俺は知っていたが、士郎が不思議そうな口調でセイバーに聞き直している。

「い、いえ で、ではマスター、貴方の事はシロウと呼ばば宜しいでしょうか？私としてはこう呼びたいのですが」

「ああ、それで良いならお願いできるか？」

「さてあちらは置いていて、何が聞きたいのかな？」

セイバーと士郎が話しているのを横目で見ながら、遠坂の笑顔に士郎のように怯まずに、逆に笑顔で聞き返す。

「単刀直入に聞くわ。あなたマスターでしょ？」

「なぜかな？」

聞かれると分かっていたので問い返す。

「あなたの横にいる女性、サーヴァントでからよ」

「君も魔術師であり、君の横にいるそのサーヴァントのマスターだな？」

「ええ、あなたと………そこいる衛宮士郎君と同じマスターよ」

遠坂のその言葉を聞いた士郎は驚いたのか、

「魔術師、だって　　？　　そんな、おまえ魔術師なのか
遠坂！？」

あゝ遠坂がいかにも不機嫌そうにこっちを見返してきてるんだけど。
。。。。。

「士郎にはそこら辺の事教えてないからな」

「どうということだよ！兄貴！！」

「あゝうるさい！突然の事態に驚くのも分かるが、後で全部説明するから黙ってる！！」

聞いてくる士郎を黙らせる。

「う、わ、分かった」

さて、気を取り直して、

「お互いマスターってことは解ったんだ、戦うのか？」

「……………辞めておくわ。二対一じゃ勝率低そうだし」

二対一か……………。

「二対一、何を言ってるんだ？」

「何って、そちらはサーヴァント二人、こっちは一人じゃないのよ」

こちらの言葉を不思議に思った遠坂が答えるが。

「違うな。……………おい、みんな！出てきてくれ！」
その言葉と共に、家から三メートル近い大男と二人の少女が出てきて、空から天馬に跨った女が降りてくる。

「……………なっ！！」「……」

セイバー、士郎、遠坂、アーチャーが揃って驚愕の声を上げる。

「姉さん、桜！！」

俺は二人の少女……………姉と桜の名を呼んだ。

「士郎、後で説明するから質問はなしでな」

兄貴は俺に向かってそう言い、遠坂を見て、

「残念だけど、二対一じゃなくて四対一だわ」

「くっ！こんな勝ち目なんてないじゃない！！」

「こちらからの戦闘の意思はないから安心しろ。それでどうするんだ？」

「どうしてこんなことになってるのか、説明して」

諦めの境地に達したのか投げやりに質問してくる。

「まあ待て、まずは士郎に聖杯戦争の説明をしないと。悪いがそちらのサーヴァント……………アーチャーには霊体になって

もらえるかな、セイバーが剣を収められないだろう?」

「……………まあ、いいでしょう。アーチャー」

「ふう、わかった」

そう言ってアーチャーは、それこそ幻のように消え去った。

「と、遠坂、いまの……………!!」

俺は慌てる士郎を放って天馬に跨っていた女……………ライダーにランサーを運ぶように頼む。

ライダーは未だ拘束されたままのランサーを抱えて、二人の少女と一緒に家の中に入っていく。

巨人の男はアーチャーが霊体かしたことを確認して自身も霊体化した。

「君もそれでいいかな、セイバー?」

「……………いいでしょう。貴方がシロウの助けになる限りは控えます」

「ふむ、では説明は家の中ですとしようか」

そして俺達は家の中に入っていった。

<<<

………で、今に至る

という訳だ」

「と、いう訳だ。納得できたか？」

俺の説明が終わり、兄貴が締め括る。

「ええ、納得出来たわ。でも、どうやってランサーを拘束して倒したのかは教えてもらっていないけど？」

「現状で俺たちの関係は敵に近いから、こちらの秘密を教えるわけにはいかないな。それに魔術師の原則は等価交換だろ？そこまで教える理由がない」

「ぐっ！」

凶星を突かれて詰まっている。

おお、あの兄貴の顔ここからが正念場だって顔してるよ。

いや実際無表情で俺しか判らないけどさ。

「ただし、条件次第では明日にでも教えてあげないでもない」

「……………」

余程、気になるのか考え込んでいるので兄貴が急かす。

「さて、どうする？」

「その条件は？」

「この後、士郎を聖杯戦争の監督役のところまで連れて行くこと、監督役に俺たちのことを黙っておくことの二点だ。これを守れたら明日教えよう」

「それはいいけど……本当に教えてくれるのね？」

遠坂は飛鳥が行かないことに疑問をもったようだがそれは聞かないようだ。

「エミヤの名に掛けて誓おう」

「いいわ。約束を守るからちゃんと教えなさいよ？」

「それじゃこっちの話を始めよう。士郎、自分はどんな立場かわかってないだろ」

こくん、と頷く。

「率直に言つと、士郎はマスターに選ばれた。どっちかの手に聖痕があるだろ？手の甲とか腕とか、個人差はあるけど三つの令呪が刻まれている筈。それがマスターの証だ」

「手の甲って……ああ、これが」

「そ。それはサーヴァントを律する呪文でもあるから大切にな。令呪っていうんだけど、それがあある限りサーヴァントを従えていられる」

「……？ あある限りって、どういう事だよ」

「令呪は絶対命令権だ。サーヴァントの意思を捻じ曲げて、絶対に言いつけを守らせる呪文がその刻印だ。発動に呪文は必要なくて、お前が令呪を使用するって思えば発動する。で、マスターが他のマスターを倒すのが聖杯戦争の基本。そうして他の六人を倒したマスターには、望みを叶える聖杯が与えられる」

「な　　に？」

ちよっ、ちよっと待て。

マスターはマスターを倒す、とか。

「ようは、お前はあるゲーム巻き込まれたんだよ。聖杯戦争っていう魔術師の殺し合いに」

それがなんでもないことのように、兄貴は言い切った。

「　　」

頭の中で、聞いたばかりの単語が回る。

「納得いったか？ 本来ならお前を巻き込むつもりはなかったんだが……結局巻き込まれたんだ覚悟を決める」

……ああ、覚悟ぐらいはちゃんと知ってる。

だが、その前に。

「兄貴……本来ならお前を巻き込むつもりはなかったってどういことなんだ？」

「……はあ。まあ理由があるんだわ。巻き込みたくない理由がな。説明はそのうちしてやるから今は聞くな。他の奴にも聞くなよ」

なんか、あからさまに怪しいがそのうち話すというのだから待つしかないのだろう。

「さて、話が脱線したから元に戻すでしょう。……この町では何十年かに一度、七人のマスターが選ばれて、それぞれサーヴァントが与えられる。マスターは己が手足であるサーヴァントを行使して、他のマスターを潰していく。それが聖杯戦争と呼ばれる儀式のルールだ」

セイバーと遠坂は俺と兄貴の会話を、ただ黙って聞いていた。

「次はサーヴァントとは何か……だ。サーヴァントは受肉した英雄、精霊に近い人間以上の存在だ」

「はあ？ 受肉した英雄？」

「そうだ。死亡した伝説上の英雄を引つ張って来て実体化させているんだ。呼び出すまでがマスターの役割で、後の実体化は聖杯がやってくれる。魂をカタチにするなんてのは魔術師には不可能だからな」

「ちよつと待つてくれ。英雄つて、ええ………!？」

セイバーを見る。

なら彼女も英雄だった人間なのか。

「そんなの不可能だ。そんな魔術、聞いた事がない」

「当然だ、これは魔術じゃない。あくまで聖杯による現象だ。そうでなければ魂を再現して固定化するなんて出来るはずがない」

「魂の再現つて………じゃあその、サーヴァントは幽霊とは違うのか？」

「違う。人間であれ動物であれ機械であれ、偉大な功績を残すと輪廻の枠から外されて一段階上に昇華する、この話は知ってるな？」

英霊つていうのはそういう連中だ。ようするに崇め奉られて擬似的な神様みたいなモノたちだ。サーヴァントつていうのは英霊本体を直接連れてきて使い魔にする。だから基本的には霊体として側にいるけど、必要とあらば実体化も出来る。さつき見たのがそれだ」

「なんだよそれ………そもそもこんな悪趣味な事を誰が、何のために始めたんだ？」

「それは知らんな。聞きたいならちゃんと聖杯戦争を監督している

奴に聞け」

兄貴はそれだけ言うと、今度はセイバーへと視線を向ける。

「さて。セイバー。一つ聞きたい君は霊体化できるのか？」

「……………いえ。どうやら不完全な召喚のようで霊体に
戻ることができません」

「……………驚いたな。正直に話してくれるとは思わな
かった」

「敵に情報を見抜かれるのは不本意ですが、貴方の目は欺けそうに
ない。こちらの手札を隠しても意味はないでしょう。それならば貴
方に知ってもらうことで、シロウにより深く現状を理解してもらっ
たほうがいい」

兄貴がセイバーに感心していると、

「……………ああもう、惜しい。私がセイバーのマスタ
ーだったら!!」

悔しそうに拳を握る遠坂。

「む。遠坂、それ俺が相応しくないって事か」

「当然でしょ!?!」

学校での優等生然としたイメージがガラガラと崩れていく。

「さて。話がまとまったところでそろそろ行きましょつか」と。

遠坂はいきなり、ワケの分からないことを言いだした。

「？ 行くって何処へ？」

「だから、忘れたの聖杯戦争の監督役の所よ」

「けどそれって何処だよ。もうこんな時間だし、あんまり遠いのは時計を見るともう11時近い。」

「大丈夫。隣町だから急げば夜明けまでには帰ってこれるわ。それに明日は土曜なんだから、別に夜更かししてもいいじゃない」

「いや、そういう問題じゃなくて」

単に今日は色々あって疲れてるから、少し休んでから物事を整理しただけなのだが。

「なに、行かないの？……まあそう言っんならいいけど、セイバーは？」

なぜかセイバーに意見を求める遠坂。

「ちょっと待て、セイバーは関係ないだろ。あんまり無理強いするな」

「おつ、もうマスターとしての自覚はあるんだ。私がセイバーと話すのはイヤ？」

「そ、そんなコトあるかつ！ただ兄貴が言うのがホントなら、セイバーは昔の英雄なんだろ。ならこんな現代に呼び出されて右も左も分からない筈だ。だから……」

「シロウ、それは違う。サーヴァントは人間の世であるのなら、あらゆる時代に適応します。ですからこの時代の事もよく知っている」

「え　　知ってるって、ほんとうに？」

「勿論。この時代に呼び出されたのも一度ではありませんから」

「な　　」

「うそ、どんな確率よそれ……!？」

「……」

あ、遠坂も驚いている。

………という事は、セイバーの言っている事はとんでもない事なのか。

でも、兄貴はまるで知っているかのように反応しない。

「シロウ、私は賛成です。貴方はマスターとして知識がなさすぎる。貴方と契約したサーヴァントとして、シロウには強くなってもらわなければ困ります」

セイバーは静かに見据えてくる。

「……………それはセイバー自身ではなく、俺の身を案じている、穏やかな視線だった。」

「……………分かった。行けばいいんだろ、行けば。で、それって何処なんだ遠坂。ちゃんと帰ってこれる場所なんだろうな」

「もちろん。行き先は隣町の言峰教会。そこがこの戦いを監督している、エセ神父の居所よ」

にやり、と意地の悪い笑みをこぼす遠坂。

「……………」

偏見だけど、あいつの性格どこか問題ある気がしてきたぞ……………
……………

本編 - - - 説明と覚悟 - - - (後書き)

次回 罪と罰

本編 罪と罰

Side : 士郎

夜の町を歩く。

メンバーは俺とセイバー、遠坂と霊体化したアーチャー、兄貴と霊体化した兄貴のサーヴァントとだ。

俺と遠坂は横に並んで、セイバーと兄貴が俺たちの後ろを歩いている。

この時間に外に出ている人は少ない。

「なあ遠坂。つかぬ事を訊くけど、歩いて隣町まで行く気なのか」

「いいんじゃない、たまには夜の散歩っていうのも」

「そうか。一応訊くけど、隣町までどのくらいかかるか知ってるか？」

「えっと、歩いてだと一時間ぐらいかしらね。ま、遅くなったら帰りはタクシーでも拾えばいいでしょ」

「そうか」

もっぱら喋っているのは俺と遠坂で、兄貴とセイバーは一言も話し

ていない。

セイバーは出かける時にどうしても鎧は脱がない、というので鎧姿では目立つので雨合羽を着せたからなのだが、兄貴は何故だろうか？少し気が立っているような気がする。

そうして歩いて間に俺達は深山から大橋を渡り新都に入る。

新都に入ると、遠坂は郊外へ案内しだした。

なだらかに続く坂道と、海を臨む高台。

坂道を上っていく程に建物の棟は減っていき、丘の斜面に建てられた外人墓地が目に入ってくる。

「この上が教会よ。衛宮君……だと被るから名前で呼ぶわね、士郎も一度ぐらいは行ったことがあるんじゃない？」

「（名前をしかも呼び捨てかよ……まあいけど）いや、ない。あそこが孤児院だって事ぐらいは知ってるけど」

「飛鳥は？」

「……近くまで来たことはあるな」

「？ そう、なら今日が初めてか。じゃ、少し気を引き締めたほうがいいわ。あそこの神父は一筋縄じゃいかないから」

遠坂は兄貴のリアクションに疑問を持ったがそのまま先だって坂を上がっていく。

……見上げれば、高台の上には十字架らしきものが見える。

今まで寄りつきもしなかった神の家に、こんな目的で足を運ぶことになるうとは。

「士郎」

そんなことを考えていた俺は、兄貴の声で自分が足を止めていたことに気づいた。

セイバーも遠坂も大分先に行ってしまったている。

急いで少し前にいる兄貴の横まで走った。

「わ、悪い兄貴」

「いや、いい。……それより士郎に頼みがある」

「なんだ珍しいな、兄貴が俺に頼みごとなんて。いいよ、何？」

兄貴は俺より器用だからあまり頼られたという記憶がない。

大抵のことはそつなくこなしてしまう兄貴が人に頼ることは珍しい。

「ああ、神父の前でお前が、親父が目指していた正義の味方を目指している振りをしてほしい」

「へ？　なんでだ？」

なんで、そんなことをしなければ分からなかったので疑問に思っ
て聞いてみた。

「理由は・・・・・・・・・・まだ、言えないんだ。頼む」

「・・・・・・・・・・分かった。理由はいつか話してくれるんだろ？」

あんなに真剣に頼まれては拒否することはできない。理由は分
からないがそれをするのがひつようなのだろう。

「ああ、恐らく数日中に話すことになると思う」

そう言って、少し微笑む兄貴の顔はどこかもの悲しげに見えたのが
やけに印象に残った。

「うわ　すごいな、これ」

教会はとんでもない豪勢さだった。

高台のほとんどを敷地に行っているのか、坂を上がりきった途端、ま
ったいらな広場が出迎えてくれる。

その奥に建てられた教会は、そう大きくはないというのに、聳える

ように来た者を威圧していた。

「シロウ、私はここに残ります」

「え？　なんでだよ、ここまで来たのにセイバーだけ置いてきぼりなんて出来ないだろ」

「私は教会に来たのではなく、シロウを守る為についてきたのです。シロウの目的地が教会であるのなら、これ以上遠くへは行かないでしょう。ですから、ここで帰りを待つことにします」

きっぱりと言うセイバーテコでも動きそうにない。

「行って来い、土郎。俺たちも残るから」

「分かった。それじゃ行ってくる」

そう言って俺と遠坂は教会に入ってしまった。

士郎と遠坂は教会に入って行った。

「セイバー。俺は少しここを離れる」

両合羽をきて教会に入っていった士郎たちを見ていたセイバーに告げる。

「何処へ行くのですか？」

「ちよつと野暮用だ」

言外にこれ以上は聞くなと言葉に込める。

セイバーは何も聞いてこなかった。

そして、一度その場を離れて気配を殺して別の場所から教会内に入る。

「
地下」

足音を消して内に進み地下へと続く階段を見つける。

壁と壁の間、建物の影になっていて、普通なら見落としてしまつくぼみに、細い細い階段がある。

「っ、は、」

気持ちが悪い、吐き気がする。

だが、足を止めるわけにはいかない。

その闇に、足を踏み入れた。

石造りの部屋だった。

明かりは消されているのに、部屋はそれ自体が生き物のように、薄青い燐光を帯びている。

明かりがないからか、なだらかに弧を描いて地上と地下を繋ぐ階段は、この聖堂を這いずる百足か何かを連想させる。

階段の下、正面のシンボルの正反対の壁に、黒い闇が空いている。

引き寄せられるように、その闇に近づいた。

入り口らしきモノをくぐり、その室内に足を置く。

湿っているのか、床はぬたりとした感触で、ひどく歩きづらい。

「っ」

強い刺激臭を感じ思わず鼻を塞ぐ。

………生臭い臭いではない。

これは ホルマリン、だろうか。

ともすれば酔ってしまっほどの薬品の匂いが、この部屋には泥のよ
うに沈黙している。

心臓は休みなく拡張を繰り返し、手足の感覚は粉々に砕けていきそ
うなほど蠕動している。

闇に眼が慣れ薄れていく。

ぼたり、とどこかで水滴が落ちる。

それが開幕の合図だったのか。

今まで見えなかったソレが、一瞬にして、網膜に焼き付いた。

「あ 「

それは。

どこか見覚えのある、生きて見る地獄だった。

死が並んでいる。

前後左右、あらゆるところに残骸が並んでいる。

たちこめる死臭を、幾重もの薬香が塗り潰す。

「あ あ」

これほどの亡き骸があるというのに、ここには死者など一人もいない。

予想していた。

知っていたのだから、こうなっていることは。

だが、

「　　生き、てる」

生きていた。

死体にしか見えないソレら、かつて人のカタチをしていたソレらは、今も、立派に生きていた。

横たわる身体を一つ一つ眼で追う。

そのどれもが、あまりにも、形を止めていない。

それぞれに何があったのか、想像するのもオゾマシク、冒瀆じみている　死体というより、枯れ木のようなだった。

すり潰され石畳の床の隙間に落ち込んだもの、壁に打ち付けられた虫達の苗床になったもの。

その経緯はどうあれ、彼らには胴と頭しか存在せず、それすらも枯れ木のようにボロボロだった。

理由を調べるまでもない。

死体は、あの棺に喰われている。

どのような仕組みなのかは知らない。

死体は棺に溶接され、棺は死体から養分を吸い上げているだけだ。

命の流れ。

魔力、いや魂に近いものを棺は搾取している。

少しずつ少しずつ。

寄生したモノを殺さぬよう、寄生したモノを生かさぬように。

……すすり泣くような風の音。

それは死体の口から漏れている悲鳴らしい。

彼らの喉はとつくに退化し、声をあげるだけの機能はない。ソレは既に、生きながらえるだけの気管になり下がっている。

それでも、死体は泣き叫んでいた。

蚊の鳴くような声で、精一杯の絶叫をあげ続けている。

痛みと不安か。

生きながらにして体を咀嚼され、少しずつ自分のカタチを失ってい

くことに耐えられず、彼らは断末魔を上げ続ける。

「
」

音がした。

手前の棺が喘ぐ。

どろり、と。

首をこちらに向けた頭から、滑ったモノが零れ落ちる。

「
」

ふやけきつた唇が、微かに揺れる。

ソレは、声にならない声で、

『「」は、ど』

と訊いてきた。

判っていた。

判っていたはずなのに、心が壊れそうだ。

この光景にも、この惨状にも。

彼らの死体の顔に見覚えがある。

当然だなぜなら彼らは十年前あの病室いたのだから。

家も両親も失った子供達。

引き取り手が見つかるまで孤児院に預けれるという話。

その前に俺と士郎は衛宮切嗣に引き取られた。

孤児院は丘の上にある教会で、その気になればいつでも様子を見に行くことが出来る。

………親父が桜を家に連れてきたときに思い出した、彼らがどうなるのかを。

助けに行きたいと思った。

だが、それはできなかった。

親父の話では教会の神父は元代行者、更に原作通りならサーヴァントが残っているはずだからだ。

勝ち目などあるはずもなかった。

いや、ソレは詭弁だ。

後の事を考えなければ、彼らを助けることは出来なくても楽にしてやることは出来たはずだ。

だが、それをしなかった。

結局、俺は自分が、自分の大切な人たちだけが平和ならソレでいいと考えたのだ。

俺は自分と大切な人たち、そして彼らを天秤に架け、自分達の平和を選び彼らを見捨てたのだ。

「……9を救うために1を切り捨てるのが正義の味方なら、1を救うために9を切り捨てるのは果たして何なのか。」

「……こ、これは一体！」

突如降ってきたその言葉が、思考の渦に嵌っていた意識を呼び戻す。

俺は言葉のほうに振り向き、すぐ近くまで来ていた彼女に声を返す。

「セイバー、付いてきたのか」

自分の声に驚く。その声は今にも泣きそうだったからだ。

「悪いが、質問とかは後にしてくれ。後で必ず説明するから……」

今の俺に余裕はない。

セイバーに向かって頭を下げて懇願する。

「わ、分かりました。これだけは答えてください……これはあなたか？」

「違う。……いや、ある意味俺の……所為とも言

える……」

そつだ、これを止める事ができたのは俺だけだ。なら俺にも罪がある筈だ。

痛い』

『痛い 痛い 痛い

めて 止めて』

『止めて 止めて 止

けて 助けて』

『助けて 助けて 助

して 返して』

『返して 返して 返

いの 痛いの』

『痛いの 痛いの 痛

して 戻して』

『戻して 戻して 戻

と、彼らの声が聞こえる。

セイバーはその声に、目の前の惨状には、動揺せずにはいられない。

俺も気が狂いそつだ。

彼らの声を聞く度に胸が深く抉られる。

いくら請われても、額く事などできない。

俺に出来る事は、せめて終わらせる事だけだ。

生かされている死体という矛盾を、正盾に戻すだけ。

この地獄を作り上げた原因に、償いをさせるだけ。

ポケットから鞘に入れられた短剣を取り出す。

「・・・・・・・・・・・・・・・・アスカ、何を」

「俺に彼らを救う術はこれしかない」

短刀を鞘から出し、近くの棺に歩み寄る。

「もしかしたら君達を助ける術があるかもしれない。君達を助けた
い、だが今の俺にはそれを選べない」

終わりという救いを与えられても、命を助けることはできない。

彼の、もはや性別も分からないカレを見る。

「俺に出来る事は終わらせることだけだ。もしかしたら君達を助け
てやれたかもしれない。

・・・・・・・・許してほしいとは言わない。俺は俺のために君達を見
捨てる。憎んでくれていい、恨んでくれてもいい。それでも、俺は
後悔をしても前に進むよ」

短刀を振りあげる。

「俺の名は衛宮飛鳥。君を殺す物の名だ」

カレのふやけきつた唇が、微かに動く。ソレは、声にならない声で、

『ありがとう』

その言葉に泣きそうになったが、それでも俺は短刀を振り落とした。

S i d e : 士郎

広い、荘厳な礼拝堂だった。

これだけの席があるということは、日中に訪れる人々の数も多いということだろう。

「遠坂。ここの神父ってのが監督役なのか？」

「ええそうよ。綺礼、いるんでしょ！七人目のマスターを連れてき

たわ」

かつん、という足音。

俺たちが来たことに気が付いていたのか、その人物は祭壇の裏側からゆっくりと現れた。

「再三の呼び出しに応じぬと思えば、変わった客を連れてきたな。……ふむ、彼が七人目という訳か、凜」

「こいつが聖杯戦争のことを知らなかったからね……。……たしかマスターになった者はここに届けを出すのが決まりだったわよね。アンタ達が勝手に決めたルールだけど、今回は守ってあげる」

「それは結構。なるほど、ではその少年に感謝しなくてはな」

神父は、ゆっくりとこちらに視線を向ける。

「私はこの教会を任されている言峰綺礼という者だが、君の名はなんというのかな七人目のマスターよ」

「衛宮士郎だ」

「衛宮士郎」

「え」

背中に悪寒が走る。

神父は静かに、何か喜ばしいモノに出会ったように笑った。

その笑みが。俺には例えようもなく

神父が祭壇へ歩み寄る。

遠坂は退屈そうな顔つきで俺の横まで来た。

「では始めよう。衛宮士郎、君はセイバーのマスターで間違いはないか？」

「……………そうだ」

「君が巻き込まれたこの戦いは『聖杯戦争』と呼ばれるものだ。七人のマスターが七人のサーヴァントを用いて繰り広げる争奪戦だ。全ては聖杯を得るには相応しい者を選抜する儀式だ。」

「待てよ。俺には聖杯に叶えたい願いなどない。戦う理由がない」

「それはどうか？ 聖杯はどんな願いがも叶えるのだぞ。マスターの中には私利私欲に眼をくらむ者もいることだろう。そんな連中が好き勝手に聖杯を使ったらどうなる？」

言峰は笑いをかみ殺している。

「理由がないのならそれも結構。ならば十年前の出来事にも、お前は関心を持たないのかな？」

「……………十年前、前……………？」

「そうだ。前回の聖杯戦争の最後にな、相応しくないマスターが聖杯に触れた。そのマスターが何を望んだのか知らん。我々に判るのは、その時に残された災害の爪痕だけだ」

「
」

一瞬、あの地獄が脳裏に浮かんだ。

「そうだ、この街に住むものなら誰もが知っている出来事だよ衛宮士郎。死傷者五百名、焼け落ちた建物は実に百三十四棟。未だ以つて原因不明とされるあの火災こそが、聖杯戦争による爪痕だ」

吐き気がする。

「士郎？ どうしたのよ、いきなり顔面真っ白にしちゃって。・・・
・・・そりゃああんまり気持ちのいい話じゃなかったけど、その
ほら、なんなら少し休んだりする？」

よほど蒼い顔をしていたのだろう。

なんていうか、遠坂がこういった心配をしてくれるなんて、とんでもなくレアな気がした。

「大丈夫だ。・・・心配かけたな」

「ならいいけど・・・」

一度深呼吸をすると吐き気をなくなっていた。

「さて 聖杯戦争に参加するのかの意思をここで決めよ」

高みから見下ろして、神父は最後の決断を問う。

「マスターとして戦う。十年前の火事の原因が聖杯戦争だつていうんなら。俺はあんな出来事を二度も起こさせるわけにはいかない」

俺の答えが気に入ったのか、神父は満足そうに笑みを浮かべた。

「それでは君をセイバーのマスターと認めよう。この瞬間に今回の聖杯戦争は受理された。これよりマスターが残り一人になるまで、この街における魔術戦を許可する。各々が自身の誇りに従い、存分に競い合え」

重苦しく、神父の言葉が礼拝堂に響いた。

「決まりね。それじゃ帰るけど、わたしも一つぐらい質問していい綺礼？」

「かまわんよ。これが最後かもしれんのだ、大抵の疑問には答えよう」

「それじゃ遠慮なく。綺礼、あんたの見届け役なんだから、他のマスターの情報ぐらいは知ってるんでしょ。それぐらい教えなさい」

恐らく遠坂は兄貴達のことを聞きたいのだろう。

「それは困ったな。教えてやりたいのは山々だが、私も詳しく知らんのだ。私が知りうるマスターは凜と衛宮士郎の二人だけだ」

「あ、そう。なら呼び出された順番なら判るんでしょう。仮にも監視役なんだから」

たいして期待していなかったのか、今度はサーヴァントが呼ばれた順番を尋ねる。

「……………ふむ。一番手はキャスター。二番手はバーサーカーだな。後はそう大差はない。先日アーチャー、そして数時間前にセイバーが呼び出された」

「そう。それじゃこれで」

「正式に聖杯戦争が開始されたということだ。凜。聖杯戦争が終わるまではこの教会に足を運ぶことは許されない」

そうして、遠坂は神父に背を向ける。

あとはそのまま、別れの挨拶もなしにズカズカと出口へと歩き出した。

はあ、と溜息をもらして俺は遠坂の後に続く。

と、

「喜べ少年。君の願いはようやく叶う」

そう、神託を下すように神父は言った。

「なにを、いきなり」

振り返って神父に問う。

「判っていた筈だ。明確な悪がいなければ君の望みは叶わない。たとえそれが君にとって容認しえぬモノであろうと、正義の味方には、倒すべき悪が必要だ」

その神父の言葉は在りし日の親父と同じだった。

兄貴は神父の前では親父が目指した正義の味方を目指す振りをしてほしいと頼まれた。

これを見越していたのか？ でも何のためにだ？

取り合えず何も言わず、神父を睨み付ける。

何か言つとボロが出そうな気がしたからだ。

「なに、取り繕うことはない。君の葛藤は、人間としてとても正しい」

愉しげに笑みをこぼす神父。

それを見て思った。

こいつは親父の対極にいる人間ではないかと。

「
」

振り切って出口に進む。

「さらばだ衛宮士郎」

バタンツ！

ドアを強めに閉めた。

………風が出ていた。

丘の上、ということもあるのだろう。

吹く風は地上より強く、頬を指す冷気も一段と鋭い。

遠坂は兄貴やセイバーたちと一緒にいる。

そこまで早足で近づくと、少しセイバーと兄貴の様子がおかしいことに気が付いた。

「どうしたんだよ兄貴？ ちょっと様子がおかしいぞ」

「………ちょっとな。早く帰ろう。ここに長居したくない」

遠坂も兄貴達の様子に不振を抱いたようだが、声をかけてこなかった。

そうして、俺たちは目を合わせないように歩き出した。

4人で坂を下りていく。

兄貴とセイバーの様子がおかしい為か、これといった会話もないまま坂道を下りきった。

ここから先は単純な分かれ道だ。

新都の駅前に行く大通りに行くか、深山町に繋がる大橋へと進むか。

「
」

その交差点の前で、ピタリと遠坂は立ち止まる。

「遠坂？ なんだよ、いきなり立ち止まって。帰るなら橋のほうだろっ」

「ううん。悪いけど、せつかく新都にいるんだもの、探し物の一つもして帰るわ」

「 探し物って、他のマスターか？」

「そうよ。だからここでお別れよ。聞きたいことは明日の昼には聞きに行くからよろしくね」

「ああ、判った」

くるり、と新都に向けて歩き出す遠坂。見えないがアーチャーも一緒なのだろう。

「……………俺たちは帰ろう。今日は疲れた」

そう言っつて兄貴は歩き出し、俺たちもそれに続く。

何があつたか聞きたいが、兄貴もセイバーも聞ける雰囲気じゃない。

そのまま俺たちは会話する事無く家に帰っていった。

S i d e : . . ? ? ? ?

人影が細い階段を下りて地下へと向かう。

地下に降りて異変に気付く。

いつも聞こえていた声が聞こえない。

人影は疑問に思いながら部屋に入っていき見たものは、生かされているだけの死体がその鎖を解かれ物言わぬモノになっていた。

モノをよく見ると首に刺し傷がある。

恐らく侵入者がやったのだろう。

どうしたものかと考えていると、紙が落ちていることに気が付いた。それを拾って読むと、しばしの間、人影は黙考し地下から出て行った。

地下に誰もいなくなったが、残されたモノたちの顔には笑みが浮かんでいるように見えた。

本編 罪と罰 (後書き)

次回 番外編

番外編 アルトリア

アルトリア。

成人の儀を迎えたばかりの少女は、その日を境に、そう呼ばれる事になった。

戦乱の時代だった。

発端は、一つの帝国の終焉である。

不滅であった筈の帝国は、数多くの異民族の侵攻によって死を待つばかりとなったのだ。

異民族との戦いに備える為、帝国はその島国から守りの兵力を剥いでしまった。

それが始まりだ。

帝国の庇護を失い、独立せざるを得なくなった彼女の国は、時をかげず様々な小王国分かれてしまった。

異民族達の侵攻。

自殺行為とも言える部族間の内紛。

後に、”夜のように暗い日々”と言われる、長い戦いの時代。

そこに、王の世継ぎとして彼女は生を受けた。

長い、戦乱の時代だったのだ。

王は魔術師の予言を信じ、相応しい後継者の誕生を待ち焦がれた。

だが生まれた子供は、王の望んでいた者ではなかった。

子は、男子ではなかったのだ。

たとえ王の宿命は持つていようと。男子でないものを跡継ぎにすることは出来ない。

少女は王の家臣に預けられ、一介に騎士の子供として育てられた。

王は嘆いたが、魔術師は喜んだ。

もとより、王となる者に性別など関係はない。

それ以上に、少女が予言の日まで城から離れる事こそ、王の証だと確信していた。

素朴で懸命な老騎士の下、少女はその跡取りとして成長していった。

老騎士は魔術師の予言を信じていたわけではない。

少女に己が主君と同じものを感じたからこそ、騎士として育てねなければならぬと信じ、その成長を願ったのだ。

だが、騎士が願うまでもなく、少女は誰よりも強くあるうと鍛錬の日々を重ねた。

崩壊し、死に行くだけの国を救えるのが王だけならば。

誰に言われるまでもなく、少女はその為だけに剣を振るうと誓っていたのだ。

そうして、予言の日がやってきた。

王を選び出すために、国中の領主と騎士が集まった。

最も優れた者が王になるのならば、と誰もが馬上戦による選定を予想していた。

だが、選定の場に用意されていたのは岩に突き刺さった抜き身の剣だけだった。

剣の柄には黄金の銘。

”この剣を岩から引き出した者はプリテンの王たるべき物である”

その銘に従い、数多くの騎士が剣を掴んだ。

だが抜ける者はおらず、騎士たちは予め用意していた、馬上戦による王の選定を始めてしまった。

まだ騎士見習いだった少女には、馬上戦の資格などない。

少女は人気の絶えた選定の岩に近づくと、躊躇う事無く剣の柄に手を伸ばした。

「いやいや。それを手に取る前に、きちんと考えたほうがいい」

振り向くと、この国で最も恐れられていた魔術師がいた。

魔術師は語る。

それを手にしたが最後、お前は人間ではなくなるのだと。

その言葉に、少女は頷くだけで返した。

王になるという事は、人でなくなるといふ事。

そんな覚悟は、生まれたときから抱いていた。

王とはつまり、みんなを守る為に、一番多くみんなを殺す存在なのだ。

幼い彼女は毎夜それを思い、朝になるまで震え続けた。

一日たりとも恐れなかった日はない。

だがそれも、今日で終わりだと少女は告げた。

剣は当然のように引き抜かれ、周囲は光に包まれた。

その瞬間、彼女は人でなくなった。

王に性別など関係ない。

ただ王として機能さえすれば、王の風貌など誰も気に掛けず、一顧

だにされまい。

仮に王が女性だと気が付く人間がいようと、王として優れているのなら問題になる筈がなかった。

剣の魔力か、彼女の成長もそこで止まった。

不気味と恐れる騎士も多かったが、大半の騎士たちは主君の不死性を神秘と讃えあげた。

そうして。

後に伝説にまで称えられる、王の時代が始まった。

新たな王の戦いは、まさに軍神の業だった。

王は常に先陣に立つ。

彼女の行く手をふさげる敵など存在しなかった。

戦いの神。
アルトリア

竜の化身とまで謳われたその身に、敗北などあり得ない。

十の年月、十二もの会戦を、彼女は勝利だけで終わらせた。

それはただ一心に、王として駆け抜けた日々だったのだろう。

一度も振り返らず、一度も汚れず。

彼女は王として育ち、その責務を全うしたのだ。

空は薄墨に染まっていた。

黎明なのか、黄昏なのか。

広い空で、高い野原だった。

手を伸ばしても届きそうにない空と、手を伸ばせば掴めそうな雲。

そこは、かつて彼女が駆け抜けた戦場の一つだった。

今は従える騎兵もない。

見渡す限り黄金だった草原もない。

鉛色に染まった空の下、広がっているのは、とうに見慣れた、戦場後にすぎなかった。

感情が湧き立たない。

彼女にとって、こんな光景は日常だったのだろう。

独り残った心には何も無い。

黄金の剣に身を預けた彼女は、一度だけ大きく息を吐いて。ゆっくり

りと肩の力を抜いた。

戦いが終わったのだろう。

彼女は討ち滅ぼした兵士の骸を流し見た後、自陣へと足を運ぶ。

それが彼女の経験してきた戦いだった。

冷静な態度は今とまったく変わっていない。

彼女はどのような苦境であろうと、彼女だった。

そうして、王の夢を見る。

その剣を抜いた時から、彼女は人ではなくなった。

父に代わって領主となった後、多くの騎士を従える王となったからだ。

彼女はアーサー王ともアルトリアとも呼ばれ、騎士を目指していた少女は、その人生を一変させた。

彼女は王の息子として振舞った。

多くの領土を治め、騎士たちを統べる身は男ではなくてはならなかったからだ。

王が少女と知る物は、彼女の父親と魔術師しかいなかった。

彼女は文字通り鉄で自身を覆い、生涯、その事実を封印した。

無論、不振に思つ者がいなかったわけではない。

だが、聖剣を持つ騎士王は傷つかず、歳を取る事もない。

エクスカリバー
聖剣には妖精の守りがあり、持ち主を不老不死にする。

それ故、騎士としては小柄すぎる体を追求する者もなく、少女としか思えない顔つきも、見目麗しい王として騎士たちの誉れとなった。

事実、王は無敵だった。

そこに体格や容姿など付け入る隙はない。

蛮族の侵攻に怯える民が求めたものは強い王であり、戦場を駆ける騎士が従うものは優れた統率者である。

王はその条件を全て備えていた。

故に 眞実、王が何者であるかなど追求する者はいなかった。

女であろうと子供であろうと関係はない。

ようは、それが『王』として国を守ればそれでよいのだ。

新しい王は公平無私であり、戦場では常に先陣に立って敵を駆逐した。

多くの敵、多くの民が死んでいったが、王の選択は常に正しく、誰よりも上手く『王』をこなしていたのだ。

そこに疑う余地はないし、そもそも、王が正しいうちは疑う意味もないだろう。

戦場では負け知らずだった。

失われていた騎馬形式を再構成した彼女の軍は、文字通り自由に戦場を駆け抜け、異民族の歩兵を破り、幾つもの城壁を突破した。

常に先陣に立っていたのは、その背に国があったからなのか。

戦いに出る為には、多くの民を切り捨てねばならなかった。

戦いに出たからには、全ての敵を切り捨てねばならなかった。

国を守る戦いの為には、自国の村を干上がらせて軍備を整えるのは常道だった。

そういった意味で、彼女ほど多くの人間を殺めた騎士はいなかっただろう。

それを重いと、感じたことがあったのかは知らない。

こんな夢では知るよしもない話だ。

ただ、戦場を駆ける姿に迷いはなかった。

玉座に身を預ける時も、憂いに眼を細めることさえない。

王とは人ではない。

人間の感情を持っていては、人間を守れない。

その誓いを、彼女は厳格に守り続けた。

あらゆる問題を解決し、誰もが舌を巻くほど政務に励んだ。

一寸の狂いもなく国を計り、寸分の過ちもなく人を罰した。

そうして、何度目かの戦いを勝利で収め、幾つもの部族を乱れなく統率し、何百という罪人を処罰したあと。

”アーサー王は、人の気持ち分からない”と。

そう、側近の騎士が呟いた。

誰もがその不安を抱いていたのか。

王として完璧であればあるほど、彼らは自らの君主に疑問を抱いた。

人の感情がないものに、人を治められる筈がない。

何人かの名のある騎士は王城を離れるようになり、それすらも王は当然の出来事として受け入れ、統治の一部として組み込んだ。

見目麗しく、騎士たちの誉れであった王は、そうして孤立していった。

だが、それは王には関係のない些末事だ。

離れられ、恐れられ、裏切られようと、彼女の心は変わらない。

是非もない。

あの剣を手にするに決意した時から、彼女は感情など捨てたのだから。

そうして、彼女にとって最後の戦いが始まった。

バドンの丘での戦いは大勝で終わり、そのあまりに圧倒的な戦果から、蛮族たちは和睦を申し入れてきた。

もはや滅亡を待つだけだった国は、そうして束の間の平和を得た。

絶対的な英雄に頼る戦乱は終わった。

ブリテンはようやく、彼女が夢見ていた国に戻りつつあったのだ。

戦乱の時代は続く。

王として定められた少女。

聖剣を抜き、その時から歳を取らず、十二の大戦を勝ち抜いた偉大な騎士。

完璧であればあるほど敬遠され、長く続けば続くほど孤立するしかなかった王。

それか、彼女の正体だ。

それでも彼女はよくやった。

否、よくやりすぎた。

効率よく敵を殲し、戦の犠牲となる民は最小限に抑えた。

どのような戦であれ、それが戦いであるのなら犠牲はでる。

ならば前もって犠牲を払い軍備を整え、無駄なく敵を討つべきだと考えたのだ。

戦いの前に一つの村を枯れさせ、軍備を整え、異民族に領土が荒らされる前にこれを討ち、十の村を守る。

それが王として彼女の出した結論であり、事実、当時においてそれは最善の政策だった。

だが騎士たちは不満だったのだろう。

彼らにとって死んでいいのは異民族だけであり、戦いになれば犠牲など出さずに勝利するのが常道だ。

戦いの中から己が領土を手放す必要などない。

自分達は勝利するのだから犠牲など出ない。

犠牲など出ないのだから、王の行為はただの徒労だと考えた。

もちろん、それは彼らの夢物語である。

いざ戦いが始まれば、騎士たちは小さな村のことなど考えない。

それらは蹂躪されて当然のものであり、彼らが守るべき対象には入っていないのだから。

騎士たちは、敵に滅ぼされるのは当然だと言い、自分達では干上がらせるのは大罪だと言う。

無論、そんな事は彼女にも分かっていた。

だが王にはそのような私情を挟めない。

彼女は私情を殺して決断を下し、彼らは私情を圧して従う。

そうして犠牲を払い、連勝を続けていくうちに国は安定した。

その代償は王への反感だった。

”王は人の気持ち分からない”と。

ある騎士はそう残し、王城から去っていった。

……おかしな話だ。

誰も人として望まなかったというのに、人としての感情がなければ反感を持ったのだから。

かねてから王に不満を抱いていた騎士たちは、かの騎士が去ったことによって、更に反感を強めていった。

あらゆる外敵と自国の問題を押し付け、彼女を追い詰めていったのだ。

破綻は見えていた。

度重なる問題が解決できなければ死。

全ての問題を解決したところで、その先にあるものも同じだろう。

だが、それは王には関係のない些末事だ。

離れられ、恐れられ、裏切られようと、彼女の心は変わらない。

・・・・・・・・・・・・・・・・それは、もうとっくに決めていたからだろう。

あの剣を手にしようと思ったときから、彼女は自らの感情など捨てたのだ。

もう何年も昔になった光景。

岩に刺さった剣。

それを前にして少女は何を思ったのか。

気が付けば、後ろには見知らぬ魔術師が立っていた。

「それを手に取る前に、きちんと考えたほうがいい」

手にすればあらゆる人間に恨まれ、惨たらしい死を迎えるとも言った。

恐れなかった筈がない。

なにしろ、魔術師はちゃんと見せていたのだ。

その剣を取れば、彼女がどのような最後を迎えるのかという事を。

「　　いいえ」

だが、それが少女を決意させた。

自身の未来を見せられても力強く頷いた。

いいのかい、と魔術師は問いただす。

「　　多くの人が笑っていました。それはきっと間違いではないと思います」

剣に手をかける。

魔術師は困ったように顔を背け、

「奇跡には代償が必要だ。君は、その一番大切なものを引き換えに

するだろう」

その、予言じみた言葉を残した。

そう。

少女はただ、みんなを守りたかった。

けれど、それを成し遂げるためには”人々を守りたい”という感情を捨てねばならなかった。

……人の心を持っていては、王として国を守ることなど出来ぬのだから。

それを承知で剣を抜いた。

それを承知で、王として生きると誓ったのだ。

だから何度離れられ、恐れられ、裏切られようと、彼女の心は変わらない。

人としての心は捨てた。

幼い少女はそれを引き換えにして、守ることを望んだのだから。

その気高い誓いを、誰が知ろう。

戦うと決めた。

何があるうと、たとえ、その先に、

それでも、戦うと決めたのだ。

避けえない、孤独の破滅が待っている。

その終わりが、これだった。

カムランの戦い。

アーサー王が遠征に出立した後、一人の騎士が玉座を篡奪し、彼女の国は二つに分かれて殺しあつた。

遠征に出た王の留守を狙い、国を乗っ取った若い騎士。

男の名はモードレッド。

騎士王の姉モルガンの息子であるその騎士は、その実、騎士王の息子だった。

結論から言えば、女性であるアルトリアに子を作ること
は出来ない。

だが、確かにモードレッドはアルトリアの血を受け継いでいたのだ。

アルトリアの姉であるモルガン　妹でありながら王となったアルトリアを恨む彼女の妄念が、どのような手を尽くしたのか定かではない。

彼女の分身として作られたモードレッドは、父を明かせぬ騎士とし

て王に仕え、その座を篡奪する日を待ち、ついに反旗を翻した。

後にカムランの戦いと呼ばれる、アーサー王最後の戦いである。

遠征先でモードレッドの裏切りを知ったアーサー王は、疲れきった兵を連れて国に戻り、自らの領土へと侵攻した。

かつて従えていた騎士をことごとく斬り伏せ、自身が守っていた土地に攻め入った。

かろうじて自分に付き従ってくれた騎士たちも散っていき、最後に残ったのは、自身と、息子であるモードレッドだけだった。

両者の一騎打ちは、王の勝利で幕を下ろした。

……だが、無傷だったという訳ではない。

強い呪いで括られたモードレッドは死してなお剣を振るい、王にもはや癒せない傷を残したからだ。

それがこの戦いの終わり。

騎士王と言われた彼女の、最後の姿だった。

辛くなかった筈はない。

思えば、彼女の戦いで辛くないものなどなかった。

十二もの戦いはそのどれもが身を裂くような戦いであり、これは、

その最後に相応しい、もつとも大きな傷跡に他ならない。

領地に戻り、自国の軍を蹴散らし。

臣下であつた騎士たちを自らの手で処罰し、従つてくれた騎士たちを皆死なせ。

その果てに、カタチの上であれ、息子であつた騎士を倒さねばならなかつた。

かつて自身が従えていた騎士をことごとく斬り伏せ、自身が守つてきた土地に攻め入つた。

かろづじて自分に付き従つてくれた騎士たちも散り、自身の体も、傷ついて動かなかつた。

周囲には誰もいない。

今まで通り、何も変わらない。

胸にあるのは王としての誇りだけ。

彼女は、この結末を知っていた。

それでも得るものがあると信じたからこそ、ただ一点の汚れも出さず走り続けたのだ。

後悔などしていない。

無念があるとしたら、それはこの、荒れ果てた国の姿だけだった。

ふと視線を上げる。

この丘なら、遠く離れた城が見えるかもしれない。

だが、あるものは戦場の跡と深い森、そして、帰るべき湖が見えるだけだった。

そう。

駆け抜けるだけだった丘は、もはや越えられぬ壁となっていたのだ。肩の力が抜ける。

そうして、初めて自分の意思で、少女は聖剣から指を離した。

それで終わった。

この夢が終わるのは当然だった。

彼女の記憶には、この先などないのだから。

……だから、これはもう変えられない一つの結末。

頑張っ頑張っ、恨まれて、裏切られて。

国よりも人を愛していたことも知られず、無慈悲な王としてあり続け。

報われる事はなく、理解されることもなく。

孤立し、裏切られ続けた彼女が死を迎えようとしている、赤く染ま
った剣の丘。

番外編 アルトリア (後書き)

次回 過去と名

本編 名と王の誓い (前書き)

前回予告からタイトルを変えました。

本編 名と王の誓い

Side : 飛鳥

. 夢を見ている。

血が熱を帯びて、体中が脈動している所為だろう。

思い出す必要のない光景を、また、こんな風に繰り返している。

これは一生切り離せない記憶だ。

普段は思い返すこともないクセに、決して消し忘れない十年前の光景。

あんなことがあったから夢に見ているのだろう。

忘れていた訳でもない

忘れたい訳でもない。

自分にとって、それは起きてしまった出来事に過ぎなかった。

だから特別、痛いと思う事もなく。

それは殊更、怒りに震えることでもない。

過ぎ去ってしまった事は、もうそれだけの話だ。

やり直すことは出来ないし、引き返す事だって出来ない。

この光景から抜け出して、衛宮　は今もこうして続いている。

そんな自分に出来る事は、ただ前を見ることだけだ。

……誰に教えられた訳でもない。

ただ漠然と、幼い頃から思っていた。

過去を忘れず、自分の成したことに責任を持つ。

過去を変える、死んだ人を生き返らせる。

それができるのならしてもいいと思うが、責任はとらないといけ
ない。

例えば、過去を変えるってことは、過去に苦しんでも現在を生きて
いる人たちの思いを無駄にするということだ。

そついう全てを無駄にしても行つ覚悟があるのなら、俺に関わらな
い範囲でもいいと思っっている。

結局、俺は自分勝手なんだろう。

今、あの時をやり直せるチャンスが来たとしても俺はそれを望まな
い。

今が幸せだと感じているし、生きていねば必ず苦しみはあると思っているからだ。

あのおときから、俺はこつこつという生き方を選んだのだから。

S i d e : 士 郎

土曜日の午後、昼食も食べ終わり遠坂たちが来た俺たちは居間に集まっていた。

巨人を除き実体化しており、各々マスターの後ろに控えている。

例外は兄貴のサーヴァントだけだ。

長方形のテーブルにそれぞれが座っている。

席順は、まず俺が台所に近い位置に座っていてその後ろにセイバー、左斜前に兄貴、その横に兄貴のサーヴァント。

兄貴の左斜め前に遠坂とその後ろにアーチャー、俺の正面だ。

遠坂の左斜め前に、桜と姉さん。桜の後ろにはライダーがいる、俺の右斜め前だ。

「さて、まずは各々自己紹介といこうか。マスターは名前を。サーヴァントはクラス名と真名を」

静まり返って誰も喋らないなか、兄貴が口火を切った。

「それではまず、……………遠坂からお願いしようか」

兄貴は、俺の正面にテーブル挟んでいる遠坂から始めるみたいだ。

「まずは、わたしね。わたしは遠坂凜。サーヴァントのクラスはアーチャー、真名は不完全な召喚で記憶に混乱があるため不明。ただ戦闘には問題ないわ」

遠坂がアーチャーの紹介で『不完全な召喚で記憶に混乱』と言つ言葉に、兄貴の眉が一瞬だけ反応した。

それに気付いたのはどうやら俺だけらしい。

それ以上は何の反応もなく、遠坂の紹介も終わる。

次に兄貴は自分の対面に座る桜を見る。

「衛宮桜です、よろしくお願いします。私のサーヴァントはクラス名ライダー、真名はメドゥーサです」

桜が座ったまま一礼して挨拶し、ライダーの紹介をする。

ライダーは桜の紹介を、首だけで首肯した。

遠坂が桜を見る目は俺たちと違うような気がするのは何故だろうか？

考えている中、兄貴は次に桜の隣りの姉さんを見る。

「次はわたしね。わたしは衛宮イリヤ、サーヴァントのクラスはバ
ーサーカー、真名はヘラクレスよ。本当の名前はイリヤスフィール・
フォン・アインツベルン。前回聖杯戦争勝者、衛宮切嗣とアインツ
ベルンのホームクルスの間に出来た娘」

「アインツベルン……………つて、ええっ!!」

アインツベルンの名を聞いた遠坂はイリヤに問いたです。

「簡単よ、衛宮切嗣は私の実父でね。アインツベルンにいたんだけ
ど、飛鳥がここに連れてきてくれたのよ」

姉さんは優雅にカップに入れて紅茶を飲みながら遠坂に答えを返す。

遠坂は兄貴を見るが、

「親父の娘だから一緒に暮らすべきだと思って連れ出したんだ」

それが当然だと言う感じで話す兄貴。

「ちなみに桜は、親父が間桐の家から連れてきた……………」

「……………この言葉の意味が分かるよな？」

兄貴の言葉に固まる遠坂。

そしてゆっくりと桜を見る。

しばしの間、二人の視線が交わる。

「固まっているところ悪いが、続きにいきたいのでね。話は今夜にでも二人でするといい」

その言葉に遠坂の視線は戻り、兄貴は俺を見る。

「次は俺か、俺は衛宮士郎。サーヴァントはセイバー、真名は……あれ、何だっけ？」

「士郎、セイバーの真名はアルトリア・ペンドラゴン。アーサー王だ」

「……なっ!?!?」

その言葉に俺と遠坂とセイバーは驚き、俺と遠坂はセイバーを見る。

「……アスカ、なぜ貴方は私の真名が分かったのですか？」

セイバーは驚きながらも兄貴に問いかける。

「簡単な話だ。士郎が召喚できるのは、触媒の関係上アーサー王しかないからな」

兄貴の横にいるサーヴァントは、被っていたフードを取り、自己紹介を始める。

「始めまして、というのも変ね。クラス名はキャスター。真名はメディアよ。私は数年前に呼び出されてサーヴァントだけどこの家の母親をやってるから、その認識でお願いね遠坂さん、セイバー」

その時、世界は止まった（正確には俺とセイバー、遠坂とアーチャーのみだが）

「ちよっ！ちよっど、どっいっことー！！」

「どっいっことだよ、兄貴！ 母さんがサーヴァントってー！！」

「桜の血のつながったお姉さんだから、私の子供みたいなものだし、私のことを“ママ”って呼んでもいいわよ。特別に許してあげる」

「言いませんっ！ー！！」

「そう言えば士郎には言っただけ？」

「聞いてない！ー！！」

「あらあら、照れなくてもいいのに……」

「照れてませんっ！ー！！」

場が混沌と化した。

しばし、落ち着くまでに時間がかかったので、お茶や紅茶を入れ直し、仕切りなおす。

「親父が死んだ後、この家には俺とイリヤ、桜と士郎しかいなかったんだよ。流石に大人がいないとまずいと思っただけだ」

そう言っただけで兄貴は俺と姉さん、桜を見る。

「今まで親父っていう父親はいたけど母親がいなかったからな、士郎も桜も母親がいたほうがいいし。普通の家庭には母親ってもんがいるだろ？ でも、俺達は普通ではなく魔術師を目指していた。だからどうせなら、母親をやってくれて俺達の魔術の師も兼ねられる人はいないかと捜したんだが……当たり前だけどそんな都合のいい人はいなかった」

そこで一息ついて、お茶を飲み、

「そこで、いないのならこっちからと思っただけで、家にあつた触媒でサーヴァントを呼んだんだ。で、現れたサーヴァントに母親と魔術師の師を頼み、現在に至るといわけた」

兄貴は遠坂と俺を見る。

「サーヴァントに母親って……」

遠坂は非常識さに頭を抱えている。

「それは分かったけど、何で俺にはそのことを教えてくれなかったんだ？」

俺の問い詰めという言葉は俺だけ話してもらえなかったから、どうしても拗ねた口調になってしまう。

「知っていたのは召喚したイリヤと召喚された母さんと提案した俺だけで桜にも知らせてなかったんだよ。聖杯戦争の開始が近づいてきたら一度契約を破棄して、イリヤはバーサーカーを召喚して母さんは俺と再契約したんだ。その後に桜がライダーを召喚して教えた。だからお前とそんなに大差はない」

そう言われて桜を見ると、桜は頷いた。本当のようだ。

「桜がライダーを召喚した後、桜と一緒に説明しても良かったんだが………。士郎を聖杯戦争に関わらせるべきかどうかの決断ができていなかったんだよ」

「俺を………どういうことだよ？」

俺が疑問を問うと、

「………セイバーだよ。セイバーの存在が士郎に対して、どう影響を及ぶか予想ができなかったからな」

セイバーの存在が俺に影響、どういうことだ？

「待ってくれ、それだと兄貴はセイバーがどういう人間かって事を知っているってことか？」

「……………知っている。セイバーは十年前の第四次聖杯戦争でマスターだった衛宮切嗣のサーヴァントだったんだからな」

「親父がマスター！セイバー、本当なのか！？」

「……………はい、間違い有りません」

そういうセイバーだが、その表情はどこか思うところがあるようだから理由を聞こうとしたのが、

「……………やはり、不満に持っているようだな、セイバー。そんなに親父に令呪で聖杯を破壊させられたことを恨んでいるのか？」

兄貴がその理由を聞いてしまった。

「理由が分からないのです。切嗣は聖杯を求めていたはずなのに……………」

「理由はある。第三次聖杯戦争において、アインツベルンがルールを破つてあるサーヴァント……………クラス名復讐者^{アウエンジャー}、真名はアンリマユ^{アンリマユ}この世全ての悪を召喚したのが発端だ。この世全ての悪は他のサーヴァントのように名を馳せた英霊でもなければ、真名通りの神でもない。古代のある村で、人間の身勝手な願いによりその身にあらゆる悪業を背負わされ、人間としての名を呪いによって世界から消され、悪の化身「アンリマユ」として蔑まれ疎まれ続ける中で「そういうもの」になってしまったただの人間である。そのため、武芸に秀でた訳でも魔術や特殊な能力に優れる訳でもなく、能力はあくまで普通の人間の水準にすぎない。だから、最初に脱落した。だが、

「「なっ!?!」」

士郎からは十年前を責める言葉は一つとして出なかった。

聞いていた遠坂も驚愕の声を上げる。

「クツクツク……士郎ならそう言うと思ったよ」

士郎の言葉に飛鳥だけが笑い、顔を上げたセイバーを見る。

「セイバー。俺は何も君を責めようという気はないし、君の望みを否定しようという気もない。やり直し? 俺に関わらない範囲ならやればいいさ。だが、」

その口元は笑みのままセイバーに問いかける。

S i d e : セイバー

「君は何のために王になろうとした?」

崩壊し、死に行くだけの国を救うために王になろうとした。

「君はそれを救えなかったのか？」

死に行くだけの国を確かに私は救えた。

「ならば、なぜやり直しを望む？」

私の所為で国が、滅んだから。

「それは結果だろうか？ 確かに君の国は滅んだが、君は、本当に何も守れなかったのか？」

民達を思い出す。愛し合い、結ばれた男女がいた。両親に祝福を受けながら、産声を上げた赤子がいた。家族に看取られて逝った老人がいた。彼らを守れた。

「君は国というカタチの無いためにモノのために戦ったのか？」

私は「国」ではなく、愛すべき故郷と家族を守るために戦っていた。

「国の民は笑っていないかったのか？」

確かに多くの人が笑っていた。

「国が滅んだからといってそれらを忘れて、背負ったモノを捨てて、君を信じた彼らを裏切るのか？」

そんなことは、できない。

そのやりとりで遠い誓いを思い出した。

岩に刺さった選定の剣の前で魔術師は、手にすればあらゆる人間に恨まれ、惨たらしい死を迎えるとも言った。

恐れなかった筈がない。

なにしろ、魔術師はちゃんと見せていたのだ。

その剣を取れば、私がどのような最後を迎えるのかという事を。

「　　いいえ」

だが、それが私を決意させた。

自身の未来を見せられても力強く頷いた。

いいのかい、と魔術師は問いたです。

「　　多くの人が笑っていました。それはきつと間違いではないと思います」

知らず目から涙が零れ落ちる。

何もかも失って、みんなに嫌われることになったとしても。

それでも、戦うと決めた王の誓い。

それでも得るものがあると信じたからこそ、ただ一点の汚れも出さず走り続けたのだ。

一片の後悔などしていない。

何故、気付かなかったのか。聖杯になど望まなくても自分が求めていたモノは全て揃っていたというのに。

本編 名と王の誓い (後書き)

次回タイトルは未定。

かなり強引だが、セイバーには納得してもらいました。

次はアーチャーかな？

リアルが忙しくなってきたので更新が遅れるかもしれません。

本編アーチャの過去と願い

Side : 飛鳥

嗚咽は零さなくなったが、今だ涙が止まらず泣き続けるセイバー。

その胸中にどんな思いがあるのかは分からないが、あの涙は悲しみではなく喜びに近いものを感じる。

少なくとも俺の言葉は彼女にとってよい結果になったのだろう。

そうなってくれれば喜ばしいと思う。しかし、このままというのもまずい。

なので、

「土郎、落ち着くまでセイバーを連れて離れてくれないか？」

俺達の話に入ることができず、泣いているセイバーをどうすればいいのか悩んでいる土郎に少し居間を離れてもらおうように頼む。

「 ああ、分かった。桜、ついて来てくれるか？」

俺の言葉に土郎は了解してくれたが、英霊といえ女性であるセイバーと二人きりになるのはまずいと思ったのか桜にもついてきてくれるように頼んでいる。

「はい、分かりました。セイバーさん少しここを離れましょう」
桜も了承し、まだ涙の止まらないセイバーを促して士郎、ライダーと共に居間を離れる。

皆でそれを見送り、俺は入れ直したがすっかり冷えてしまった湯呑みに入っているお茶を飲む。

お茶を飲みながらキャストと念話で会話をする。

（ああ疲れた。セイバーみたいな可愛い子に泣かれると罪悪感を感じてしまうよ）

（仕方ないでしょ。必要な事なんだし、それに可愛い子は泣いても可愛いでしょ？）

（そうだけどさ……、まあ多分これでセイバーは大丈夫かな？）

（そうね、あの様子なら大丈夫でしょうね。後は……）

（分かってる。タイミングは任せるよ）

（分かったわ）

念話を終えて、まだお茶が少し残っている茶のみを置く（その間は僅か数秒の出来事である）

「悪いね遠坂。こっちの問題で時間を取らせてしまって」

「別に構わないわ。………それでさっきのセイバーとの会話のことで聞きたいことがあるのだけどいいかしら？」

「構わないよ。何かな？」

間違はなく聞かれることは分かっていたし、というか遠坂とセイバー、士郎に聞かせるために話していたわけだしね。

他のメンバーは事前に知っていることだし。

「冬木の管理者であるわたしが、なぜ魔術師である貴方達に気付かなかったのか。聖杯が穢れていることとか、御三家である私よりやけに聖杯戦争に詳しいし………それに桜の事とかさ」

「ふむ、俺達に気付かなかったのは簡単だ。俺達全員が日頃からキヤスターに作ってもらった魔力殺しを付けているからだ。だから気付かなかつたんだろ」

「なるほど、確かにそうね」

「聖杯戦争に詳しいのは前回の聖杯戦争………第四次聖杯戦争に関わってしまったからだな。巷では原因不明と言っていたが、俺は親父が死にかけていた士郎に魔術を使うのを見ていたから、もしかしたら魔術師が原因かもしれないと考えた。だから、この家に来た時に親父を問い詰めたんだ」

そこで一区切りし、湯呑みに残っているお茶を全て飲む。

「聖杯とか御三家とかそこで俺は聖杯戦争の事を知ったが、ただの子供でしかなかった俺にはそれ以上どうしようもなかった。だから、

「ふうふうふう……落ち着いたわ。さあ話なさい」

遠坂は掴んでいた服を離して元の位置に座る。

いや、どう見ても落ち着いているようには見えないが、そう言おうとしたら眼光に射竦められて言えなくなる。

「数年前に偶々会ってな聖杯戦争の事も聞いたんだよ」

キャスターを召喚して直ぐの事で、交流を深めようと家族で温泉旅行に行っただけで何故かいたんだよ、湯治に来ていた宝石翁が。

宝石翁を知っていた俺とイリヤはパニックを起こし、宝石翁の正体に気付いたキャスターが攻撃しようとして俺とイリヤがそれを止めたりと、これ異常なく混乱したよ（当然の如く宝石翁を知らない士郎と桜は理解していなかったが）

いや会えたらいいなと思ってはいたんだけど、まさか本当に会ってしまつとは……俺には主人公補正とでもいうべきものが付いているのかと思つてしまつたのは内緒だ。

「……もう、いいわ。それで桜の事は？」

俺の非常識さに諦めたのか追及の手を辞めて、恐らく最も聞きたかつたであろう桜の事を聞いてきた。

「桜の事については俺も詳しいことは知らないんだ。ある日突然、親父が連れてきたからな。何でも人に頼まれたらしいんだが……」

「……」

「どうしたの？ やけにはつきりしないはね」

まさか原作を知っているとは言えないので、それらしい理由を述べる。

「ある日酒を飲んでいた親父に聞いてみたんだよ、そしたら少なくとも俺が知る限り怒りを表すことはない親父が烈火の如く怒ってたんだよ。桜の境遇に」

間桐の家はどうだったのか聞いたときの親父は怖かった。知識だけある唯の一般人にすぎない俺は親父の殺気に思わず泣きそうに小便をもらしかけた。

後になって思うが良くも悪くもなかったと思うよ本当に。

しばらくは親父が近くに來るだけで体が震えたな、その所為で親父が落ち込んだが。

「どうして？」

「理由は……分らない。だがそれを知った親父は間桐の家を完全に潰した。それで察してくれ」

「……分かったわ」

桜が家に來た時には蟲には犯されていなかったが、もし俺が何もしなかったらどうなっていたことか。

それを事前に知っていたから親父は間桐の家を完全に潰した。

桜が家に来てから数日後、間桐の家らしき所に行ってみたら瓦礫しか残っていなかった。

あれを見た時、俺は誓った決して親父を怒らしてはいけないと。

「桜とは二人で話してみるといい。桜に全く隔意がないとは言わないが、いい機会だからこれもきっかけだし。無理ならライダーかキヤスターに間に入ってもらおうといい」

「……………そうね、話してみるわ」

思うところがあるのだろう、そう言っただけで遠坂は考えこんでしまった。

少し時間を空けた方がいいと思ったので、ちょうど良かったのでトイレに立った。

トイレから戻ってきて席に着いて、側にある急須を取って湯呑みにお茶を注ぐ。

「考えこんでいる所悪いが、一つだけ聞きたい。君はなぜ聖杯を求めた？」

時間を置いたからかも遠坂が立ち直っていたので、最も聞きたい

事を問いかける。

「願い？ そんなの、別にないけど」

「なに？ それでは何の為に戦う」

「そこに戦いがあるからよ。ついでに貰える物は貰っておく。いずれ欲しい物ができたら使えばいいと思っていたのよね。人間生きていれば欲しい物なんて限りなんてないんだし」

「つまり、君は」

「ええ。ただ勝つ為に戦っていたのよ」

分かってはいたが遠坂の言い分に、肩の力が抜け笑みがこぼれてしまふ。

「何がおかしいのよ」

遠坂にそう言われて唇が笑みの形になっているのに気がついた。

「いや何、君のかつこよさに惚れてしまいそういそうでな。……
……あと名前と呼ばしてもらおうと思っただ、いいかな
凜」

「ななななななな何言ってるのよ！！」

遠坂は俺の言葉に顔を真っ赤にして言う。

「くくくそれは了承と受け取っておこう……」

さて次にアーチャーについてだが」

俺は凜のリアクションが面白くて笑えるが、睨まれたので話を進めた。

「……………何よ？」

「アーチャーの真名が分からないのは『不完全な召喚で記憶に混乱だったよな』」

「そうよ。それがどうかした？」

「ふむ……………キャスター」

キャスターは手のひらをアーチャーに向け、

「」

と、何かを呟いた。

一瞬にしてキャスターの手の平に高圧縮された何かができあがり、そして高速にアーチャーにぶつけられた。

「　　っ！！」

「アーチャー！！」

アーチャーはキャスターと畳二畳ほどしか離れていなかったため避けることができず、直撃を受け居間の壁に撃ち衝けられる。

「
」
そしてすぐに俺たちには判読できない言葉を発し、アーチャーを見えない何かに閉じこめた。

アーチャーは目に見えない檻をこじ開けようとしている。

凜は立ち上がり宝石を出し、目の前の人間に対し構えた。

「 どういうこと? 」

遠坂はアーチャーを拘束するようにキャスターに指示たのが俺だと確定し、行動の是非を問いかける。

「何、ちゃんとした理由があつてな」

俺たちは座ったままで、立ち上がった凜と、吹き飛ばされ捕縛されているアーチャーを立ち上がることなく見ている。

「どうするつもり? 私とアーチャーと一戦交えたいわけ? 」

「一戦もなにも、現状でもう勝ってるしな。君の負けだよ。凜」

「遠坂さん。こんなことを言うのはあれだけど、アーチャーに大人しくなるように命令なさい。そうしなければ、貴方に危害を加えなければならぬ。私は桜の肉親を傷つけないのよ」

キャスターは茶をすすり、宝石を構えている凜を見上げ、

「その物騒な物しまつて座りなさい。戦うつもりはないから。最初

から戦うつもりなら、貴方が飲んだ物に毒でも入れて殺してるわ」

「この状況でわたしがそうすると思ってるの？」

警戒の声を隠さずに言った凜に、俺はため息をつき、

「君は知りたいと思わないか。……………」
アーチャーの目的を」

凜はアーチャーの目的が気になるのか持っている宝石を下ろす。

「それは……………確かに知りたいわね。でもアーチャーには記憶が……………」

「そのためのこれだ」

俺はそう言って、このときの為に投影しておいた何の変哲もない鏡を取り出す。

「それは？」

「これは『照妖鏡』といってな。魔物や妖怪の正体を明らかにする、または人間の持つ魔性の部分を映し出す。これで覗かれると過去や考えている事がダダ漏れになってしまうという困った鏡だ」

俺が何が言いたいのか分かったのだろう、凜は席に座る。

アーチャーの目的を阻み、凜にそれを納得させるためには何がいいかと考えた時に俺の中に都合よくあったからだ。

「ということとは、これでアーチャーの過去を？」

「そう。記憶に混乱があるうとこれなら関係ないしな……。気のせいかアーチャーの抵抗が強くなったような気がするな」

俺の持っている鏡を見たときからアーチャーは何とか檻から脱げ出そうと必死にもがいている。

「そうね。あの反応だと知られたくないということでしょうね。ほら早くしなさい」

「はいはい」

凜に急かされて檻の中にいるアーチャーに向けて照妖鏡を向けて、アーチャーの過去を見る。

誰にも悲しんで欲しくないという願い。

できるだけ多くの人間を救うと言う理想。

その二つが両立し、矛盾した時取るべき道は一つだけだ。

正義の味方が助けられるのは、味方をした人間だけ。

全てを救おうとして全てを無くしてしまうのなら、せめて。

一つを犠牲にして、より多くのものを助け出すこそが正しい、と。

だが、エミヤという英雄は、救いたかった筈の人間の醜さを永遠に見せ続けられる。

その果てに憎んだ。

奪い合いを繰り返す人間と、それを尊いと思っていた、かつての自分そのものを。

「しかし何よあれ、投影したモノが消えない？ 最も魔法に近い固有結界の使い手……くっ殺意が沸いてくるわね！！」

「凜、落ち着け。……つまり、アーチャーはあの衛宮士郎がセイバーと共にこの聖杯戦争を勝ち残り、死後英霊化した存在。しかし、守護者としての自己のあり方と自分の理想との乖離に存在の抹消を望んでいるというわけだ？」

アーチャーが檻から脱出したのは、俺たちがアーチャーの過去と目的を知った後だった。

今はキャスターとイリヤが居間から離れ、凜は俺の横に座りアーチャーと向かい合っている。

アーチャー「士郎が固有結界持ちだと知った凜の怒りが収まらないための処置だ。」

居間に残っているのは俺たち三人だけだ。

「その通りだ。私は……。オレは何度も見てきた。意味のない殺戮も、意味のない平等も、意味のない幸福も……！
オレ自身が拒んでも見せられた。守護者となったオレには、もはや自分の意思などない。ただ人間の意志によって呼び出され、人間が作ってしまった罪の後始末をさせられるだけだった。オレが望んだモノはそんなことではなかった。オレはそんなモノの為に、守護者にならなかったのではない……！！！！！」

こみ上げる怒声は、おそらく自身に対してのみ。

あれは、とうに磨耗しきった残骸だ。

「オレは人間の後始末などまっぴらだ。だが守護者となった以上、この輪から脱出す術はない。そう唯一つの例外を除いて」

だが、ヤツは死んだところで輪の外にある”座”に在るエミヤ本体は消え去らない。

守護者となったモノに消滅などあり得ない。

それはもとより『無』、この世界の輪に無いモノを殺したところで意味はない。

「それが自分殺しというわけね」

アーチャーの独白を黙って聞いていた凜がポツリと呟く。

その顔からはどんな感情を抱いているのか読み取れない。

「だけど、英雄になる筈の人間を、英雄になる前に殺してしまえば、

その英雄は誕生しない。過去の改竄だけでは通じないだろうけど、それが自身の手によるものならば矛盾は大きくなる。歪みが大きければ或いは……か」

「そうだ、だが……」

俺にはアーチャーの言いたいことは分かる。

大前提として士郎に血縁がいる筈がないのにここにいる。

つまり、ここはエミヤシロウの過去ではない。

「アーチャーの過去とは似ているようで乖離している。いないはずの人間、変わっている立場、出来事が起きている……
・飛鳥、あなた全て知っていたんじゃないの？」

「……どうして、そう思うっ？」

凜には聞かれると分かっていたので慌てることもなく、予め決めていた通りに話が進む。

「ランサーの時といい、セイバー、アーチャーの事といい全てがア
ンタの思い通りに進んでいる。一つだけなら偶然と言えるけど、こ
れだけあるとね、知っていて行動していたという方が辻褄が合うの
よ」

「ああ全てとは言わないが大体は知っていたよ。俺は宝石翁に頼んで並行世界の聖杯戦争を見せてもらったからな。だが、知っているのはせいぜいそれぞれの立場と大きな出来事だけだ」

ここまででは教えても問題はない。

細かいことも知っているが既に俺の知っている知識とは乖離しているから意味はないしな。

それに可能ならば俺が原作を知っていることを知られたくはなかった。

だが、そうすると俺がまるで未来を知っているかのように行動すると不審の目を向けられかねない。

だから、昔からどうするべきか考えていた。

当時の戦力は、俺、士郎、イリヤ、桜、そしてイリヤに頼んで召喚したキャスターだ。

そして俺が知っている未来の情報とこれから召喚するサーヴァント達。

いや、未来の情報は過信しないほうがいい。

既に俺という存在によって齟齬ができています。

それによって未来がどう変化していくか予想ができない。

それにセイバーとアーチャーをどうする。

セイバーについては、まだどうにかなるかもしれない。

俺と士郎が前回の聖杯戦争によって生じた災害の被害者であること

を教えて罪悪感を引き出し、畳み掛ければ自分の間違いに気付いてくれるだろう。

気付いてくれないという可能性は否定しきれないが、まだ成功の可能性は高い。

だが、アーチャーをどうするか術がない。

放っておけば、士郎の身に危険が及ぶ。

未来の情報源とアーチャーについて解決する術がなく、悩んでいた俺は偶々宝石翁に会う事ができた。

その時に閃いたんだ。少なくとも未来の情報源については宝石翁に頼んで聖杯戦争をしている並行世界に連れて行ってもらえば解決する。

アーチャーについては………宝石翁に相談してみようと考えた。

幸いにも宝石翁は俺の他世界からの転生という特異性に気付いて、気に入ってくれたようだった。

聖杯戦争を行っている並行世界に連れて行ってほしいと宝石翁に頼んだら二つ返事で了承してくれた。

アーチャーについては並行世界の聖杯戦争を見た宝石翁から照妖鏡をもらって、どうすれば納得させられるのかを教えてもらった。

両方とも理由も聞かずにOKしてくれたから不審に思ったが、気紛

れでもあるんだろうと思っていたんだ。

そう、思っていたんだ。

宝石翁に会った年の夏休みに、突然家に宝石翁がやって来て弟子にしてやるとかいわれて俺は拉致されたんだ。

拒否したけどさ、それでも問答無用で逆らえなかったのよ。

並行世界に連れて行って貰ったり、照妖鏡を貰ったりで借りばかり借りてたから仕方なかったのよ。

で、連れて行かれたのは千年城であの、死徒二十七祖第九位で「血と契約の支配者」「黒血の吸血姫」と呼ばれるアルトルージュ・ブリュンスタッドに気に入られてしまったのよ。

もうこの段階で後悔したね。

借りを作ってはいけない人に借りを作ってしまったとね。

そして俺自身の気性、効率的ではあるものの限界ギリギリの鍛錬内容で鍛え上げられた。

どれだけ逃げ出そうとしても捕まえられるし、その度に訓練が過酷になるし。

まあ夏休み終了前には家に帰れたけど、家に帰ってみんなに会った時は感極まって泣いてしまった。

これで解放されたと安心していたのだが、それからは長期の休み毎

に千年城に拉致されて修業させられたり、修行の成果を確かめる為にアインナツシユの森に放り込まれたり、死徒が蔓延る町に呐喊されたりと、思い出したくないものばかりだ。

ああ、思い出したら目に心の汗が……………。

「ちょっと、何いきなり泣いてるのよ」

「違うやい！ これは心の汗だ！！ 断じて、断じて、過去の修行を思い出してないでなんかない！！」

「（そんな泣きそうになる過去の修行でどんなのよ）そっそれで並行世界の聖杯戦争はどうなったの？」

「……………大まかに変わっていない。それぞれの立場が変わっているぐらいだな。……………後は俺がいなくらいか、呼び出しているサーヴァントはイレギュラーを起こさないために同じにしたしな」

実際、俺が関わらなければそうなっていただろうが。

「そう……………アンタの存在が少なくともみんなにとってプラスに働いているということなんでしょうね」

「そうなってくれると俺も嬉しいな。これは他のメンバーには黙っておいてくれよ？ 知られると面倒だからな。話も合わせてくれ……………あと、実際問題にアーチャーから見て、どうなんだ
士郎は？」

一人黙り込んでいたアーチャーに問いかける。

「一つだけ聞きたい。貴様や士郎は『正義の味方』を目指したのか？」

それはあの日、見た綺麗な理想。

英雄エミヤシロウの原点。

全てはそこから始まり、そこで終わる。

強迫観念、いやもはや呪いとすらいつていいほどの思い。

だが、

「確かに俺は親父が目指した『正義の味方』に憧れはしたが、ただの憧れだ。『正義の味方』は9の為に1を切り捨てる存在だ。だが、1が大切な人だったらどうする？ 『正義の味方』なら切り捨てなければならぬ。だが、俺には無理だ。十年前の大火災の時、俺は赤の他人より士郎を助けることを優先したんだからな。究極的には他人がどうなるかと構わない。まず大切な人達ありきだからな」

俺の思いは『正義の味方』という在り方とは違う。

確かに親父の望んだ理想は綺麗な。

それでも俺は大切な人達を優先する。

他人を救い、大切な人たちを守れなければ俺は一生後悔する。

だが、逆の場合は後悔はするだろうが一生することはないだろう。

単純に天秤にかけただけだ。自分の中でどちらが本当に大切なのかを。

「士郎はアーチャーと同じように、親父が目指した『正義の味方』に憧れていたよ。当然だよな。士郎には十年前の大火災以前の記憶がほとんど無い。覚えているのは自身の名前と俺の存在だけだ。過去の無い士郎には自身の根幹と成すものがないから、俺は士郎に昔の話をしなかつたし、確固たるモノが欲しかったんだろつな。……だから『正義の味方』という綺麗な理想に憧れたんだろつな」

「では、やつは……」

喜色を表すアーチャーだが、その希望は潰える。

「だが、親父がそれを否定した。『正義の味方』はただの自己満足だと断定したんだ。当然、士郎はそれを認めなかつたが最終的には納得したよ。士郎には親父が死んでからは俺も昔や両親の話をした。だから少なくともアーチャーみたいになることはないだろ」

今の士郎は多少人助けが趣味みたいなのところがあるが、自分を大切にしている。

家族の影響もあり、原作のような歪みはほとんど無いといっていい。

俺の言葉にアーチャーは肩を落とす。

その胸中はどうなっているかは誰にも分からない。

口を滑らせるためにお茶を一口飲む。

「並行世界の聖杯戦争やアーチャーの過去を見ていて思ったんだが、あくまで過程の話ではあるがセイバーに出会わない、もしくは別れなければ守護者にならなかったのではないか？」

「どついうことだ？」

俺の言葉の意味がアーチャーには分からないようだ。

「俺の知っている平行世界やアーチャーの記憶では衛宮士郎にとってセイバーと言う存在は、憧れであり、出発点にもなった存在だろう？」

あの遠い、朝焼けの大地。

セイバーの存在は、磨耗した彼でさえ覚えていたほどだった。

「良くも悪くもセイバーに出会わなければ、エミヤシロウは身の丈にあった『正義の味方』になっていたはずだ」

「そうかもしれん。警察官辺りになってたかもしれんな」

思い当たる節があるのだろつ、アーチャーは俺の言葉に納得する。

「だから、俺は可能ならば士郎とセイバーを会わせたくなかったんだ」

「なるほどセイバーの影響を受けて、アーチャーのようにセイギノミカタを目指す可能性が出てくるということね」

聞いていた凜もそれに納得する。

「ああ、だが出会ってしまったのはしょうがない。後はどうにかするさ。士郎が英雄にならなければアーチャーが消えるという可能性もないわけではないからな」

「……………」 『別れなければ守護者にならなかったのではないか』とはどういうことだ？

俺の言葉には帰さずアーチャーは自身が気になったこと聞いてくる。

「アーチャーの過去を見ていて思ったんだ……………。本当はセイバーと別れたくはなかったんじゃないのか、もしくはもう一度会いたかったんじゃないのかってね」

これは俺が思ったことだ。

もし、セイバーに出会わなければ身の丈に合ったセイギノミカタを目指したのではないか。

もし、セイバーと別れなければ守護者になどならなかったのではないか。

「……………そう、なのかもしれんな」

アーチャーの言葉は重い。

それ以上俺も凜もアーチャーには何も言えず居間には沈黙が下り続けた。

本編アーチャの過去と願い (後書き)

次回タイトルは前回と同じく未定。

士郎がセイバー出会わなければとか、別れなければというのは独自解釈です。

来週特に忙しくなるので、できれば今週中にもう一話投稿できたらいいかな？

少なくとも来週の月々金の間は投稿しないと思います。

本編 偽善と推測 (前書き)

前話で凜とアーチャーに飛鳥に話を合わせるようにとお願い修正しました。

Side : 三人称

誰も喋らず鎮まり返っている居間に廊下からの足音が響く。

近づいてきた足音は居間の近くで止まり、閉まっていた襖が開かれた。

「 何鎮まり返ってるんだ、兄貴? 」

襖を開けた士郎が居間の鎮まり具合を見て、理由を話してくれそうな飛鳥に問いかけた。

アーチャーはどこか沈んだ雰囲気醸し出し、遠坂はそんなアーチャーを心配気に見ていたからだ。

「 ちよつとな 」

飛鳥は理由を言うわけには言かず、適当に話をぼかす。

「 そうか 」

理由が気になったが士郎は、後ろに人がいることを思い出して居間の中に入る。

士郎の後に続いて桜、ライダー、そしてセイバーが居間に入り、士

郎と同じく居間の雰囲気に疑問を持ったが聞かずに元いた位置に座る。

「それでセイバー、君はこれからどうするんだ？」

飛鳥はどこかすっきりとした顔になって戻ってきたセイバーに問う。

「……………私は愚かだった。求める必要など、なかった。例え結末が滅びであろうとも、王としての責務を全うすると誓った。その誓いは最後まで守れた」

セイバーは遠い誓いを思い出した。

何もかも失って、みんなに嫌われることになったとしても、それでも戦うと決めた王の誓いを。

結果は無残だったけれど、その過程に一点の曇りもないなら、それは。。。

「確かに国は滅びました。だけど、私が求めていたモノは全て揃っていました」

……………そう、全て揃っていた。

騎士としての誇りも、王としての誓いも。

アルトリアと言う少女が見た、ただ一度のとうといユメも。

「切嗣は正しかった。彼は、私を裏切ってなどいなかったのですね」

セイバーは静かに自身の過去を悔いるように、呟いた。

「聖杯は、私の求める物でなかった。……いえ、もとより聖杯など必要ではなかったのです。切嗣はそれに気がついていたのではないでしょう」

その呟きは、懺悔に似ていた。

もう謝れない相手に言葉をかけ、ずっと抱いていた思いと決別する為に、こうして自らを見つめている。

それは言葉にしなくても、こうして傍にいただけで確かに心に響いている。

「セイバー、それは」

士郎はセイバーに言葉を言いかけるが、

「……解っていました。やり直しなんてできないのだと。私はそれを知りながら、必死に自身を偽り続けてきたのです」

それも終わり。

長かった彼女の戦いは、これで本当に。

「ありがとう、アスカ。貴方のお陰で、ようやくとるべき道が分かりました。……ええ。あの聖杯もこの私もありえてはいけない夢だったのです」

セイバーの答えは、綺麗だった。

彼女らしい潔癖さと尊厳に満ちた決断。

自らの過去を誇り、その先にある結末を受け入れた。

そんなセイバーに誰も何も言えない。

だが、

「……………セイバー、君に親父からの伝言を預かっている」

唯一人、飛鳥だけがその口を開いた。

「切嗣から伝言、ですか？」

「ああ、『セイバー、君には何もしてやらなくて済まなかった。僕は決して君が嫌いだった訳ではない。君は女の子なのに血なまぐさい闘争の人生を歩み、そしてそんな運命を受け入れてしまった君自身と救いの手を差し伸べなかった周囲の人間を許せなかったんだ。それを許して欲しいとは言わない。ただ、一人の人間としての幸せを求めて欲しい。それが君に何もしてやらなかった僕の願いだ』……これが親父の伝言だ。俺もセイバーには人間としての幸せを求めて欲しいと思っている。あまり時間はないがよく考えて欲しい」

「切嗣がそんなことを……………解りました。考えてみます」

飛鳥から伝言を聞いたセイバーは頷いた。

その時、また廊下から複数の足音が居間に近づいてきた。

近づいてきた足音達は居間の襖を開き、居間に入ってきた。

居間に入ってきたのはキャスターとイリヤと見知らぬ女性、そして、

「えっ！ ランサー！！！」

ランサーである。

「よっ！ 久しぶりつてのも変だな。昨日も会ったばかりだし」

ランサーは居間にいる面々を見渡して右腕をシュツタと上げて言った。

「凜、アーチャー、士郎、セイバー待ちなさい。ランサーは敵じゃないわ。剣を下ろして座りなさい、ランサー達も」

遠坂達は立ち上がってランサーを睨むがランサー達と一緒に現れたキャスターによって止められ、ランサー達も座る。

「貴方も出てきなさい、アサシン」

「やれやれ、仕方あるまい」

キャスターの言葉と共にアサシン

群青の侍が現れた。

「「「な！！！」」」

驚愕の声を上げる遠坂、アーチャー、セイバー。

アサシンはそれを見て、にやりと笑った後、

「自己紹介しよう。私はアサシンのサーヴァント、佐々木小次郎」

歌うように、そのサーヴァントは口にした。

このサーヴァントこそ物干し竿と呼ばれる長刀を持ち、慶長の世に並ぶものなしと噂され続けてきた剣士。

「佐々木小次郎って巖流島で宮本武蔵に敗れたあの？　それがなんでセイバーじゃなくてアサシンのクラスに？」

驚きから逸早く生還した遠坂がアサシンに疑問を問う。

「なに、私はキャスターのルール違反によって召喚されたサーヴァントでな。故に本来呼ばれるはずのない私が呼ばれたのだよ」

「（恐らくキャスターがアサシンを呼んだのは飛鳥の知っている聖杯戦争に近いものにするため、そしてイレギュラーを起こさないためでしょうね）なるほど……それじゃあそちらの女性は？」

遠坂は一人納得し、ランサーと一緒に入ってきたアーチャーの過去にはいなかった男装の麗人について飛鳥に尋ねる。

「彼女はランサーの本当のマスターだ」

「本当の、どいうことだ？」

ランサーに襲われた士郎が答えた飛鳥に聞く。

「それは自己紹介も合わせて彼女に言ってもらおうか。ああ彼女にはみんなのこと言ってるから自己紹介はしなくていいぞ。じゃあよろしくバゼット」

そう言っただけ飛鳥は座る位置を少しずらしバゼットが座れる場所を作る。

「はい、分かりました。改めて、バゼット・フラガ・マクレミッツです。お見知りおきを」

「俺はランサー、真名はクーフリーンだよろしくな」

「……………よろしく（お願いします）」

飛鳥、キャスター、イリヤ、アサシンを除いた面々がバゼットに挨拶を返す。

「なぜ私がランサーの本当のマスターかというと、ある男に令呪を奪われたためです」

「っていうことは奪った令呪でランサーを従えたのね。その男は」

遠坂はバゼットの言葉から本当のマスターという意味の答えに辿り着く。

「はい、そうです。その男とは旧知の間柄だったので油断してしまっただけです」

「その男って誰？」

「……………聖杯戦争の監督役の
言峰綺礼です」

「え！」

令呪を奪ったのは監督役の言峰、その事実には声を上げたのは士郎だけだった。

「あれ、何でみんな驚かないんだ？」

声を上げたの自分だけだったので、士郎は疑問に思い飛鳥に聞く。

「俺とイリヤは既にバゼットから聞いてるし、遠坂にはさっき言った、桜は言峰に会ったことがないからな」

遠坂は先程アーチャーの過去を見たから知ってるし、桜は会った事の無い人間が裏切っているとしてみても実感が湧かないのだろう。

「……………兄貴、俺に隠し事多くないか？」

士郎は聖杯戦争に関わってから家族から秘密にされていることが多いのでそう聞かすにはいれなかった。

「悪いな士郎。元々お前を参加させるか迷ってるって言っただろう。だから言えなかったんだ。これからはなるべく隠し事しないようにするからそれで勘弁してくれ」

そう言って頭を下げる飛鳥に逆に士郎の方が恐縮してしまう。

「わ、わかったから頭なんて下げないでくれ。隠してたっていうのも俺のためなんだろ。だからもういいよ」

「そうか」

士郎の言葉を聞いた飛鳥は下げていた頭を上げて頷いた。

「この際だから、俺の知っていることを話そう。これはみんなに関係のある話でもある」

飛鳥はそう言っただけで周りを見渡しながら言った。

「親父に聞いたが言峰は前回の聖杯戦争でアーチャーのマスターだった。これは間違いないなセイバー？」

「はい。言峰は確かにアーチャーのマスターでした」

前回の聖杯戦争の参加者であるセイバーに確認をとる。

「俺は聖杯戦争の事を聞いたが、親父は最終決戦で言峰を殺したと言った。親父が死んでから数年経ってから気付いたが、殺したはずの言峰が何故生きている？」

「それは死んでいなかったのでは？」

セイバーが飛鳥の問いに答える。

「俺もそう考えたが、少しやつの周りを調べてみたらあることが解ったよ」

「あること?」

「凜、十年前の大火災で孤児になった子供は何処に行ったと思う?」
士郎が聞いたが飛鳥はそれに答えず、アーチャーの過去で答えを知っている遠坂に孤児の行方について聞く。

家も両親も失った子供達。

引き取り手が見つかるまで孤児院に預けられるという話。

その孤児院は丘の上にある教会。

「何処ってそれは確か言峰教会に………まさ………か………」

話を合わせてもらう様には言っているがそれでもこの事実は辛いよ
うだ。

「そうだ。本来なら一時預かりにしか過ぎない言峰教会に預けられ
てからの行方が解らなかつたんだ」

飛鳥は机に肘をつき手で顔を隠すように覆う。

「それを知ってからには死に物狂いで捜したよ。だが、どれだけ捜し
ても見つからなかった。死んだはずの言峰が生きていて、そして孤児
達の行方が解らない。そこで俺はある推測を立てた」

顔を隠している飛鳥は、泣いているように見えた。

「死んだはずの言峰が生きていているのだから、言峰のサーヴァント、アーチャーも現界しているのではないかと」

「馬鹿な！！そんなことがある筈がない！！！！」

飛鳥の推測にセイバーが異を唱える。

「根拠なら在る。サーヴァントを現界させておくには魔力が必要だ。そしてその魔力は行方の知れぬ孤児達から搾取していたとしたら可能だ。……………そしてそれは行われていた。君も見たはずだ」

「まさかあの時の……………」

「あの時？」

セイバーの言うあの時というのが分からず疑問符を浮かべる土郎。

「土郎、何故イリヤや桜は教会に行っていないのに、お前だけ行くように言ったのか分からないか？」

「（そう言えば。それに言峰の前では親父が目指した『正義の味方』を目指している振りをしろとも言われた。まさか……………）兄貴、俺を囮にしたのか？」

「そうだ。言峰は衛宮に拘っている。そこに衛宮に連ねる者が聖杯戦争のマスターになったと聞けば興味を向ける。その間に教会の中を調べたんだ」

囮にされたことに怒りを覚えた土郎だが、先程のセイバーの様子が

おかしい事に気付いてまさかという考えが浮かぶ。

「教会の地下室に彼らはいたよ。彼らには胴と頭しか存在せず、それすらも枯れ木のようにボロボロだった。それでも生きていた……いやあれはただ生かされていただけだ」

息を呑む音が居間に響き渡る。

「俺が彼らに出来る事は、終わらせる事だけだった。俺は……
……彼らを殺した」

誰も何も言えない。

セイバーは自身が前回の聖杯戦争に関わっていたが故にその責任を感じ、士郎は切嗣に拾われなければ彼らと同じ事になっていたかもしれない事に恐怖を感じた。

「それが分かっていたのなら何故彼らを救えなかったの？」

飛鳥なら救えたはずだと責めるかのような口調で問う遠坂。

「凜、お前にも分かっている筈だ。人間ではサーヴァント……
・英霊には勝てない。その時にはキャスターを召喚していたが勝率は0に近かった」

飛鳥にはこれが偽善だと分かっている。

彼らの苦しみを終わらせるだけならできたのだから。

「……やけに具体的ですね。もしかしてアスカ、

あなたはアーチャーの正体を知っているのですか？」

「推測だがな。．．．．．セイバー、親父に聞いたが君はアーチャーに勝てなかった。これは間違いないな？」

セイバーは俯いたまま答えない。

それは肯定の意に他ならなかった。

「セイバーが、勝てなかった？」

士郎は飛鳥の言葉を信じれなかった。

セイバーはランサーをほとんど圧倒していたし、自分が知る者の中で彼女以上の存在がいるとは考えられなかった。

「前回の戦いでは、私は最後まで彼の正体を掴めなかった。あの英雄には、シンボルとなる宝具が存在しなかった。彼は英霊の証となる宝具を湯水のように持っているのです。あまりにも数がありません。私達はアーチャーの正体を絞り込む事はできなかった」

「．．．．．となると結論は一つね。アーチャーの使っていた宝具はみんな偽者だと思わない？　そうでもなければ説明がつかないでしょ」

「同意見です。ですが」

セイバーは遠坂の意見に同意するが、

「偽者とは思えない、だろ」

「！！はい。その威力などから見ても考えても偽者とは思えないのです」

「全て本物だとしても該当する英霊なんて……」

「そうだな、全て本物だと仮定して、古代ウルクの王ギルガメッシュならどうだ」

飛鳥が唯一該当する英霊の名を上げる。

伝承、神話っていうのはゼロから生まれたわけじゃない。あらゆる神話には共通項があるのは、モデルとなった大本があるからだ。信仰として完成する伝承は、その土地に帰順した物だけだ。魔剣、聖剣の類が能力を発揮するのはその辺りからだ。

だから、仮にその前。

あらゆる神話で宝具と呼ばれるモノが、そう呼ばれる前のカタチがあるのだとしたら？

「かつて世界が一つであった時、世界の全てを手に入れたギルガメッシュは、後の世に伝わる宝具の元になった「宝具の原典」を全て宝物庫に保管していたという」

それは遺産のようなものだ。

系譜、時代を遡っていけば必ず”原型”は存在する。

ならば各国に伝わる神話、伝承、宝具の原型があるのは道理だ。

そして遙かな過去、それらの原型を集める事が可能だったのなら、全ての宝具を所有したことになる。

それに該当する英雄は一人だけ。

セイバーやバーサーカーより振るい伝説を起源とする者。

かつて古代メソポタミアに君臨した魔人。

己が欲望のまま財宝を集め、その果てに不老不死を求めた半神半人の王。

「ギルガメツシュ。人類最古の英雄王なら確かに」

セイバーの恐れをかみ殺す声。

「恐れる必要はない。ヤツに対する対策は既に立ててある」

「……………それは、本当ですか？」

飛鳥の言葉が信じれないセイバーは再度問う。

それに飛鳥は頷き、手で隠していた顔を上げる。

「……………教会の地下室に言峰を『大聖杯』に呼び出す紙を置いておいた。奴らを倒し『大聖杯』を破壊する。決戦は今夜0時だ。各自それまでに体を休めておいてくれ」

飛鳥の顔には涙の後などなく、その目は決意に満ちていた。

本編 偽善と推測 (後書き)

文才がないので急になってしまった。

いい加減次に行きたい。

次回は来週の日曜日辺りになると思います。

家族編 本当の家族と罪の在処 (前書き)

改変に伴い、思いついたので投稿しました。

設定を改変したらプロローグ1、2がなくなり、ほぼ中身を変えて一つに纏めました。

改変に合わせていろんなところを修正したり、改変したりしましたのでご確認下さい。

(例えば、「始まり」「や」「アーチャの過去と願い」が主です)

家族編 本当の家族と罪の在処

Side : 飛鳥

「ひっ！」

その顔を恐怖に染めた男を俺は手にした干将^{かんしやう}・莫耶^{ぼくや}で斬り伏せる。

斬られた男からは血が吹き出し、ゆっくりと倒れる。

吹き出した血は俺の手や服に飛び散りそれを拭う暇もなく、駆け抜け立ち塞がる者を老若男女関係なく切り捨てていく。

俺は顔に血が掛かろうとも無表情に、ただ人を殺すという作業を行う。

俺の服は黒いのでは血が掛かって目立つことはない。

見た目には変わらなくてもそれでも人を切り捨てることに服に血が掛かり、水分を含んだ服が重みを増していく。

重みを増した服が罪の重さを表しているようだとの心は何処かでそんな事を思った。

それでも、

殺して

殺して

殺して

殺して

殺して

やがて目的もなく人を殺すという作業を行っていた俺は、血を吸った服の重みで倒れないようにする為に一歩も動けなくなった。

そして初めて自分の周りを見渡した。

そこには、

斬りつけられた死体

焼かれた死体

何かに押しつぶされた死体

目立った外傷はないがピクリとも動かない死体

俺の周りには他には何もなく、死体しかなかった。この光景に似たものをかつて見たことがある。

似ているのだ、俺達がいろんなものを失ったあの大火災に。

そう思った俺は目の前の死体の顔に見覚えを感じた。

・・・・・・・・・・・・・・・・目の前の死体は、いや死体たちは俺の両親だった。

その体は刃物で斬られた後がある。

そして俺が手に持つ干将かんしょう・莫耶ぼくやからポタリポタリと血が滴り落ちて
いる。

(殺した・・・・・・・・俺が、殺した)

それを認識した俺は視界が滲んでいくのを感じた。

「あああああああああああああああああああああああX」

俺はその光景に耐えられず涙を流し空に向けて絶叫した。

Side:イリヤ

誰かが部屋を出て行く音で目が覚めた。

今まではアインツベルンの城で独り部屋だったので、物音に反応してしまふのだ。

今、この部屋には左から土郎、桜、私、飛鳥の順で布団を敷いて寝ている。

私に来る前は左から桜、切嗣、土郎、飛鳥の順だったそうだ。

私がこの家に来て切嗣が死ぬ前は、土郎が私に気を利かして移動して左から土郎、桜、切嗣、私、飛鳥の順で寝ていた。

誰が部屋を出たのか自分の周りを見て、土郎と桜はいるが私の横に寝ているはずの飛鳥の寝ていた布団には誰もいなかった。

ここ数日、切嗣が死んでから毎日飛鳥は夜中に部屋を抜け出している。

戻ってくるのは必ず一時間も経ってからだ。

それでいて誰よりも早く起きて朝食の準備をして全ての家事を一人でこなしている。

私達と一緒に学校にも通っているし、魔術や体術の修練も行っている。

一体、何時休んでいるのかと問いたくなつたのはおかしいことではないはずだ。

それに切嗣が死んだときも泣いている土郎や桜を一人で宥めていた。

片時も休む事無く家族の為に日々を過ごしていると言っても過言ではないはずだ。

それに最近是人との直接の接触を避けているように感じる。

このままでは心と体が壊れる。

だから、この行動に何となく胸騒ぎを感じて、布団を剥がして閉められている襖を開き廊下を歩く。

こんな夜中に行くとしたらトイレだろうと思ったから、まずトイレに行ったが誰もいなかった。

何処にいるのかと土郎と桜を起こさない為に足音を消して捜していると、洗面所のドアから光がもれていることに気付いて、洗面所に近づいてドアを開けた。

悪夢で目が覚めた俺は汗を掻いていて気持ち悪かったので、寝ている三人を起こさないように部屋を出て風呂場でシャワーを浴びていた。

熱いお湯が体を洗浄して行く中、熱いお湯で手をこすり合わせるが、俺の目には汚れが落ちているように見えなかった。

洗っても洗っても手にこびりついた………そう、血の跡が落ちない。

お湯で流されていく血。だが、その血は止まることなくどれだけ洗おうとも流れて行く。

俺は理解していた。それが精神病のそれである事。

それがさっきの悪夢であり、今も消えない血の跡なのだろう。

殺人を犯した、というのもあるだろうが、あの大火災で土郎以外の誰も助けられなかったのが原因の一つだろう。

それに前世で両親の記憶がないからその存在を実感できなかったが、あの二人は紛れもなく俺の両親と認識していた。

だからこそ、何か行動を起こしていれば家族を守れたのでは考えてしまい、罪悪感を感じて俺が殺してしまった思ったってしまう。

今までは土郎や桜、親父、聖杯戦争の事だけを考えて、何とか精神の安定を図ってきたが、イリヤを連れてくる時に立ちはだかった者を殺した事でそのバランスを崩れてしまった。

あの大火災を起こしたのが自分ではなく、他の誰かだからこそ精神の安定を保てたのだ。

だが、イリヤを連れてくる時に殺したのは間違いなく自分なのだ。

それに親父が死んだのも大きい。

この家にいる人間は全員子供だ。

俺も子供だが、前世と合わせれば三十を越えるため家族の前で弱い姿を見せるわけにはいかない。

親父が死んだことで完全に精神のバランスを崩しても、何とか日常生活は問題なく過ごせているが毎日夜中に悪夢で起きて風呂に来ている。

「ふう・・・・・・・・・・」

風呂場から上がって体を拭いて新しい服に着替ると溜息が漏れる。理由は疲れているからだ、精神的にも肉体的にも。

俺の肉体は間違いなく子供だ。子供の体では家の家事と数日も夜中に起きてこんなことをしていれば嫌でも疲れてくる。

精神も幾ら大人でも肉体が子供では、精神も肉体につられて幼くなってくる。

今この家には大人がいない。ならば精神で大人である俺が、子供である彼らに弱っている所を見せるわけにはいかない。

そんなことになればどうやって生きていけば分からなくなる。

そんなことを考えていると、キィとドアが開かれる音がした。

「誰だ!！」

意図したわけではないがその声は大きく、問い詰める口調になってしまった。

単純に相手が気になったというのもあるが、こんな時間にこんなこととしているのを見られたのが一番大きい。

ドアを開けた人物は俺の大声にビクリと体を振るわせるがそれでも洗面所に入ってきた。

電球の光が洗面所に入ってきた人物を表す。

「イリヤ? どうしたこんな時間に」

「飛鳥が、毎日こんな時間に部屋を抜け出すから気になったのよ」
気付かれていたのかと思っただが、よくよく考えてみれば同じ部屋で寝ているのだから、いずれは気付くことだろう。

「……………何でもないよ、夢見が悪くてね。汗を掻いたからシャワーを浴びていたんだ」

「そう、なら切嗣が死んでから毎日夢見が悪いみたいね」

そこまで知られているのかと、流したはずの汗が背中に流れる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

咄嗟には何も思い浮かばず答えられなくなってしまった。

「その沈黙は肯定と受け取るわ。・・・・・・・・・・土郎と桜は気付いてないみたいだけど、飛鳥あなた無理してるでしょ。最近顔に覇気がないわよ」

「そうか、気のせいじゃないのか？」

無理があるかもしれないが、それを認めるわけにはいかない。

それを認めてしまったら俺は・・・・・・・・・・

「やたらと溜息を付いているときが多いし、それに気が付いたら手を洗っている。それでも無理をしていないと？」

「ぐっ・・・・・・・・」

自覚していなかったが、かなりそれらしい行動をしていたようだ。

それでも言うわけにいかないのです、何とか誤魔化す。

「そっそっだな。ちょっと疲れているかもしれないから、さっさと寝るよ」

そう言ってイリヤの横を抜けようとするが、

「待ちなさい」

イリヤは横に動いて立ちはだかり、背伸びをしてイリヤより少し背に高い俺の頭抱える。

「なっ何を?!」

「大丈夫、大丈夫だから。独りで抱え込まなくてもいいから」

突然、頭を抱えられたことに驚いたがその言葉と温もりに安らぎを感じて成すがままになる。

記憶を振り返ってみれば、前世ではこうやって抱きしめられた記憶もないし、今世でも精神的に大人だったため恥ずかしくて逃げたので数えるほどしか抱きしめられた記憶しかない。

「飛鳥が頑張っているのも分かっている。だけど独りだけで抱え込まなくてもいいんだよ」

頭を撫でられて足から力が抜けて膝を衝き、涙が零れていく。

「俺は、俺はあいつらを守らなきゃいけないんだ。みんなを見捨てたから、殺したから。その命に報いるために守らなきゃいけないんだ……」

言葉が漏れる。涙は流れ続け、自分でも何が言いたいのか分からない。

ただ心の思うままに言葉を発する。

「知っていた、分かっていたのに何もしなかった。本当に幸せだった。だから変な事を言っただけ嫌われたくなくて、壊したくなかった」

額をイリヤの胸に押し付ける。涙が服に染み渡り俺の中から何かの流れていく。

「でもそれも壊れてしまった。何か行動を起こしていれば壊れずに済んだかもしれないんだ。あの人たちは俺を愛してくれたの俺は！」

イリヤが俺を抱きしめる腕に力が入るのを感じる。

「あの人たちは俺を、俺達を守って死んだ。多くの人たちが死んだんだ」

俺の独白は続く。まるで懺悔をしているようだと思ふ。

「例え知っていたとしてもただの子供に過ぎなかった飛鳥には何もできなかったでしょう。飛鳥に責任はないからそんなに自分を責めてはいけないわ」

イリヤの言うことも確かにそうだが、事実ただの子供に過ぎなかった俺にはきつと何も出来なかった。

「それでもイリヤを連れてくる時に人を殺したんだ。ただ目の前に立ちただかったから、許せなかったから。それは俺の犯した罪だ」

「私を連れてくるためだったんでしょ？ 私にも責任があるのよ。だから独りで抱え込まないで私にも背負わせて、私達は家族でしょ。」

「……………」

家族、イリヤはそう言ってくれた。

「お、俺は、人殺しの俺でもみんなの家族になれるのかな？」

イリヤは何も言わずただ俺を抱きしめる腕に力を入れる。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ……………」

俺は前世、今世を合わせて初めて声を上げて泣いた。

「大丈夫、大丈夫だから」

イリヤは俺を抱きしめ、頭を撫で続ける。その声は優しさに慈愛に満ち俺の罪を洗い流してくれるようだ。

「ああああああああああああああああああああああ……………」

俺は朝方まで泣き続け、疲れてイリヤと部屋に戻り寝てからは今までの疲れを癒すように丸一日眠り続けた。

家族編 本当の家族と罪の在処 (後書き)

設定変更をしたので、この先についてアンケートを取りたいと思います。

?このまま少年編を続ける(その場合、キャスター召喚から宝石翁と出会い修行までです(大まかな内容については『アーチャの過去と願い』をご覧ください))

?本編を続ける

?面白くないのでここで終わる

できれば今日16日中か、明日17日までお願いします。

案がなければ本編に戻ります。

家族編 魔女と母親 (前書き)

キヤスター召喚編です

やる気が低下していますが、何とか頑張りたいです

Side : 飛鳥

イリヤに諭されて丸一日眠り続けて眼が覚めると、士郎や桜、イリヤも家事を手伝ってくれるようになった。

それと二人に「今まで一人で家事をしてくれてありがとう」と、言われたのでどうしたのかと聞くとイリヤが俺が寝ているときに、

「飛鳥だけに家事をさせるのは不公平よ、私達も手伝いましょう」

と、士郎と桜に言ったのだそうだ。

二人とも家事なんてやったことがないからできないとイリヤに言ったが、

「最初はやったことがないのが当たり前でしょう。飛鳥だけに負担を掛けるわけにはいかないわ。事実、負担をかけて寝込んでいるんだしね」

そう言われて納得して家事を手伝ってくれるようになったのだ。

もちろん、三人とも今まで録に家事をやったことがないので、逆に汚したりもしてしまうが今まで誰かと家事をするということもなかったし、その気持ちだけでも嬉しい。

習い始めは後始末が大変だが、慣れてくれば上達してくるだろうと諦めている。

それと眼が覚めた次の日の夜、士郎と桜が寝た後に居間でイリヤに俺の知っていることを全て話した。

正直、一人で抱え込むには事が大きすぎることを実感したためだ。

それに親父が生きていた頃は相談できたのだが、親父亡き後はそれもできず一人で考えるのにも限界を感じたのだ。

で、話したのだがイリヤが、

「信じてるけど話だけでは信憑性が薄いから、確認の為に記憶を覗かせなさい」

それもそうだと言われて納得したので、

「じゃあお休み。イリヤ」

「ええ、お休み。飛鳥」

居間から寝室に戻り、一つの布団で寝ることに気恥ずかしさを感じたが、さっさと寝てしまうことにした。

そしてイリヤは自らの額を無防備に気持ちよさそうに寝ている飛鳥の額に重ねる。

目を閉じて寝ている少年を知るために。

飛鳥がイリヤに知っていることを話した次の日の夜、イリヤは衛宮の土蔵にいた。

イリヤは土蔵の中で、今朝の事を思い出す。

昨日の夜、飛鳥とイリヤは遅れた分の睡眠をきっちり取ってしまい寝過ごした。

幸い、今日の朝食の当番は土郎と桜であり、まだ起こしにこないの
で朝食の時間ではないのだろう。

朝食の当番を決めたのは簡単な朝食ならみんなにも任せても問題な
いと判断したからだ。

まだお越しにきていないが、パンを焼いているの匂いがしているの
で直ぐに起こしにくるだろうと思ひ、横で寝ているイリヤを揺り起
こす。

「ほら、イリヤ。朝だよ」

ユサユサと揺さぶると目がショボショボとしているが起きてくれた
ようだ。

しばらくブーツとしているイリヤを布団から退かして、寝ていた布
団を他の布団と合わせて片付ける。

「ん〜おはよう。飛鳥」

「おはよう、イリヤ」

布団を片付けた後にようやく目が覚めたようで朝の挨拶をする。

「で、どうだった？」

「間違いないわね、しかし何でゲームになっているのかしらね・・・」

確かに今ここにいる自分達がゲームになっていたら誰でもそう思うだろう。

「分からないけど現実はどこにあるんだし、気にしなくてもいいんじゃない？」

「そうね、気にしても仕方ないか・・・よし」

そしてイリヤは、がらりと雰囲気を変えた。

そこには先ほどのような、子供のような雰囲気はなかった。

「これよりイリヤスフィール・フォン・アインツベルンは衛宮飛鳥の家族となり、衛宮イリヤとなる。我が身を家族守るためにすべて差し出すことをここに誓う」

「イリヤ？」

そこには飛鳥が知っているイリヤではなく、まるで自分の魂よりも

上の年齢の女性のような雰囲気を出しているイリヤがいた。

「いい飛鳥、過去を忘れるとは言わないけど、現在いまを生きて幸せになりなさい」

そしてイリヤスフィール・フォン・アインツベルンはいなくなつた。

ここには衛宮イリヤという、衛宮飛鳥の家族がいた。

イリヤは飛鳥を自身の胸に抱き寄せる。

「イリヤ……………」

「一緒に生きていきましょう、飛鳥。ずっと私が守ってあげるから」

「ありがとう。イリヤ」

飛鳥はイリヤの胸の中で目を閉じ、そのぬくもりをしばらく感じていた。

「それと飛鳥。私のことは今からお姉ちゃんと呼びなさい」

落ち着いて離れた後の彼女の第一声がこれだった。その声は会った時より落ち着きのある声だった。

「なんでさ？」

いきなりそんなことを言われたので思わず士郎の口癖が出てしまった。

「私達は家族よ、知っていると思うけど先に生まれた私のほうが年上のよ、だからお姉ちゃん」

「いや、そうだけど前世合わせたら俺の方が年上なんだけど？」

「それでも私の方がおねえちゃんなの！」

「だから、俺の方が年上だと言ってるだろ」

二人のどちらが年上か、という言い合いは桜が二人を呼びに来るまで続き、朝食時まで言い合いを続けたがどちらも譲らず結局最後はじゃんけんで決めることになった。

「くっ！ あそこでチヨキを出していれば、私がお姉ちゃんだったのに！！」

今朝の事を思い出していたイリヤは、じゃんけんに負けたことに地団太を踏んだ。

「まだ言ってるの？ もういいじゃん、士郎は弟なんだし」

タイミングよく土蔵に来た飛鳥は、朝から今だに悔しがっているイリヤに呆れながら言った。

「それでもよー！！」

飛鳥ははあくつと未だに収まらないイリヤに思わず溜息が出る。

「収まりのつかないとこ悪いけど、時間もないし始めるよ」

「むっ！……………分かったわ。二人とも、もう寝た？」

「士郎を寝かせるのに苦労したけど、今は気持ちよく寝てるよ」

士郎と桜には、これからすることを知られたくないの为先に寝かせた。

「ふふ。面白いわね士郎は。桜も可愛いし」

「士郎は心配してなかったけど、桜が懐いてくれたようでよかったよ」

桜はあんなことがあってか身内には大丈夫だが、知らない人間や慣れてない人間にはやや臆病な子だから、イリヤに懐いてくれるかどうか飛鳥は少し心配だったが杞憂だったようだ。

「そうね。最初は距離を置かれていたけど今は可愛いものよ」

「ふふ、それは良かった。……………さてと、そろそろ時間だし始めようか」

そこで和やかな家族の時間は終わり、魔術師としての時間が始まる。

これから行うのはイリヤがサーヴァントの召喚を行う。

事前の話し合いでイリヤの魔力量ならこの地の聖杯の補助なしで、サーヴァント呼び出して維持できる。

元々、イリヤの体はサーヴァントのマスター用に調整されているから、よほど燃費の悪いもの以外なら維持することは可能だ。

「そう言えば聞いてなかったけど、何でこんなに早い時期にサーヴアントを呼ぶの？　しかもキャスターを」

「ちゃんと理由はあるよ。イリヤの体を治すこと、聖杯戦争の準備、俺達の魔術の師。そして俺たちの母親をしてほしいんだ」

「私の体？」

イリヤは理由に自分の体があることに疑問を持った。

「そう、イリヤの体。親父が言ってたけど聖杯として生まれたのが原因なのか、それともホムンクルスとしての弊害なのかは分からないけど寿命が短いんでしょう？」

「飛鳥。あなた……」

飛鳥はイリヤも助けてあげたかった。

原作では高確率で死ぬ可能性が高い、だからこの世界のイリヤには人間として長い人生を送ってほしい。

それをどうにかするために、魔術関係に詳しいキャスターが必要だった。

神代の時代に生きた彼女ならばと期待を持ったのだ、イリヤの問題をどうにかしてくれるのではないかと。

「でも、何でよりもよってあの『裏切りの魔女』なのよ。裏切られたどうする気？」

メディアア。ギリシャ神話における、『裏切りの魔女』。神の気まぐれの為にその運命をどこまでも狂わされ、裏切られ続けた悲劇の女王。それが彼女。

「俺が用意できる触媒で望むことができそうなサーヴァントが、キヤスターしかいなかったっていうのもあるんだけど、それほど悪い人に思えなくてね。まあ信じるしかないさ。さあ始めてくれ」

「ハア………仕方ないわね、触媒は？」

「はい、コレ」

そう言つて飛鳥が渡したのは捻じ曲がった刃物としての意味のない短剣。

「それじゃ、始めるわよ！………」

それだけ言つて、イリヤは魔力を全身に行き渡らせて、そして唱える。

「告げる。 汝の身は我の下に、我が命運は汝の杖に！」

周囲に魔力が迸る。イリヤの言葉一つ一つに、魔力が乗せられる。

これは、契約の詠唱。魔術師がサーヴァントと契約する為の、誓いの言葉。

「聖杯の寄る辺に従い、この意、この理に従うのなら応えよ」

詠唱と共にマナが脈動する……

「我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ。我に従え！ ならばこの我が命運、汝が杖に預けよう！」

瞬間、地面に魔法陣が走り、暗い土蔵に光が溢れる。

土蔵の中に光と砂塵が発生し、そして魔力の渦ができていた。

しばらくした後、光が収まっていく。

それが収まった後、魔方陣の中心に何かが見れた。体格からして女性で顔をフードで覆っている。

「サーヴァント・キャスター、聖杯の盟約により参上しました」

現れたサーヴァントは、俺達を、いやイリヤを見てとても澄んだ声で宣言した。

繋がったレイラインからイリヤがマスターだと理解しているのだから。

だが、その姿は青紫のローブで全身と顔を隠していて正直胡散臭い。

「あら、可愛いマスターなこと」

「……飛鳥、本当にこの人でいいの？」

イリヤはポツリと呟くように言った。

服装から非常に胡散臭く、弱そうで本当にこのサーヴァントは役に立つのだろうかといリヤは思い始めていた。

「大丈夫だよ（まあ正直胡散臭いけど）」

飛鳥も実際に会ってみると服装から怪しさ全開で胡散臭いとは思いますが、サーヴァントに選ばれているのだからその能力は確かのはずだ。まさかここまでよくある魔術師の格好そのまま登場するとは思わなかった。

一瞬、それはギャグでやっているのかと思ってしまったぐらいだ。

「本当かしら……」

イリヤは胡散臭げに自身が呼び出したサーヴァントをじろじろと眺めた。

「あら、なに？」

キャスターはマスターの視線に気付き、優しくイリヤに問いかけた。

「ねえ、飛鳥。服装が明らかに悪党っぽいんだけど」

それすらも胡散臭く聞こえるのは何故だろうか。

しかもマスターは英霊であるキャスターに実に失礼なことを言い始めるし。

「ちょ、ちょっと！ 何、召喚していきなりう胡散臭いとか失礼ね！ これでも凄いなだから！！」

まあ、初対面でここまで言われたら誰でも否定する。

「いや、俺もそう思うけど。悪い人ではないと思うよ、きっと」

「ちょっとそれフォローのつもりなの？ 何気に貴方も失礼な子ね！」

「ごめんなさい」

流石に言い過ぎだと自覚があるので素直に二人で謝る。断じてキャスターが怖かったからではない。

「はいはい、わかったわよ。かわいいマスターさんたち」

キャスターは深呼吸して気持ちを落ち着けてから思ってもいないことを言った。

「確認したい。あなたの真名はメディアであってるか？」

気を持ち直して飛鳥は、彼女の真名を確認する為にキャスターに問いかける。

「……………そうよ。私も質問をしたいわ。貴方たちはいつたい何者なの？」

貴方達とあるが実際にはイリヤと一緒にいる俺の事を聞きたいのだらう。

「何者かは俺の記憶を覗いて確認してくれ。それで全て分かるはずだから」

「ちよつと、飛鳥！」

いきなりそんなことを言い出す飛鳥にイリヤは注意の声を上げる。

その理由はキャスターは魔術師だからだと、まだ信用できていなか
らだ。

「大丈夫だよ。イリヤ。彼女はそんなことはしないとと思うから」

飛鳥にはイリヤが何を言いたいか分かっていたが、ここで引くこと
はできない。

これが一番信用を得るのに手っ取り早いと理解していたからだ。

「いいの？ 私の真名は、メディア。その意味がわかるでしょう？」

「ああ、分かってる」

キャスターが俺に問いかける。

ギリシヤ神話における、『裏切りの魔女』。神の気まぐれの為にそ
の運命をどこまでも狂わされ、裏切られ続けた悲劇の王女。それが
彼女。

「それでも、同じことが言えるの？」

「ああ、そう言ってくれるあなたなら信じられる。……………」
俺はあなたを　裏切らない」

じつと前を見据えて、静かに、ただ呟くように言ったその言葉が、
どれほど彼女の心に聞こえたか。

彼女はまた、目を瞑った。

そして。

「はあ……………分かったわ好きにきなさい」

「ありがとう、イリヤ……………それじゃあ始めてくれ」

「……………じゃあ、覗かせてもらっわ。貴方たちが何者な
のかを」

そしてキャスターは俺に手を伸ばして、魔術を発動した。

私はただ、怖かったのだ。また、裏切られるかもしれないことが。

だから、飛鳥に信じていると言われたことは嬉しかった。

「で、これからどうするつもりなの？」

私は目の前いるマスターの兄の飛鳥に尋ねた。

飛鳥は見た目通りの子供ではなかった。並行世界で生まれて何者かに魂だけで異世界へと連れて行かれるが、それは手違いで間違いに気付いた神？みたいなのが連れ戻すが余分なものまで付いてきて、それでこの世界に送られた。

それだけでも驚きなのに、この世界のことを最初の世界でゲームになっていて私達はその登場人物。そして今はこの子の影響で物語の筋道を外れている。

世の中にはこんな非常識な存在がいるとは、正直騙されたと言ったくらいである。

「まずは、イリヤの体を治してもらうのが第一だ。できるかな？」

「それは見てみないと分からないわね。治せるとしても最低限、道具と設備があつたほうがいいのだけねど」

現状で必要なものは設備と道具。

できれば、マスターが住んでいたアインツベルンならかなり大がかりな設備があったのだろうが、飛鳥が破壊してしまった為、今はもうない。

「じゃあ、ちよつと遠いけど郊外にあるアインツベルン城にホームクルス用の施設があるから、そこからいろいろ持ってきたら？ 多分誰もいないはずだから」

「そうか、でも……」

「そうね、どうやって運ぼうかしら」

マスターの案には賛成だけどどうやってここまで運ぶかが問題ね。

「（藤姉の所に頼むしかないかな）足は俺が何とかするよ……
……次は俺達の魔術の師をして欲しいんだ」

「どうして、今まではいなかったの？」

「親父が俺達を教えてくれてたんだけどね…… あゝ」

どうしたのかしら？、マスターの方を見て何かあるのかしら。

「私は別だけど父さまが飛鳥達を教えていたのよ。でも死んじやつたから師がいないのよ」

「と、そういうわけなんだ」

ラインを通してマスターの悲しみを感じる。聞いてはいけない話題だったようね。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんなの、ごめんなさいね」

「別に、いいわ。気にしていないから」

流石にこれは気まずいわね。あつ飛鳥がマスターの手を握ってから
悲しみの感情が薄まってきた。

これなら大丈夫そうね。

「それで他にもあるの？」

「他には第五次聖杯戦争に準備。そして俺たちの母親をしてほしい
んだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・母親？」

第五次聖杯戦争に準備は分かるけど何故、母親に？

「士郎も桜も母親がいたほうがいいと思うし、家に大人がいてほし
いんだ」

「母親ねえ・・・・・・・・・・・・・・・・」

確かに一理もあるし、そう言えば飛鳥の記憶では今まで父親がいた
けど母親がいたことはなかったわね。

普通の家庭には母親がいるものだし、彼らに普通の人生を歩んでも
らうには、母がいた方が彼らにとっても良い影響を与えられるから
だろう。

それに加えて私をずっと秘密にしておくというのも難しいし、長い期間あれば、二人に知られるのは間違いない。

あと子供だけで暮らすというのも世間体が悪く、誰かがこの家に介入してくる可能性もある。

「いいわ。やってあげる」

既に召喚されてしまっているし、この子たちの母親をするのもよいかもしれない。それに彼女たちは数ある中から自分を求めてくれた。メディアはフードを取って、顔を見せた。薄い水色の髪をした綺麗な女性だった。

そこに悪性のもものは感じられず、それどころか神聖のような、気高さがあった。

「ただし貴方たちも私のことをママと認めなさい。それが条件よ」
これならば、自分に嘘をつかなくていいし、昔の自分に、子に囲まれた幸せだった自分に帰ることができる。

「わかったよ。こんな美人な母さんなら最高だしね」

「本当フードを取ったら美人だね。これからよろしくね、ママ。それと私も名前でいいから」

「分かったわイリヤ。よしよし、いい子いい子」

メディアは、我が子となったイリヤの頭に手を伸ばして撫でる。

そして撫でた手に宿るその体温が、彼女が失ってしまった母性を思い出させた。

母親という立場のため、本当の自分をもう隠す必要がない。

私は自身が生んだ子を思い出す。

これは自身に対する償いへの機会なのかもしれない。

狂気に負けて、自身の子を殺してしまった罪を贖うための機会を、世界が与えてくれたのかもしれないと思いたい。

だからこの子たちの願いを叶えてやろう。それが、あの子たちへの贖罪となるのならば。

家族編 魔女と母親 (後書き)

筆者がもう一つ連載している『双子の弟は魔法忍者』も宜しく願
いします

これから更新は毎週土曜日になります。

感想、指摘などありましたら宜しく願います。

緊急報告

誠に申し訳ありませんが、本日を持ってこの小説の更新を一時ストップさせて頂きます。

前回に予告で書いておいてなんですがどうしてもアイデアが浮かばない、書く熱意がわかないのです。

それでも何時になるかは分かりませんが、この続きは何時か必ず書くのでそれまで待っていただけると幸いです。

次にこの小説の続きを書くときにはもっとうまく書けるようにしますので、ご容赦のことよろしく願います。

またアイデアがありましたら受け付けていますので、良いアイデアを頂けると嬉しいです。

それではまた何時の日か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7409k/>

FateBreaker

2010年10月9日16時43分発行